岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第343集

尿前Ⅱ遺跡B地区発掘調査報告書

胆沢ダム建設事業関連遺跡発掘調査

㈶岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

尿前Ⅱ遺跡B地区発掘調査報告書

胆沢ダム建設事業関連遺跡発掘調査

序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、平成10年度の岩手県教育委員会のまとめでは、10,500箇所に及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発に伴う社会資本の充実も重要な一施策であります。特にも本調査の原因となりました胆沢ダム建設事業を例に挙げるまでもなく、治山・治水・利水及びエネルギー開発は、多方面から期待されるところであります。このような埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和も今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとって参りました。

胆沢町尿前Ⅱ遺跡は、胆沢川左岸の崖錐上に立地し、本報告のＢ地区は、平成９年のＡ地区に続き、平成11年に発掘調査を行ったものであり、これにより縄文時代の集落跡であることが明らかになりました。縄文時代の住居跡や土坑の発見は、当時の生活を考える上で貴重な資料となるものであります。この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成にご協力、ご援助を賜りました建設省胆沢ダム工事事務所、胆沢町教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より謝意を表します。

平成１２年８月

財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　千　葉　浩　一

例　言

1．本報告書は、胆沢町若柳字尿前９番地に所在する尿前Ⅱ遺跡Ｂ地区の発掘調査結果を収録したものである。

2．本遺跡の岩手県遺跡登録台帳の遺跡番号と調査略号は、次のとおりである。

遺跡番号　ＮＥ21－２２３６　　調査番号　ＳＭⅡ－９９

3．本遺跡の調査は、胆沢ダム建設に伴う緊急発掘である。調査は建設省胆沢ダム工事事務所と岩手県教育委員会事務局文化課との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。

4．野外調査の期間と調査面積、調査及び整理担当者は次のとおりである。

期　間　　平成11年６月８日～10月29日

調査対象面積　　7,５００m²

調査終了面積　　7,５００m²

調査・整理担当者　小原眞一・布谷義彦

5．室内整理は平成11年11月１日～平成12年３月31日まで行った。本書の執筆、編集、校正は、小原が担当した。

6．出土品の鑑定は、次の機関及び方々に依頼した。（敬称略）

石器・石製品の材質鑑定……花崗岩研究会（矢内桂三・柳沢忠昭）

黒曜石の産地同定……佐々木繁喜（宮城県立若柳高等学校）

7．基準点の測量及び空中写真の撮影は次の機関に委託した。

基準点の測量……㈱東開技術　（本年度は97年に設定した杭の確認・補正をした）

空中写真撮影……㈱東邦航空

8．発掘調査において、次の機関の協力を得た。

胆沢町教育委員会

9．発掘調査及び整理・報告書の作成には、次の方の協力・指導をいただいた。（敬称略）

佐々木いく子（胆沢町教育委員会）　酒井宗孝（花巻市教育委員会）

10．野外作業では、若柳地区をはじめとする地元作業員の方々の協力をいただいた。また、室内整理においては、当センター臨時職員のみなさまの協力をいただいた。

11．本遺跡で出土した遺物及び調査資料は、岩手県立埋蔵文化財センターが保管している。

本文目次

序
例言
目次（本文・図版・表・写真図版）
報告書抄録
Ⅰ、調査に至る経過……3
Ⅱ、遺跡の立地と環境……3
　1．地形と地質……3
　2．周辺の遺跡……5
Ⅲ、調査の方法と室内整理……9
　1．調査の方法……9
　2．室内整理……10
Ⅳ、検出された遺構と遺物……11
　1．竪穴住居跡……11
　2．焼土遺構……15
　3．土器埋設遺構……15
　4．土坑……16
　5．溝跡……20
　6．段状遺構……21
　7．遺構外出土遺物……33
　　（1）土器……33
　　（2）土製品……34
　　（3）石器・石製品……34
　　（4）古銭……34
Ⅴ、まとめ……73
　1．遺構……73
　　（1）住居跡・土器埋設遺構・焼土……73
　　（2）土坑……73
　　（3）溝跡・段状遺構……73
　2．遺物……74
　　（1）土器・土製品……74
　　（2）石器・石製品……78
　　（3）古銭……78
表
　土器・土製品観察表……62
　石器・石製品観察表……69
　古銭観察表……72

図版・表目次

第１図　岩手県における遺跡の位置図……1
第２図　遺跡周辺地形図……2
第３図　遺跡周辺地形分類図……4
第４図　基本土層柱状図……5
第５図　周辺の遺跡分布図……6
第６図　グリッド配置図……9
第７図　実測図凡例……10
第８図　ⅡＣ１ｅ・ⅡＣ４ｆ・ⅡＣ８ｊ・ⅡＣ９ｅ住居跡……22
第９図　ⅡＣ９ｊ・ⅢＣ０ｅ住居跡……23
第10図　ⅢＣ３ｄ・ⅡＣ３ｇ住居跡……24
第11図　ⅡＣ４ａ・ⅡＣ７ｅ焼土　ⅢＣ４ｆ土器埋設遺構・土坑(１)……25
第12図　土坑(２)……26
第13図　土坑(３)……27
第14図　ⅡＢ６ｉ溝跡……28
第15図　ⅢＤ５ｇ溝跡・ⅢＤ０ｅ段状遺構……29
第16図　ⅣＣ３ｇ溝跡……30
第17図　遺構配置図……31
第18図　住居内出土遺物(１)……35
第19図　住居内出土遺物(２)……36
第20図　住居内出土遺物(３)……37
第21図　住居内出土遺物(４)・埋設土器・土坑内出土土器(１)……38
第22図　土坑内出土土器(２)・溝跡出土遺物……39
第23図　遺構外出土土器(１)……40
第24図　遺構外出土土器(２)……41
第25図　遺構外出土土器(３)……42
第26図　遺構外出土土器(４)……43
第27図　遺構外出土土器(５)……44
第28図　遺構外出土土器(６)……45
第29図　遺構外出土土器(７)……46
第30図　遺構外出土土器(８)……47
第31図　遺構外出土土器(９)・土製品……48
第32図　遺構外出土石器(１)……49
第33図　遺構外出土石器(２)……50
第34図　遺構外出土石器(３)……51
第35図　遺構外出土石器(４)……52
第36図　遺構外出土石器(５)……53
第37図　遺構外出土石器(６)……54
第38図　遺構外出土石器(７)……55
第39図　遺構外出土石器(８)……56
第40図　遺構外出土石器(９)……57
第41図　遺構外出土石器(10)……58
第42図　遺構外出土石器(11)……59
第43図　遺構外出土石器(12)・石製品……60
第44図　古銭……61
第45図　土器分布図……76
第46図　剝片分布図……77

表１　周辺の遺跡一覧……8
表２　遺構一覧表……21
表３　住居跡一覧表……32
表４　土坑一覧表……32
表５　土器分布表……75
表６　剝片分布表……75

写真図版目次

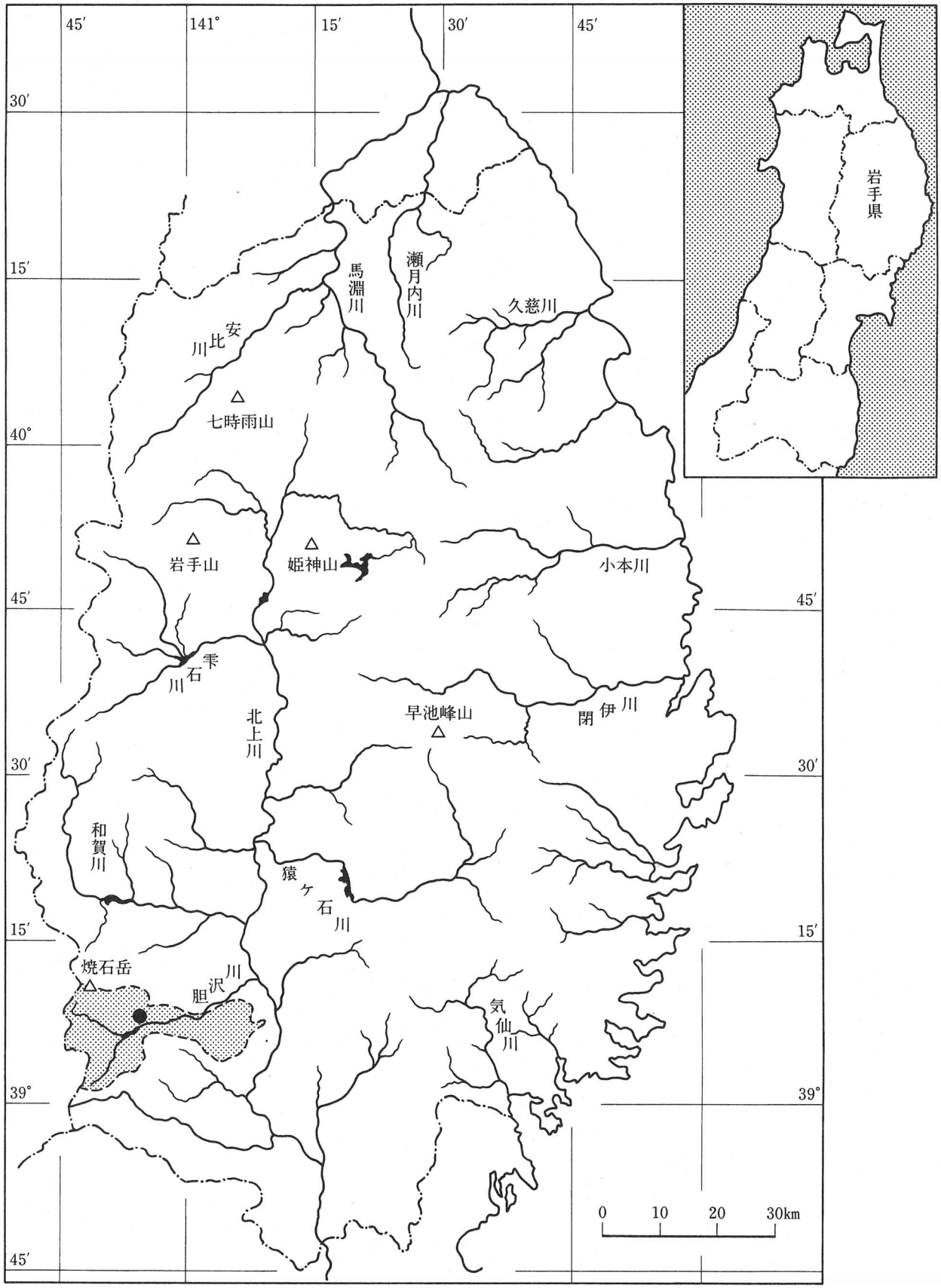
写真図版１　空中写真１……81
写真図版２　空中写真２・基本土層・作業風景……82
写真図版３　ⅡＣ１ｅ住居跡……83
写真図版４　ⅡＣ４ｆ住居跡……84
写真図版５　ⅡＣ８ｊ住居跡……85
写真図版６　ⅡＣ９ｅ住居跡……86
写真図版７　ⅡＣ９ｊ住居跡……87
写真図版８　ⅢＣ０ｅ住居跡……88
写真図版９　ⅢＣ３ｄ住居跡……89
写真図版10　ⅢＣ３ｇ住居跡……90
写真図版11　土坑１……91
写真図版12　土坑２……92
写真図版13　土坑３……93
写真図版14　土坑４……94
写真図版15　土坑５……95
写真図版16　焼土・土器埋設遺構・段状遺構……96
写真図版17　溝跡１……97
写真図版18　溝跡２……98
写真図版19　住居内出土遺物１……99
写真図版20　住居内出土遺物２……100
写真図版21　住居内出土遺物３・埋設土器・土坑内出土遺物１……101
写真図版22　土坑内出土遺物２・溝跡出土遺物・遺構外出土土器１……102
写真図版23　遺構外出土土器２……103
写真図版24　遺構外出土土器３……104
写真図版25　遺構外出土土器４……105
写真図版26　遺構外出土土器５……106
写真図版27　遺構外出土土器６……107
写真図版28　遺構外出土土器７・土製品……108
写真図版29　遺構外出土石器１……109
写真図版30　遺構外出土石器２……110
写真図版31　遺構外出土石器３……111
写真図版32　遺構外出土石器４……112
写真図版33　遺構外出土石器５……113
写真図版34　遺構外出土石器６……114
写真図版35　遺構外出土石器７……115
写真図版36　遺構外出土石器８・石製品・古銭……116

報告書抄録

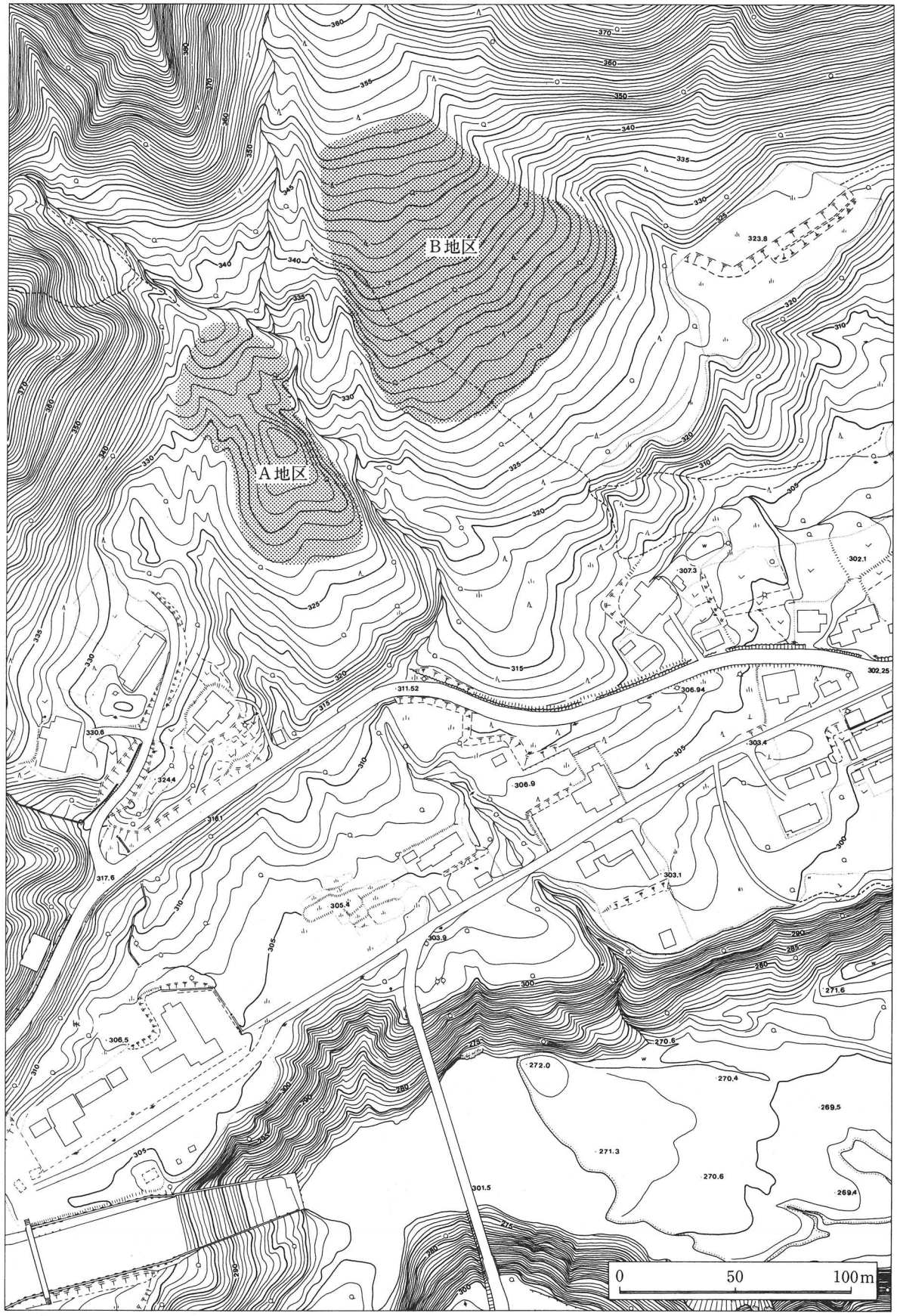
ふりがな	しとまえⅡいせきＢちくはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	尿前Ⅱ遺跡Ｂ地区発掘調査報告書
副書名	胆沢ダム建設事業関連遺跡発掘調査
巻　　次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第３４３集
編著者名	小原眞一
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 Tel.019-638-9001
発行年月日	西暦2000年９月30月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
尿前Ⅱ遺跡 しとまえ いせき	岩手県胆沢町 いわてけんいさわちょう 若柳字尿前 わかやなぎあざしとまえ ９番地 ばんち	03383	NE21-2236	39度 06分 54秒	140度 54分 32秒	19990608 ～ 19990922	7,500m²	「胆沢ダム建設」に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
尿前Ⅱ遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡　８棟 焼土遺構　２基 土器埋設遺構　１基 土坑　23基 溝跡　３条 段状遺構　１基	縄文土器（前･後･晩） ［後期前葉期主体］ 石器（石鏃･石匙･箆状石器・磨石類ほか）	



第１図　岩手県における遺跡の位置図



第2図　遺跡周辺地形図

I. 調査に至る経過

尿前Ⅱ遺跡は「胆沢ダム建設事業」に伴って、その事業区域内に位置することから発掘調査を実施することとなったものである。

胆沢ダムは、北上川右支川の胆沢川に建設される高さ132m、長さ745m、総貯水量１億4,300万m^3の中央コア型ロックフィルダムであり、水没面積は4,400千m^2である。

北上川水系は、本川の流況に影響を与える大支川が各所で合流するため洪水流出が急激な特性を持っていること。また一関市孤禅寺下流の狭窄部により洪水の流下が著しく妨げられその上流に遊水現象が生じる等のため、過去幾多の洪水で多大な損害を受けてきた。

このため、上流部（岩手県内）において昭和16年より洪水調節のため多目的ダム群の建設を骨子とした治水事業に着手してきた。しかし、近年の北上川流域の社会経済の発展に伴う人口、資産の増加等から昭和48年４月に改定された「北上川水系工事実施基本計画」に基づき上流ダム群の一つとして「胆沢ダム」を建設するもので、その目的は洪水調節・流水の正常な機能の維持・かんがい用水・水道用水・水力発電を行う多目的ダムであり、平成２年５月11日に「胆沢ダム建設に関する基本計画」が官報告示され今日に至っている。

埋蔵文化財の取り扱いについては、事業に先立ち昭和58年10月に建設省新石淵ダム調査事務所（昭和63年４月 胆沢ダム工事事務所と名称変更）から、ダム事業区域内の埋蔵文化財の有無の照会が岩手県教育委員会に出され、周知地区864,000m^2、可能性有地区490,000m^2が確認された。その後、水没面積を含む施行区域内の埋蔵文化財包蔵地の取扱いについて、毎年度各工事等の実施に先立って、岩手県教育委員会と協議を行いながら計画的に調査を実施しているところである。

尿前Ⅱ遺跡については、平成８年６月５日付け「建東胆工第９２号」により胆沢ダム工事事務所から岩手県教育委員会に試掘調査の依頼がなされた。依頼を受けた岩手県教育委員会は平成８年９月25日～27日の３日間試掘調査を実施しその結果トレンチ２箇所から縄文土器が検出され遺構が存在する可能性が高いことが判明、平成８年10月22日付け「教文第６１８号」で発掘調査が必要の旨の回答を胆沢ダム工事事務所に報告された。

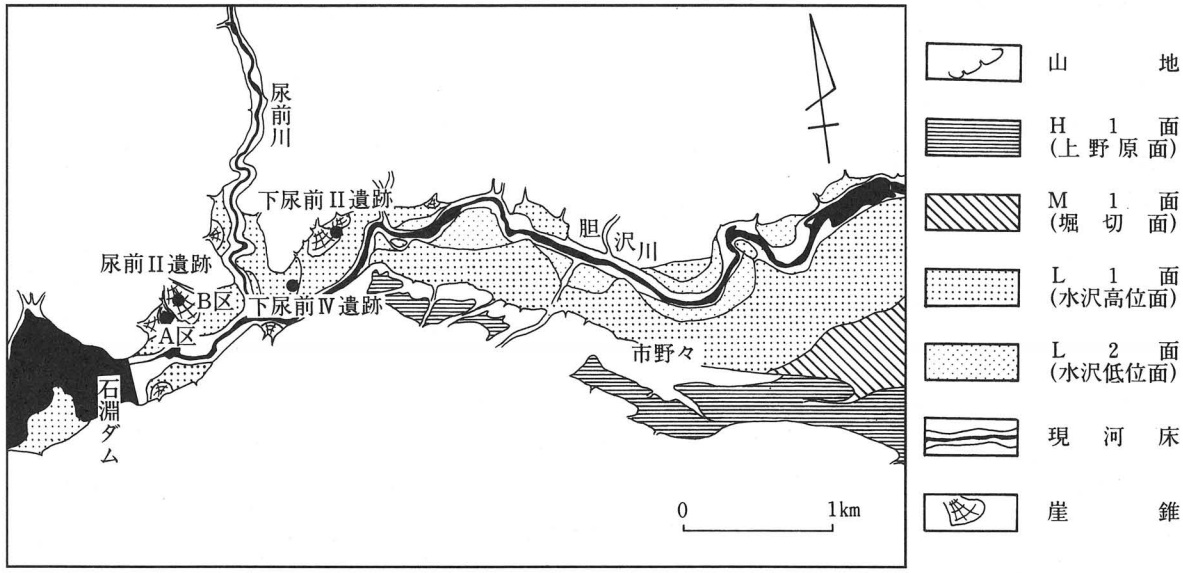
これに基づき両者が協議を行い、消滅する遺跡について事前に発掘調査を実施することとし、発掘調査事業については財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。なお、この箇所は平成９年度に発掘調査を8,800m^2実施済であり、引き続き、残りの部分7,500m^2を平成11年度に実施することとしたものである。

II. 遺跡の立地と環境

１．地形と地質

胆沢川の上・中流域をその範囲とする胆沢町は、岩手県の南西部に位置し、北は金ケ崎町・北上市・湯田町、東は水沢市・前沢町、南は衣川村、西は秋田県東成瀬村に接している。

奥羽山系の焼石岳（1,548m）南西麓に源を発する胆沢川は、山岳部で小出川・前川・尿前川を合わせて東流する。市野々地区で山地を離れた流れは、当地区を扇頂として扇長約18km、扇端幅約19km、面積約200km^2の県内最大の扇状地（胆沢扇状地）を形成し、北西から下る永沢川・黒沢川を合わせて、水沢市佐倉河付近で北上川に合流する。流路延長45km、流域面積320km^2の１級河川である。



第３図　遺跡周辺地形分類図

胆沢扇状地は、更新世中期から後期にかけて形成されたと考えられ、胆沢川の開析を受けて段丘化している。これらの段丘については、中川ほか（1963ｂ）、斉藤（1978）、大上・吉田（1984）、渡辺（1991）の研究があるが、渡辺と大上･吉田の区分を参考にすると、胆沢扇状地は、高位からＴ１（大歩面）・Ｔ２（一首坂面）・Ｔ３（西根面）、Ｈ１（上野原面）・Ｈ２（横道面）、Ｍ１（堀切面）・Ｍ２（福原面）、Ｌ１（水沢高位面）・Ｌ２（水沢低位面）の９面に区分されている。各段丘は、本流である北上川の流下方向とは逆に高位から漸次北に配列され、現在の胆沢川は北端の扇側部に沿って流れている。なお、山岳部での隣接市町村境界は峰々の分水嶺となっており、扇状地を形成した集水域とほぼ一致する。

東北地方の脊梁をなす奥羽山脈は、中新世以降のグリーンタフ変動によって形成され、新第三系及び火山岩類を主体とする褶曲山地で、現在でも活動している火山もある。形成期が比較的新しいため、この山地に源を持つ北上川の西側支流に多量の土砂を供給し、中流域西岸では前述の胆沢扇状地をはじめとする大小の扇状地が発達し、広い平野部を作り出している。

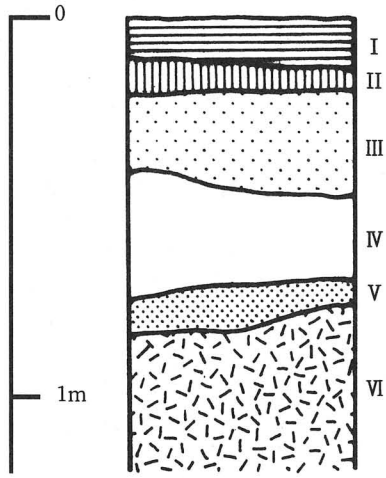
尿前Ⅱ遺跡は、北緯39°06′54″、東経140°54′32″付近、石淵ダムの北東約500ｍの距離にあり、国土地理院の1:25,000の地形図では「石淵ダム」の図幅に含まれる。ダムから扇頂となる市野々地区までは約３kmで、この間は谷底平野地形を呈し、両岸には40～45°の比較的急峻な斜面が迫る。また、胆沢川に沿って小規模な河岸段丘が発達し、山地と接する部分は崖錐性堆積物が覆い緩斜面地形をなしている。周辺の基盤は、新第三系紀尿前層の石英安山岩類である。

本遺跡周辺（第３図）には、３段の段丘が観察される。最も高位の段丘はＴ３面（西根面）で、馬留地区右岸の標高330ｍ付近に僅かに平坦面を残す。谷底部で最も広がるのはＬ１面（水沢高位面）で、Ｌ２面（水沢低位面）は馬留橋より下流に分布する。 胆沢川と尿前川の合流地点付近にはＬ１面より約２ｍ高い面がある。

また、Ｌ１面を崖錐が覆っている。遺跡は、胆沢川左岸のＬ１面を覆う崖錐上に立地している。

標高は330～350mで、勾配16°前後の傾斜がある。1997年度に調査したA調査区は、沢をはさんで西側に位置している。現河床面からの比高は60mで、現状は山林であった。

第４図は、B調査区における標高345m地点の深堀の土層断面で、これを基本層序とした。なお、B調査区は、1997年の調査の時点で表土除去を行っているので、表土より下位の土層について記載する。



第４図　基本土層柱状図

第Ⅰ層　黒褐色土（層厚：10～15cm）　地点によって欠如するが、住居・土坑、風倒木といった窪みの上部に灰白色の火山灰（十和田ａ火山灰）が厚く堆積している。縄文時代の遺物を含む。

第Ⅱ層　暗褐色土（層厚：5～10cm）　Ⅰ層との漸移層的層相を示す。縄文時代の遺物を含む。

第Ⅲ層　黄褐色砂質土（層厚：20～30cm）　ローム質で火山灰と思われるが、砂礫の混入が多く、再堆積層であろう。当層が、最終遺構検出面である。

第Ⅳ層　明黄褐色砂質土（層厚：25～35cm）Ⅲ層とほぼ同じだが、石英安山岩の礫を多数含む。

第Ⅴ層　褐色粘土（層厚：5～10cm）　ローム質で火山灰と思われるが、詳細は不明である。

第Ⅵ層　褐色～明褐色砂質土（層厚：40cm以上）　崖錐性堆積物。石英安山岩の大きな礫を含む。含まれる礫は風化が進んでいて脆い。

２．周辺の遺跡

平成11年度の岩手県教育委員会のまとめでは、胆沢町内には171ヶ所の遺跡が登録されている。第５図には周辺区域における遺跡（表１）の分布を示した。ここでは近年調査された遺跡を中心に、町内の遺跡を概観してみたい。

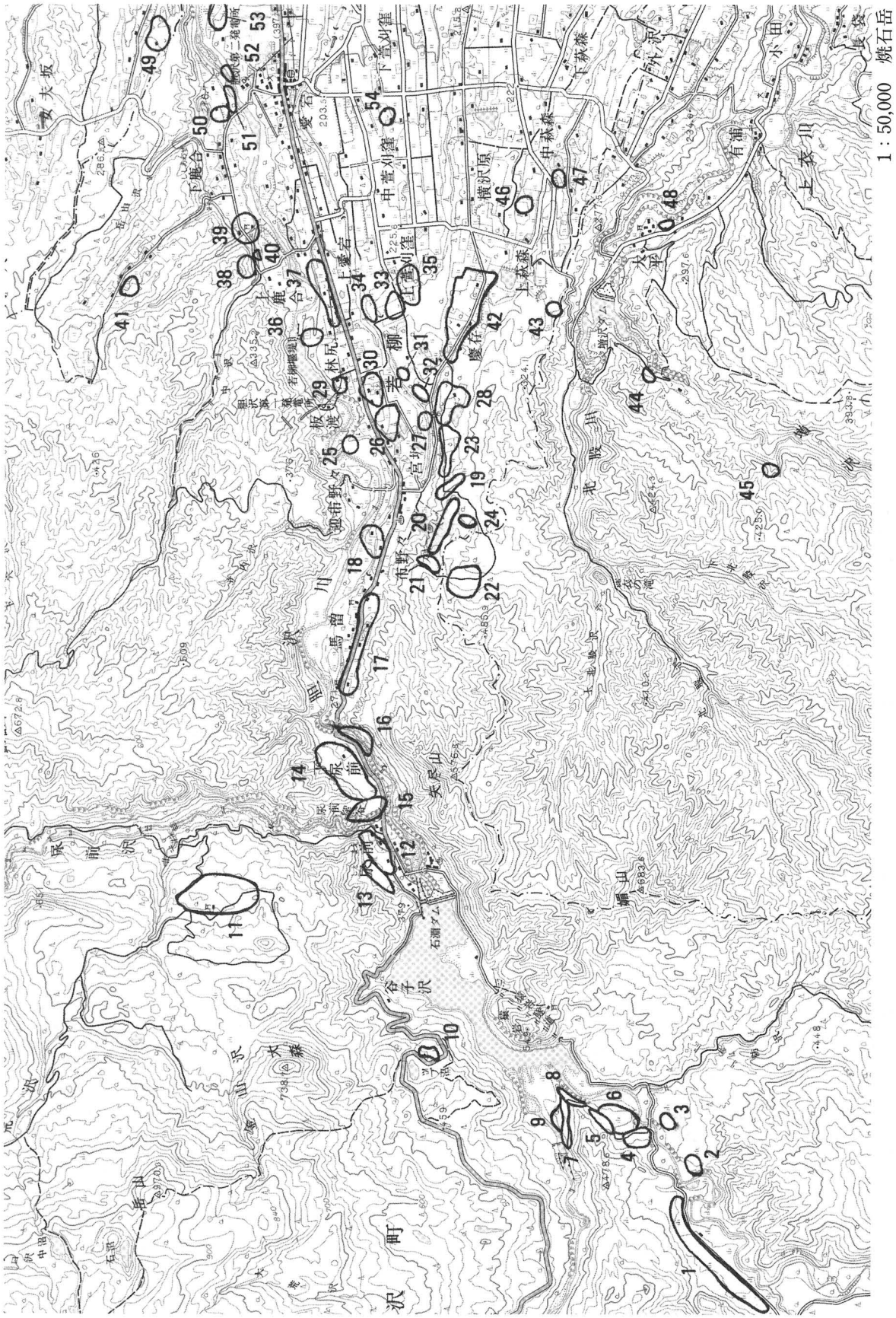
旧石器時代の遺跡としては上萩森遺跡があり、昭和50年～52年に３次にわたって発掘調査が行われた。調査の結果２面の文化層が確認され、ナイフ形石器、彫器、スクレイパー等の石器が出土している。いずれも後期旧石器時代にあたり、下部のⅡｂ文化層は前半期～中葉期に位置づけられている。この他に山神遺跡から石刃、上佐布遺跡から尖頭器が発見されている。

縄文時代の遺跡は多く、全体の８割を占め、沖積面を除く各段丘に分布する。草創期に位置づけられる遺跡は確認されていないが、下尿前Ⅳ遺跡から小瀬ヶ沢型に類似する有舌尖頭器２点が出土している。

早期の遺跡は比較的多く、相当数の遺跡から土器破片が発見されている。調査された遺跡では尼坂遺跡があり、貝殻沈線文、貝殻条痕文、縄文条痕文、縄文縄文期の各住居跡が検出されている。

前期の土器も広範囲に分布している。芦の随遺跡では前葉期の住居跡群、大清水上遺跡では末葉期（大木６式）の大型住居跡を含む住居跡群が検出されており、集落跡であることが確認された。また、浅野遺跡からも末葉期の住居が検出されている。

中期の遺跡では宮沢原遺跡群があり、前葉～末葉（大木７ａ～10式）にわたる住居跡が多数検出されている。このうち、宮沢原Ａ・Ｅ・Ｅ東遺跡における大木９～10式期の住居跡では、「上原型複式炉」と呼ばれる土器埋設石囲部と石敷き石組部からなる複式炉をもつものが多く、注目に値する。



第５図　周辺の遺跡分布図

後期になると扇状地地帯では、早～中期より下位の段丘面に分布する傾向が窺われるが、遺構を確認している遺跡は少なく、わずかに宮沢原Ｄ遺跡から初頭期(門前式期)の可能性がある立石を伴う土坑が検出されているだけである。なお、同Ｃ遺跡からは、門前式期の人面付き土器が発見されている。また、当遺跡Ａ地区および下尿前Ⅱ遺跡からは、後期前葉～中葉期に位置づけられる可能性をもつ住居跡と土坑が検出されている。

晩期の遺跡も後期と同様な分布域を示すようであるが、詳細が不明なものが多い。隣接する水沢市、前沢町の低位段丘縁辺部には、根岸遺跡・杉の堂遺跡・川岸場遺跡等があり、より河浜に寄った立地が窺われる。町内では、後葉期（大洞Ａ式）の墓壙と炉跡が検出されている南中沢遺跡がある。

弥生時代前期～後期の遺物は町内各地から出土しているが、量的には少なく遺跡の調査例も無い。しかし、昭和52年に大清水下遺跡から県内で初めて石包丁２個が発見され、当地方において稲作が確実に行なわれていたことが実証された。

古墳時代には、県内で最大最古の古墳であると共に、埴輪を伴う国内最北端の前方後円墳である角塚古墳があり、国の指定遺跡となっている。造営年代としては５世紀末～６世紀初頭が考えられており、北方約２kmに立地する中半入遺跡では、これとほぼ同時期の方形に区画された濠をもつ集落跡や水田遺構が確認され、角塚古墳との関連も考えられる。この中半入遺跡の住居跡からは最初期の須恵器・瓦(はそう)が出土している。

奈良・平安時代の当地域は、律令制古代国家と在地勢力である「蝦夷」との間に繰り広げられる「蝦夷征伐」と「反抗」の表舞台となり、「胆沢城」をはじめとして「胆沢」の名称はしばしば文献上に登場する。町内での該期遺跡の調査例は少ないが、扇状地地帯には多くの遺跡が登録されている。８世紀代の遺跡としては、沢田遺跡、要害遺跡等、９世紀以降の遺跡としては同沢田遺跡、宇南田遺跡、小十文字遺跡等から住居跡が検出されている。

中世・近世の城館跡は９箇所が登録されている。このうち柏山氏の家臣高橋盛富の居館との伝承がある鹿合館は、本丸（主郭部）と物見台（出郭部）から構成される典型的な山城である。調査により主郭部から空堀、土塁、掘立柱建物跡等の遺構が検出され、小札、鏃等の鉄製品や陶磁器類が出土している。

〈参考・引用文献〉

（１）中川久夫ほか（1963ｂ）；「北上川中流域の第四系および地形～北上川流域の第四紀地史(2)」『地質学雑誌第96巻第811号』

（２）斉藤享治（1978）；「岩手県胆沢川流域における段丘形成」.『地理学評論，５１，ｐ852～863』.

（３）大上和良・吉田充（1984）；「北上川，胆沢扇状地における火山灰層序」.『岩手大学工学部研究報告，37，ｐ69～81』.

（４）渡辺満久（1991）；「北上低地帯における河成段丘面の編年及び後期更新世における岩屑供給」,『第四紀研究，30，(1)』.

（５）中川久夫（1981）；「第四系」.『北上川流域地質図（二十万分之一）説明書』.㈱長谷地質事務所.

（６）建設省（1990）；「ダムサイトの地形と地質」.『胆沢ダム』.胆沢ダム工事事務所.

（７）岩手県教育委員会（1999）；「岩手県埋蔵文化財包蔵地一覧」.

（８）胆沢町（1981）；「原始古代編」.『胆沢町史Ⅰ』.

（９）胆沢町教育委員会（1992）；「尼坂遺跡　第二次緊急発掘調査報告書」.

（10）胆沢町教育委員会（1990）；「鹿合館跡　調査報告書」.

表１　周辺の遺跡一覧

No	遺跡名	種　別	時　代　・　備　考
1	大平野Ⅰ	散布地	縄文 土器
2	平根原Ⅰ	散布地	縄文 土器
3	平根原Ⅱ	散布地	縄文 土器
4	坪渕Ⅰ	散布地	縄文 土器
5	坪渕Ⅱ	散布地	縄文 土器（中期）
6	坪渕Ⅲ	散布地	縄文 土器
7	下嵐江Ⅰ	散布地	縄文 土器
8	下嵐江Ⅱ	散布地	縄文 土器
9	下嵐江Ⅲ	散布地	縄文 土器
10	谷子沢	散布地	縄文 土器
11	蜂谷	散布地	縄文 土器 石器
12	尿前Ⅰ	散布地	縄文 土器
13	尿前Ⅱ	集落跡	縄文土器（早･前･後･晩期） 石器住居跡坑　報告遺跡
14	下尿前Ⅰ	集落跡	縄文：住居跡（中･後期） 土坑 土器（早～晩期） 石器弥生：土器 中・近世 下尿前Ⅱ･Ⅲを統合 H５～７調査
15	下尿前Ⅱ	散布地	縄文：土器（早･前期）有舌尖頭器 弥生：土器アメリカ式石鏃 下尿前Ⅳを改名 H８調査
16	穴山堰跡	用水堰跡	江戸末期～石積 水門 水門遮水板 H10調査
17	馬留	散布地	縄文 土器
18	市野々	散布地	縄文 土器 須恵器
19	なめだけⅠ	散布地	縄文 土器
20	なめだけⅡ	散布地	縄文 土器
21	なめだけⅢ	散布地	縄文 土器
22	僧寺	散布地	縄文 土器
23	大清水上	散布地	縄文土器（早･前･後･晩期） 石鏃 槍 他一部調査
24	大清水上Ⅱ	散布地	縄文 土器
25	猪の鼻館（栄の華館）	散布地	近世 二郭 空堀 土塁
26	宮坂	散布地	縄文 土器（後期） 石鏃
27	横沢原	散布地	縄文 土器
28	大清水	散布地	縄文 土器（早･前･後･晩期） 石鏃 槍 他
29	林尻	散布地	縄文 土器
30	三本柳	散布地	縄文 土器（後・晩器） 土偶
31	横沢原Ⅱ	散布地	縄文 土器
32	横沢原Ⅲ	散布地	縄文 土器
33	横沢原Ⅳ	散布地	縄文 土器
34	宮沢原Ⅱ	散布地	縄文 土器
35	萱刈窪Ⅱ	散布地	縄文 土器
36	萩袋	散布地	縄文 土器（後期） 土偶 土師器
37	上愛宕原	散布地	縄文／弥生 縄文土器（後・晩期） 弥生土器 石匙 石鏃
38	鹿合館（山居館）	城館跡	中世末期 空堀 掘立柱建物跡 小札 陶器 石匙 石鏃
39	南中沢	散布地	縄文土器（後・晩期） 石匙 石鏃 石斧 石棒 一部調査
40	上鹿合	集落跡	縄文 土器 石器
41	岳山	散布地	縄文／古代 縄文土器（後・晩期） 土師器
42	上横沢原	散布地	縄文 土器（後・晩期） 土偶
43	上萩森	散布地	旧石器・ナイフ形石器スクレーパー石核一部調査
44	松山寺	寺院跡	中世 石垣
45	小谷館	城館跡	中世
46	萩森北	散布地	縄文 土器（前・中期） 石斧 飾具
47	前萩森	散布地	縄文 土器（前・中期） 石斧 飾具
48	大平	散布地	縄文 土器
49	中山	散布地	縄文 土器（中・晩期）
50	下鹿合東	散布地	縄文 土器（晩期）
51	下鹿合東Ⅱ	散布地	縄文 土器（晩期）
52	かどっしょ	散布地	縄文／古代 縄文土器 土師器
53	門ヶ城	城館跡	中世 三郭
54	萱刈窪	散布地	縄文 土器（晩期） 石匙 石斧 石鏃 石槍 石剣
55	宮沢原成沢	散布地	縄文 土器（前･中期） 石匙 石斧

Ⅲ. 調査の方法と室内整理

1. 調査の方法

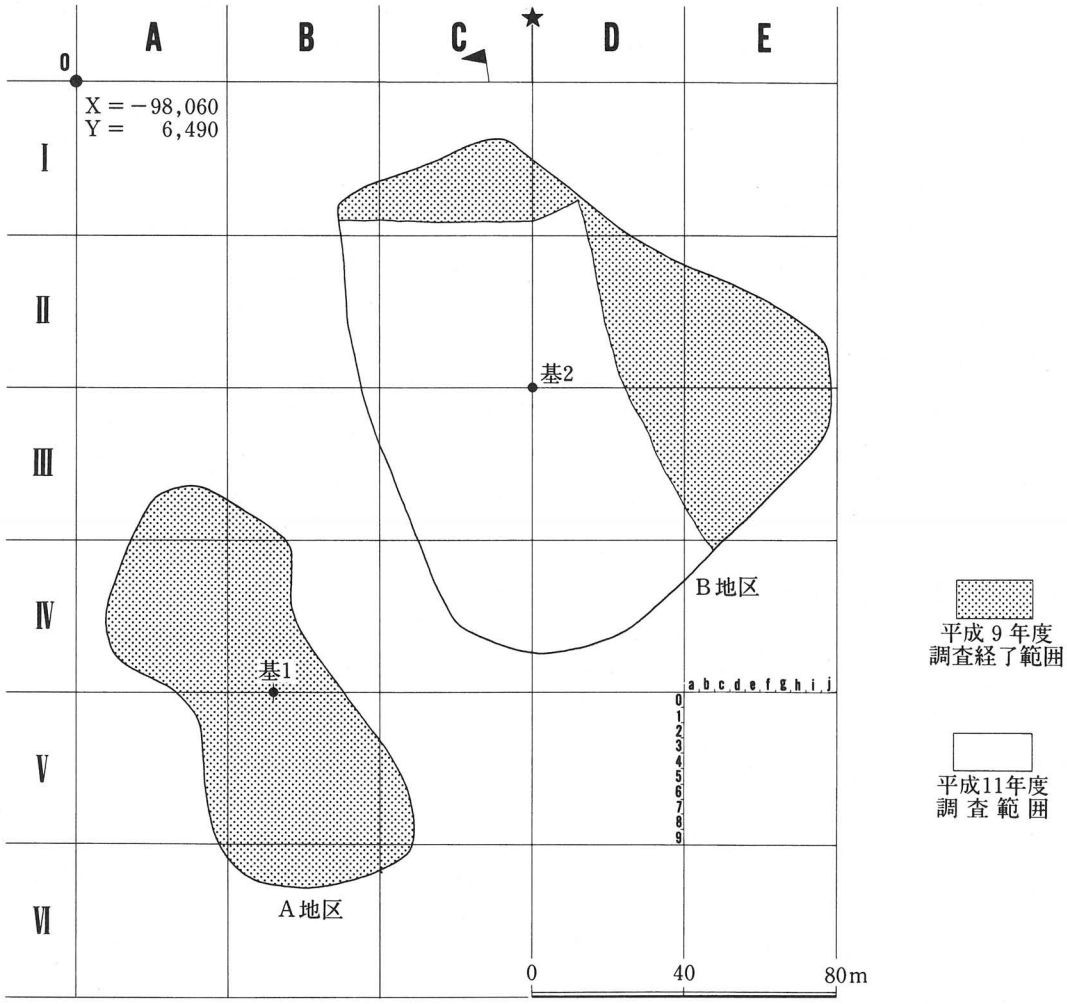
(1) グリッドの設定と遺構名

グリッドは平面直角座標系（第Ｘ系）に合わせＡ・Ｂ地区同時に設定した。調査区の北西に起点Ｏ（Ｘ＝98,060、Ｙ＝6,490）を設け、Ｏから南東方向に40×40ｍのメッシュで調査区全体を大きく区割した。この大区画には、起点Ｏから南にⅠ・Ⅱ・Ⅲ…の番号、東にＡ・Ｂ・Ｃ…のアルファベットを付してⅠＡ・ⅡＡと呼称した。さらに大区画を10等分して４×４ｍに小区画し、北から０～９、西からａ～ｊを付しⅠＡ１ａ・ⅡＢ３ｅ等の小グリッドを設定した。調査区内には、小グリッドに沿った地点に基１（Ｘ＝－98,220、Ｙ＝6,542）、基２（Ｘ＝－98,140、Ｙ＝6,610）と補１～補８を設置して、区割り及び実測の基準点とした。（第６図）

遺構名は、検出された順に小グリッド名を付し、同一グリッド内に同様な遺構が複数ある場合は①、②をつけて、ⅠＡ２ｂ住居跡、ⅡＢ３ｃ①土坑等と呼称した。遺構が複数のグリッドにかかる場合は、より若い区画名を取ったが厳密なものではない。

(2) 粗掘と検出・遺構の精査と遺物の取り上げ

平成９年度の遺跡調査の際、遺構検出面までの深さおよび層序の確認のため、調査区全体に幅約２ｍのト



第６図　グリッド配置図

レンチを設定している。その結果、表土より下の層には縄文時代の遺物が包含されていることが確認され、表土のみ重機（パワーショベル）を使用して除去を行なった。

今回の調査は、この表土除去後からの行程となり、すべて人力によって遺構の有無を確認しながら掘り下げ、検出を行なった。検出された遺構は住居跡は４分法、土坑類は２分法を原則として精査を行なったが、必要に応じてその他の方法も併用した。精査の各段階において図面の作成や写真撮影を適宜行なった。

遺構内出土遺物は、埋土では層位に分けて取り上げ、床面や底面出土の遺物は、必要に応じて写真撮影、図面作成の後に取り上げた。遺構外出土遺物については、グリッド毎に出土した層位を記して取り上げた。

(3)　実測と写真撮影

遺構の平面実測にあたっては、トータル・ステーションを用い基準点を設定する簡易的な遣り方測量を行った。実測図は平面図・断面図とも1/20縮尺での作成を原則としたが、住居内の炉の断面や焼土遺構・配石遺構は1/10の縮尺で図面を製作した。

写真撮影は６×７cm判カメラ（モノクロ）をメインとし、これに35mm判カメラ２台（モノクロ・カラーリバーサル）を補助カメラ、ポラロイドカメラ１台をメモ的な用途として使用した。また、調査終了前に小型飛行機による空中写真（６×７cm判モノクロ・カラー）の撮影を行った。

２．室内整理

室内での作業は、野外調査で作成した遺構図面の点検と補正およびトレース、遺物の接合・復原・仕分けなどを行ない、次に実測・計量・拓本・写真撮影・トレースを並行して進め、図版を作成した。個々の整理方法および縮尺は次のとおりである。

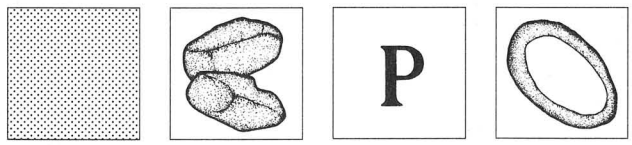
(1)　遺構

遺構配置図は発掘調査時に作成した図面を基に１/200の縮尺図を作成し、仕上がり１/600で掲載した。各遺構図面は以下の縮尺を原則としたが、一部に変更もあり、図面にはそれぞれスケールを付した。住居跡の平・断面図…１/50、炉の断面図…１/25、土坑の平・断面図…１/50、焼土遺構・配石遺構の平・断面図…１/25。なお、平面図における北印は座標北を示す（基１における真北方向角は０°02′52″西偏する）。

(2)　遺物

土器の実測は原則として、反転実測が可能なもの（口縁部・底部が１/４以上残存するもの）に限ったが、器面に凹凸が著しく、拓本では表現出来ないものや、大型の破片については平面実測して掲載した。また、地紋のみが施されているものや、文様が単純なものは、中軸線の左側１/２のみを図化した。掲載遺物の縮尺率は次のとおりであるが、遺物によってはこの限りではない。土器の実測図・拓本…１/３、剥片石器・石製品…１/２、磨製石斧・礫石器…１/３、大型の土器…１/５。

遺物写真の縮尺については、ほぼ実測図に準じている。また、実測図中の遺構・遺物の表現や、使用した記号・スクリーントーンについては、凡例を第７図に示した。



焼土　礫　土器　磨り面

第７図　実測図凡例

Ⅳ. 検出された遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡８棟、焼土遺構２基、土器埋設遺構１基、土坑23基、溝跡３条、段状遺構１基である。竪穴住居跡、焼土遺構、土器埋設遺構、調査区南端の、Ｄ１ｂ①・②土坑を除くその他の土坑は、検出面及び出土土器から縄文時代の遺構である。その他の土坑と溝跡、段状遺構については、時期を決定づける遺物の出土はない。

遺物は、全部で大コンテナ10箱で、その内土器は縄文時代の土器が中心で９箱、石器が１箱である。石器の主なものとしては、石鏃、石匙、篦状石器、磨製石斧、磨石類である。そのほかに、古銭が５枚出土している。

１．竪穴住居跡

ⅡＣ１ｅ住居跡

遺構（第８図・写真図版３）

〈検出状況・重複関係〉調査区北端、標高347ｍ付近に位置する。ⅡＣ２ｅ①・②土坑の精査中に床面を検出した。土坑と重複するが、本住居跡の方が古い。

〈規模・平面形〉東西2.3ｍ、南北3.1ｍのいびつな隅丸方形を呈する。

〈埋土〉図化できなかったが、炭化物を含む黄褐色・褐色土であった。

〈壁・床面〉壁は緩く外傾し、北壁の壁高は30～40cm位である。南壁から東壁にかけてはⅡＣ２ｅ①・②土坑に切られている。床面北西隅に20×４×26cmの角礫が立ててある。

〈柱穴〉検出されなかった。

〈炉〉床面中央付近まで土坑によって切られているので、不明である。

遺物（第18図　１）

〈出土状況〉埋土中から土器数点が出土している。石器の出土はない。

〈土器〉１は深鉢の口縁部で、単節の原体を横に回転している。

時期　出土した土器の特徴から縄文時代後期前葉期の遺構の可能性が高い。

ⅢＣ４ｆ住居跡

遺構（第８図・写真図版４）

〈検出状況・重複関係〉調査区北側標高345ｍ付近で風倒木の黒褐色土を除去中、炉の焼土を検出した。当初、重複関係にあるⅡＣ４ｆ土坑中の投げ込みの焼土と誤認して、先に土坑を精査してしまったが、その後焼土が土坑外にも続くことが確認され、本住居は土坑埋没後に構築されたことがわかった。東側と南側は風倒木によって攪乱を受けている。

〈規模・平面形〉検出されたのが、炉と柱穴のみであるので、規模や平面形については不明である。炉と柱穴との距離が２ｍ前後あるので、規模は約４ｍ程度と推定される。

〈壁・床面〉壁は検出できなかった。床面は柱穴が検出された面よりも、焼土が検出された地点が低くなる浅い窪み状をなしている。

〈柱穴〉３基検出した。規模は、径が60cm、深さが50～60cmである。いずれも炉と見なした焼土の北西側に位置している。東側と南側は風倒木によって破壊されたものと思われる。

〈炉〉地床炉で、焼土の範囲は96×30cm、厚さ15cmのひょうたんのような形をしている。東側が、検出面より高くなっているのは、風倒木によって盛り上げられたためと思われる。

遺物（第18図　２～５）

〈出土状況〉土器４点がいずれも柱穴Ｐ１・２から出土している。

〈土器〉２、３は深鉢で沈線を主体とする文様をしている。２は波状口縁の波頂部にＣ字文、頸部は磨消、肩部には横長の楕円形文、その文様の間には１ないし２個の刺突がある。胴部には、下部が開いた沈線区画に磨消を行っている。３も胴部下半のみだが、縦長の沈線によって施文される。４は頸部に連鎖状隆帯がめぐる。

時期　出土した土器の特徴から縄文時代後期前葉期の遺構の可能性が高い。

ⅡＣ８ｊ住居跡

遺構（第８図・写真図版５）

〈検出状況・重複関係〉調査区中央標高341ｍ付近で、黒褐色土の広がりで検出した。重複関係はないが、南側に位置するⅡＣ９ｊ住居との距離は、1.4ｍと近接している。

〈規模・平面形〉2.3×2.0ｍの円形に近い楕円形を呈する。北西に張り出しがあるが住居に伴うものか不明である。

〈埋土〉焼土や炭化物を含む黒褐色土、暗褐色土、にぶい黄褐色土の３層からなる。

〈壁・床面〉壁は僅かに外傾する。床面は斜面下方に向かって僅かに傾き、締まりがある。

〈柱穴〉検出されなかった。

〈炉〉地床炉と思われる焼土が、床面南西寄りから検出された。焼土形成後に設置された礫のため切られているが残存する部分では、厚さ５cm、30×30cmの範囲を持つ。焼土の南西側に、32×20×10cmの円礫が側面を上下になるように立ててある。設置されたのは、焼土形成後である。

遺物（第18図　６・７）

〈出土状況〉埋土中から土器１点と円盤状土製品１点、剝片１点が出土している。剝片には使用痕が認められなかったので図化及び記述は省略した。

〈土器〉６は胴部破片で、３状の平行沈線で倒卵状のモチーフの中に渦巻文を施文するものと見られる。７は径が5.0×4.5cm、厚さ７mm、重量20.3ｇの円盤状土製品である。

時期　出土した土器の特徴から縄文時代後期前葉期の遺構の可能性が高い。

ⅡＣ９ｅ住居跡

遺構（第８図・写真図版６）

〈検出状況・重複関係〉調査区中央標高343ｍ付近で、炭化物・焼土を含む黒褐色土、暗褐色土の広がりとして検出した。重複関係はないが、南側に隣接するⅢＣ０ｅ住居とは、2.5ｍしか離れていない。

〈規模・平面形〉斜面下方にあたる南壁は残存していないが、東西2.2ｍ、南北２ｍの隅丸方形に近い楕円形を呈すると見られる。

〈埋土〉炭化物、焼土、褐色土の混在する黒褐色土、暗褐色土からなり、人為的に埋め戻されたような堆積状況である。床面から炭化物が検出できなかったが、焼失住居の可能性がある。

〈壁・床面〉壁は緩く外傾する。床面は、斜面下方に僅かに傾斜し、比較的締まりがある。

〈柱穴〉検出されなかった。
〈炉〉床面中央東寄りで、24×10×27cmの扁平な円礫の立石を検出した。床面中央側に僅かに傾いている。石囲炉として精査を進めたが、その他の石の抜き取り痕や焼土は検出されなかった。炉とは別な意味を持つ遺構と考えられる。

遺物（第18図　8～10）
〈出土状況〉埋土中から３点の土器が出土した。
〈土器〉８・９は頸部で隆帯か沈線で文様帯を区画し、口縁部は磨消され無文になる。いずれも口唇から刻みのある隆線が懸垂する。胴部の文様は沈線文が主体となる。10は波状口縁をなす深鉢である。波頂部から下がる隆帯が口縁を巡る。

時期　出土した土器の特徴から縄文時代後期前葉期の遺構の可能性が高い。

ⅡＣ９ｊ住居跡

遺構（第９図・写真図版７）
〈検出状況・重複関係〉調査区中央標高401ｍ付近で、黒褐色土の広がりとして検出した。北西壁側で、ⅡＣ９ｊ土坑と重複する。また、本住居の北側に位置するⅡＣ８ｊ住とは、1.4ｍしか離れていない。
〈規模・平面形〉長径3.7ｍ、短径3.2ｍの不整な楕円形を呈する。
〈埋土〉上から微量の炭化物を含む黒色土、暗褐色土と斜面上方側に埋積した炭化物を含む褐色土で構成される。褐色土と暗褐色土の間に焼土のブロックを含む。
〈壁・床面〉北壁は直立するように立ち上がるが、その他の壁は緩く外傾する。床面は締まりがあり、中央付近が周辺より６～12cmほど低くなり窪んでいる。床面状には、径が20～50cm位の亜角礫が数個散在している。また、南西壁の埋土上部から、コの字状の配石を検出した。住居に伴うものかは確認できなかった。
〈柱穴〉Ｐ１～Ｐ８の８本を検出した。Ｐ２、Ｐ３、Ｐ６は深さや形状から柱穴にしてもよいと見られるが、配置等は不明である。
〈炉〉床面中央西寄りの位置に、焼土を検出した。規模は30×30cmの範囲で、厚さは11cmである。あまり焼成が良くない。

遺物（第18・19図　11～19）
〈出土状況〉埋土中から土器８点、石器１点および剥片８点が出土している。剥片は図化・記述を省略した。
〈土器〉11・12はいずれも波状口縁をなす地文のみの深鉢で、13も含めて上部は縄文原体を横回転させたのち縦回転して羽状縄文のようにしている。14は沈線文、15～18は地文のみの深鉢である。
〈石器〉19は微少剥離痕を有する剥片石器で、内湾した刃部の両端には付着物が見られる。

時期　出土した土器の特徴から縄文時代後期前葉期の遺構の可能性が高い。

ⅢＣ０ｅ住居跡

遺構（第９図・写真図版８）
〈検出状況・重複関係〉調査区中央やや西寄り標高342ｍ付近で、遺構検出作業中石囲炉を検出した。他の遺構との重複はないが、ⅡＣ９ｅ住居とは2.5ｍの距離にある。
〈規模・平面形〉石囲炉より北側のみの検出であるので、正確な規模・平面形は不明だが、検出された部分

から推測すると、長径が４ｍ弱、短径が３ｍの楕円形を呈すると見られる。
〈埋土〉多量の炭化物や焼土を含む黒褐色土、暗褐色土で構成される。特に北壁よりの３層には焼土のブロックや炭化材が多いので、焼失住居の可能性がある。また、北壁に近い２層中から、長径が10～50cmの円礫がまとまって検出された。本住居が焼失したか廃棄した後に、入り込んだものと思われるが元々住居の周囲にあったものと思われる。
〈壁・床面〉住居の北西側のみの検出であるが、壁は緩く外傾し、床は平坦で締まりがある。炉より南東側は削平を受けている。
〈柱穴〉Ｐ１～11の11本が検出しているが、配置、深さ、形状からＰ１、Ｐ２、Ｐ３、Ｐ７、Ｐ８、Ｐ９の６本が主柱穴と見られる。比較的壁に近い位置に構築されている。また、Ｐ６、Ｐ10、Ｐ11は立て替え以前の柱穴の可能性がある。
〈炉〉柱穴の位置が住居の壁と接しているのであれば、炉は床面中央よりやや南西に寄っている。規模は、東西64cm、南北60cmのほぼ円形に近い楕円形を呈し、焼土は最大で厚さ５cmであるが、あまり焼成は良くない。長径が10～30cmの11個の円礫によって構築されており、南西側に隙間があるが、抜き取り痕はなかった。
遺物（第19図　20～23）
〈出土状況〉埋土、床面、柱穴から土器３点、石器１点、剥片５点が出土した。
〈土器〉20は小型の壺で床面直上から出土した、頸部と胴部には縦に貫通孔のある突起が２対ついている。
〈石器〉23は割れた円礫で、側面には敲打による壊滅痕、表面には摩擦痕がある。
時期　出土した土器の特徴から縄文時代後期前葉期の遺構の可能性が高い。

ⅡＣ３ｄ住居跡
遺構（第10図・写真図版９）
〈検出状況・重複関係〉調査区中央西寄りの標高339ｍ付近で、炉の焼土を検出した。南側は風倒木によって攪乱を受けている。他の遺構との重複はない。
〈規模・平面形〉北側のみの検出であるが、長径が2.6ｍ程度の円形か楕円形を呈するものと思われる。
〈埋土〉炭化物を含む黒褐色土、暗褐色土で構成される。
〈壁・床面〉検出された北壁は、内湾気味に立ち上がる。床面は、斜面下方に向かって傾斜する。また、床面北西隅から、８×６×10cmの円礫の立石を検出した。
〈柱穴〉検出されなかった。
〈炉〉床面ほぼ中央と見られる位置から、焼土を検出した。68×34cmの不整な楕円形に広がり、厚さは５cm程度で、あまり焼成は良くない。焼土の南側に、表面が焼成を受けた長さ40cmの円礫があるが、これは自然に埋まっていた石を台石等に利用したものであろう。
遺物（第19図　24）
〈出土状況〉埋土中から土器１点、剥片４点が出土しているが、剥片については使用痕が認められないので、図化および記述は省略した。
〈土器〉24は地文のみの深鉢の破片である。
時期　出土した土器の特徴から縄文時代後期前葉期の遺構の可能性が高い。

ⅢＣ３ｇ住居跡

遺構（第10図・写真図版10）

〈検出状況・重複関係〉調査区中央標高339ｍ付近で、黒色土、黒褐色土の広がりとして検出した。ⅢＣ４ｇ土坑と重複するが、本住居の方が古い。本遺跡で最大の住居で、これより南側（斜面下方）には住居は検出されなかった。

〈規模・平面形〉東壁と南壁に張り出しがあるが、長径が5.3ｍ、短径が3.6ｍの不整な長楕円形を呈する。

〈埋土〉主に黒色土、黒褐色土の２層で構成され、北壁及び西壁寄りには、炭化物を含む褐色土が堆積している。いずれの埋土にも遺物が大量に含まれている。住居の中央付近の埋土２層には、多量の焼土ブロックが含まれている。

〈壁・床面〉壁は緩く外傾し、床面は締まりがあり、斜面下方に向かって僅かに傾斜する。

〈柱穴〉17本検出した。それぞれの柱穴の位置や重複するものの新旧関係から、Ｐ１、３、４、６、８、９、10、13とＰ14、15、５、７、８、９、11、12の２通りの柱穴配置が考えられ、いずれも８本柱で構成されている。内側に位置するＰ15の上部が焼成を受けているので、本住居は拡張されていることがわかる。

また、南西壁際と床面中央より東寄りの位置で、径10～56cmの円礫数個を検出した。

〈炉〉床面中央から地床炉と見られる焼土を検出した。規模は250×70cmの範囲の長楕円形に広がり、厚さは最大で10cmである。床面よりも約３～５cm高い位置で検出した。

遺物（第19～21図　25～52）

〈出土状況〉埋土中、床面、柱穴から土器20点、石器８点、剥片14点が出土している。

〈土器〉26～31は１ないし２個の大きめの刺突と沈線文が主体の土器で、32～36は沈線文のみの土器である。25、37は波状口縁を呈する地文のみの深鉢、40、41は頸部に大きめの隆帯が巡る壺型の土器である。42は深鉢の胴部であるが、沈線でＪ字状のモチーフを描きその内部を磨り消ししている。

〈石器〉45は箆状石器で、粗い調整で刃部を形成している。46は小さめの縦型剥片の端部に片面から調整を加えたものである。47は磨製石斧の刃部付近の破損したもので、48～51は磨石類に分類される礫石器である。

時期　出土した土器の特徴から縄文時代後期前葉期の遺構の可能性が高い。

２．焼土遺構

ⅡＣ４ａ焼土遺構（第11図・写真図版16）

調査区北側西寄りの標高345ｍ付近のⅡ層遺構検出作業中に検出した。86×60cmの不整楕円形の範囲を持ち、最大12cmの厚さを持つ現地性の焼土である。焼成はあまり良くない。焼土の北側20cmに20×15×10cmの亜角礫がある。住居の炉の可能性があるので周辺の検出を進めたが、柱穴は検出されなかった。

ⅡＣ７ｅ焼土遺構（第11図・写真図版16）

調査区中央の北西寄りの標高344ｍ付近のⅡ層遺構検出作業中に検出した。112×64cmの不整楕円形の範囲を持ち、最大10cmの厚さを持つ現地性の焼土である。周辺をⅢ層まで掘り下げたが柱穴は検出されなかった。

３．土器埋設遺構

ⅢＣ４ｆ土器埋設遺構（第11図・写真図版16）

調査区中央やや西寄りの標高339ｍ付近のⅡ層遺構検出作業中に、土器を検出した。また、土器に接し、北

東側に広がる焼土も同時に検出した。焼土は、130×100cmの不整の三角形をし、最大6cmの厚さを持つ。土器に近い部分の焼土は、表面を僅かに削ったところ無くなるくらいあまり焼成は良くない。土器から東南東80cmにフラスコ形のⅢＣ４ｆ土坑がある。また、周囲をⅢ層まで掘り下げたが、柱穴は検出されなかった。

遺物（第21図　53）

〈出土状況〉埋設されていた土器である。検出された時点では底部付近のみの出土であったが、周辺から出土の胴部と接合した。

〈土器〉53は底部に網代痕を持つ深鉢である。焼成を受けている。

時期　出土した土器の特徴から縄文時代後期の遺構の可能性が高い。

4．土坑

ⅠＣ９ａ土坑（第11図・写真図版11）

遺構　調査区北端西寄りの標高349m付近に位置する。Ⅲ層上面で検出した。平面形は開口部径48×42cm、底部径42×38cmの不整の楕円形を呈する。断面形は図化しなかったが、深さ46cmのビーカー状をしている。埋土は、主に黒褐色土、暗褐色土で、土坑内からの出土遺物はないが、埋土や検出面から縄文時代の遺構と考えられる。

ⅡＣ０ｅ土坑（第11図・写真図版11）

遺構　調査区北端、標高348m付近のⅢ層上面で検出した。平面形は開口部径80×74cm、底部径58×56cmの楕円形を呈し。断面形は、深さ72cmのビーカー状をしている。埋土は、主に黒色土、黒褐色土、暗褐色土で構成され、底面や壁面近くには濁りのある黄褐色土が堆積している。出土遺物はないが、埋土や検出面から縄文時代の遺構と考えられる。

ⅡＣ０ｈ土坑（第11図・写真図版11）

遺構　調査区北端の東寄り、標高347m付近のⅢ層上面で検出した。平面形は開口部径62×50cm、底部径53×52cmの円形に近い楕円形を呈する。断面形は、深さ48cmの袋状をしている。埋土は、上から黒色土、暗褐色土、底面近くは灰黄褐色土が堆積している。出土遺物はないが、埋土や検出面から縄文時代の遺構と考えられる。

ⅡＣ０ｊ土坑（第11図・写真図版11）

遺構　調査区北端の東寄り、標高347m付近のⅢ層上面で検出した。平面形は開口部径134×122cm、底部径95×68cmの不整の楕円形を呈する。断面形は、深さ60cmの逆台形状をしている。埋土は、上から黒色土、暗褐色土で構成されている。出土遺物はないが、埋土や検出面から縄文時代の遺構と考えられる。

ⅡＣ２ｅ①土坑（第11図・写真図版12）

遺構　調査区北寄りの標高347m付近で、黒色土の広がりを精査中に検出した。ⅡＣ１ｅ住居跡とⅡＣ２ｅ②土坑と重複する。本土坑が最も新しく、住居跡、②土坑を切っている。平面形は、検出時の開口部径97×80cm、底部径57×48cmの楕円形を呈する。断面形は、深さ58cmの逆台形状をしている。埋土は、土坑として確認した後に図化したため、底面付近しかないが、上部は、黒色土、黒褐色土で構成される。下部には炭

化物を含む黄褐色土が混じる。出土した土器から、縄文時代後期の遺構と考えられる。

遺物（第21図　54・55）

〈出土状況〉埋土中から土器２点、剥片１点が出土している。剥片には使用痕跡が認められないので図化・記述は省略した。

〈土器〉54、55とも地文のみの土器で、いずれもＬＲの原体を横回転した後縦回転し、羽状縄文のように施文している。同一個体の可能性がある。

ⅡＣ２ｅ②土坑（第11図・写真図版12）

遺構　調査区北寄りの標高347ｍ付近で、黒色土の広がりを精査中に検出した。ⅡＣ１ｅ住居跡とⅡＣ２ｅ②土坑と重複する。本土坑は、住居跡を切って構築され、②土坑に切られている。平面形は、北西側を土坑によって切られているが、開口部径142×145cm以上、底部径60×62cm以上の楕円形を呈すると思われる。断面形は、壁が緩く外傾する深さ38cmの逆台形状をしている。埋土は、主に黒色土、黒褐色土で構成されが、黒褐色土中に投げ込みと思われる焼土が含まれる。底面上で37×22×10cmの焼成を受けた円礫を検出した。出土遺物はないが、重複関係から縄文時代後期の遺構と考えられる。

ⅡＣ２ｊ土坑（第12図・写真図版12）

遺構　調査区北寄りの標高345ｍ付近で、黒褐色土の広がりとして検出した。北側は風倒木によって攪乱を受けている。平面形は、北側が不明だが、短径96cm、長径は確認できた部分で160cmの長楕円形を呈するものと見られ、断面形は、深さ28cmの浅い逆台形状をしている。埋土は、上部が黒褐色土、下部が黒色土の２層からなる。底面はかなり締まりがある。出土遺物はないが、埋土や検出面から縄文時代の遺構と考えられる。

ⅡＤ２ａ土坑（第12図・写真図版14）

遺構　調査区北東寄りの標高345ｍ付近のⅢ層上面で検出した。平面形は、開口部径76×72cm、底部径60×60cmのほぼ円形を呈し、断面形は、深さ14cmの浅皿状をしている。埋土は、黒褐色土の単層である。出土遺物はないが、埋土や検出面から縄文時代の遺構と考えられる。

ⅡＣ３ｅ土坑（第12図・写真図版12）

遺構　調査区北寄りの標高346ｍ付近の出土土器の多い風倒木の黒色土を精査中検出した。西側には風倒木がある。平面形は、開口部径156×136cm、頸部径96×83cm、底部径104×98cmの不整な楕円形を呈し、断面形は、深さ62cmのフラスコ状をしている。埋土は、主に黒色土、黒褐色土で構成され、壁際に暗褐色土、褐色土がある。地山に含まれる石英安山岩の30～40cmの円礫が開口部周辺に露出していた。底面直上の出土土器の特徴から縄文時代後期の遺構と考えられる。

遺物（第21図　56～61）

〈出土状況〉埋土中と底面直上から土器が６点、剥片が７点出土している。剥片には使用痕跡がない。

〈土器〉56は底面直上で横位の状態で出土した地文のみの深鉢で、底部はなかった。６単位の波状口縁を呈し、地紋の一段目は原体を横回転した後、それより下部は縦回転し羽状縄文になるように施文している。57、58は口縁の中空突起である。59、60は波状口縁を持つ土器の波頂部で沈線や隆帯が頸部に巡るものである。

ⅡＤ３ｄ土坑（第13図・写真図版14）

遺構　調査区北東寄りの標高343ｍ付近で、風倒木の黒褐色土を精査中に検出した。平面形は、開口部径98×80cm、頸部径72×54cm、底部径104×96cmの楕円形を呈する。断面形は、深さ88cmのフラスコ状をしている。埋土は、主に黒褐色土であるが、頸部付近と底面近くには、地山の崩壊土と見られる黄褐色土が堆積している。時代を決定する出土遺物がないが、検出面や埋土の特徴から縄文時代の遺構と考えられる。

ⅡＣ４ｆ土坑（第12図・写真図版13）

遺構　調査区北寄りの標高345ｍ付近で、風倒木の谷褐色土を精査中に検出した。ⅡＣ４ｆ住居と重複するが、住居の炉焼土が、本土坑の埋土上に形成されているので土坑の方が古い。平面形は開口部径106×86cm、最も広がる部分の径は108×82cm、底部径90×78cmの楕円形を呈する。断面形は、深さ100cmの中央付近が広がる袋状をしている。埋土は、主に焼土や炭化物を含む褐色砂質土で、上部には、ⅡＣ４ｆ住居の焼土がのり、頸部付近にも、投げ込みとみられる焼土がある。人為的な埋没と見られる。出土土器の特徴から縄文時代後期の遺構の可能性が高い。

遺物（第22図　62～68）

〈出土状況〉埋土中から土器が３点、磨石類２点、剥片が５点出土している。剥片には黒曜石が１点あり図化した。

〈土器〉62は胴部より上の深鉢で、３単位の中空突起を持ち、突起と突起間の刺突から弧状文が下にのびる起点になる部分の沈線間には、Ｓ字文を施文している。63は沈線文、64は波状口縁である。66は比較的大きめの窪みを持つ凹石である。

ⅡＤ４ｃ土坑（第13図・写真図版14）

遺構　調査区北西寄りの標高343ｍ付近のⅢ層上面で検出した。重複関係はない。平面形は、開口部径76×60cm、底部径は52×48cmの楕円形を呈する。断面形は、深さ36cmの円筒状をしている。埋土は、黒色土とにぶい灰黄褐色土からなる。検出面や埋土の特徴から縄文時代の遺構と考えられる。

ⅡＣ５ｅ土坑（第12図・写真図版13）

遺構　調査区北寄り標高345ｍ付近のⅢ層上面で、黒褐色土の広がりとして検出した。他の遺構との重複関係はない。平面形は、開口部径102×92cm、底部径68×51cmの楕円形を呈する。断面形は、深さ68cmビーカー状をしている。埋土は、上部が黒褐色土であるが、主に炭化物を含む黄褐色土、褐色土による埋没である。出土遺物から縄文時代の遺構と考えられる。

遺物（第22図　69）

〈出土状況〉埋土中から土器１点、剥片２点が出土している。剥片には使用痕跡はない。

〈土器〉69は木葉痕のある深鉢の底部である。

ⅡＣ７ｅ土坑（第12図・写真図版13）

遺構　調査区中央僅かに北西に寄った標高344ｍのⅢ層上面で、黒色土の広がりとして検出した。他の遺構との重複はないが、北側１ｍにⅡＣ７ｅ焼土がある。平面形は、開口部径117×94cm、底部径58×50cmの楕円形を呈する。断面形は、深さ53cmのビーカー状をしている。埋土は、主に黒色土、黒褐色土、暗褐色土

で構成される。検出面や埋土の特徴から縄文時代の遺構と考えられる。

ⅡＣ７ｇ土坑（第12図・写真図版13）

遺構　調査区中央僅かに北西に寄った標高343ｍのⅢ層上面で、黒色土の広がりとして検出した。他の遺構との重複はない。平面形は、開口部径70×62cm、底部径28×12cmの楕円形を呈する。断面形は、深さ98cmの円筒状をしている。埋土は、主に黒色土、暗褐色土で構成される。検出面や埋土の特徴から縄文時代の遺構と考えられる。

ⅡＣ８ｄ土坑（第12図・写真図版15）

遺構　調査区中央西寄りの標高344ｍのⅢ層上面で、風倒木の黒色土掘り下げ中に検出した。平面形は木痕の攪乱を受けているが、開口部径68×63cm、底部径34×30cmの楕円形を呈する。断面形は、図化できなかったが、深さ33cmの円筒状をしている。埋土は、黒褐色土の単層である。底面に締まりがある柱穴状の土坑である。検出面や埋土の特徴から縄文時代の遺構と考えられる。

ⅡＣ８ｅ土坑（第12図・写真図版14）

遺構　調査区中央西寄りの標高343ｍのⅢ層上面で、風倒木の黒色土掘り下げ中に検出した。平面形は、開口部径84×78cm、頸部径52×48cm、底部径42×38cmの楕円形を呈する。断面形は、深さ56cmの円筒状をしている。埋土は、黒褐色土で構成されている。底面に締まりがある柱穴状の土坑である。検出面や埋土の特徴から縄文時代の遺構と考えられる。

ⅡＣ９ｊ土坑（第13図・写真図版７）

遺構　調査区中央標高341ｍ付近で、黒褐色土の広がりとして検出された。南側はⅡＣ９ｊ住居と重複するが、埋土の状況から本土坑の方が新しい。検出した部分の壁の続き方から、平面形は長径が２ｍ、短径１ｍ以上の楕円形を呈するものと見られる。断面形は、深さ32cmの中央が窪んだ浅皿状をしている。埋土は、黒褐色土の単層である。検出面や埋土の特徴から縄文時代の遺構と考えられる。

ⅢＣ０ｊ土坑（第13図・写真図版15）

遺構　調査区中央標高340ｍで黒褐色土の広がりとして検出した。当初は風倒木として掘り進めたので、断面は図化していない。他の遺構との重複はないが、ⅡＣ９ｊ住居の南側2.3ｍに位置している。南東壁は削平を受けている。平面形は、開口部径266×160cm、底部径152×117cmの楕円形を呈する。断面形は、深さ15cmの浅皿状をしている。底面は、斜面下方に向かって傾斜しており、中央に径60×30cm、深さ10cmの楕円形の副穴がある。埋土は、黒褐色土の単層である。出土した土器の特徴から縄文時代後期の遺構と考えられる。

遺物（第22図　70・71）

〈出土状況〉埋土中から土器１点、不定形石器１点が出土している。

〈土器〉70は胴部上半の破片である。頸部を巡る沈線から弧状文や楕円文が施文されている。71は縦型の剝片に片方から調整を加え刃部を作り出している。

ⅢＣ４ｆ土坑（第13図・写真図版15）

遺構　調査区中央標高339ｍ付近で、ⅢＣ４ｆ土器埋設遺構の周辺のⅡ層掘り下げ中に検出した。重複関係はないが、ⅢＣ４ｆ土器埋設遺構は西南西80cmに位置する。平面形は、開口部径62×55cm、頸部径56×44cm、底部径62×56cmの楕円形を呈する。断面形は、深さ72cmのフラスコ状をしている。埋土は、上・中部が黒褐色土、底部付近は暗褐色土で構成される。出土した土器の特徴から縄文時代後期の遺構と考えられる。

遺物（第22図　72・73）

〈出土状況〉埋土中から土器２点、剝片４点が出土している。剝片には使用痕がない。

〈土器〉72、73は頸部を巡る沈線から弧状文や楕円文が施文されている。

ⅢＣ４ｇ土坑（第13図）

遺構　調査区中央標高339ｍ付近に位置する。ⅢＣ３ｇ住居精査中、住居の埋土断面で土坑を検出した。住居の西壁に接するように構築されている。住居の埋土を切っているので住居より新しい。西壁以外は住居の埋土除去によって僅かに底部だけである。平面形は、開口部径100×74cm、底部径56×53cmの楕円形を呈する。断面形は、深さ50cmの円筒状をしている。埋土は、黒褐色土と暗褐色土の２層からなる。検出面や埋土の特徴から縄文時代の遺構と考えられる。

ⅢＤ１ｂ①土坑（第13図・写真図版15）

遺構　調査区南端標高333ｍ付近で検出した。平面形は、開口部径98×86cm、底部径24×20cmの楕円形を呈する。断面形は、深さ36cmの浅鉢状をしている。埋土は黒褐色土からなるが、底部はかなり締まりがありグライ化している。東に位置する、Ｄ１ｂ②土坑とは50cmしか離れていない。断面形や埋土、底面が堅く締まることから２つの土坑は対になるように構築された可能性がある。時期不明である。

ⅣＤ１ｂ②土坑（第13図・写真図版15）

遺構　調査区南端標高333ｍ付近で検出した。平面形は、開口部径76×73cm、底部径21×20cmの円形に近い楕円形を呈する。断面形は、深さ28cmの浅鉢状をしている。埋土は暗褐色土からなるが、底部はかなり締まりがありグライ化する。ⅣＤ１ｂ①土坑とは、対になる可能性がある。時期不明である。

５．溝跡

ⅡＢ６ｉ溝跡（第14図・写真図版17）

調査区中央を北西ー南東に横切る。長さ89ｍ、幅40～140cm、深さ42～146cmである。南東隅で２つに分かれる。元々は、薬研掘りに掘られたようだが、流水のため底面が広くなり、所々に深い穴が見られる。北西隅は沢の方に、南東側は段丘崖下へ延長するようである。本遺跡ののる斜面下には近世以降に集落が形成されているので、水を引くために構築されたものと見られる。

遺物（第22図　74～76）

〈出土状況〉埋土中から縄文土器や剝片が出土している。その内３点掲載した。溝跡は新しい遺構なので遺物は周辺から流れ込んだものであろう。

〈土器〉74は波状口縁を呈し波頂部から頸部を巡る隆帯が懸垂している。75は刺突のある中空突起、76は頸部を巡るものと波頂部から懸垂する連鎖状隆帯が連絡する。口縁部の磨消帯には沈線文が施文される。

ⅢＤ５ｇ溝跡（第15図・写真図版18）

調査区南東隅でⅡＢ６ｉ溝跡と平行し南東に折れ曲がる。一部試掘溝に切られているが、長さ7.4m、幅30～80cm、深さ３～16cmである。東側は調査区外に延長するようである。埋土の様相から近世以降の遺構と考えられる。

ⅣＣ３ｇ溝跡（第16図・写真図版18）

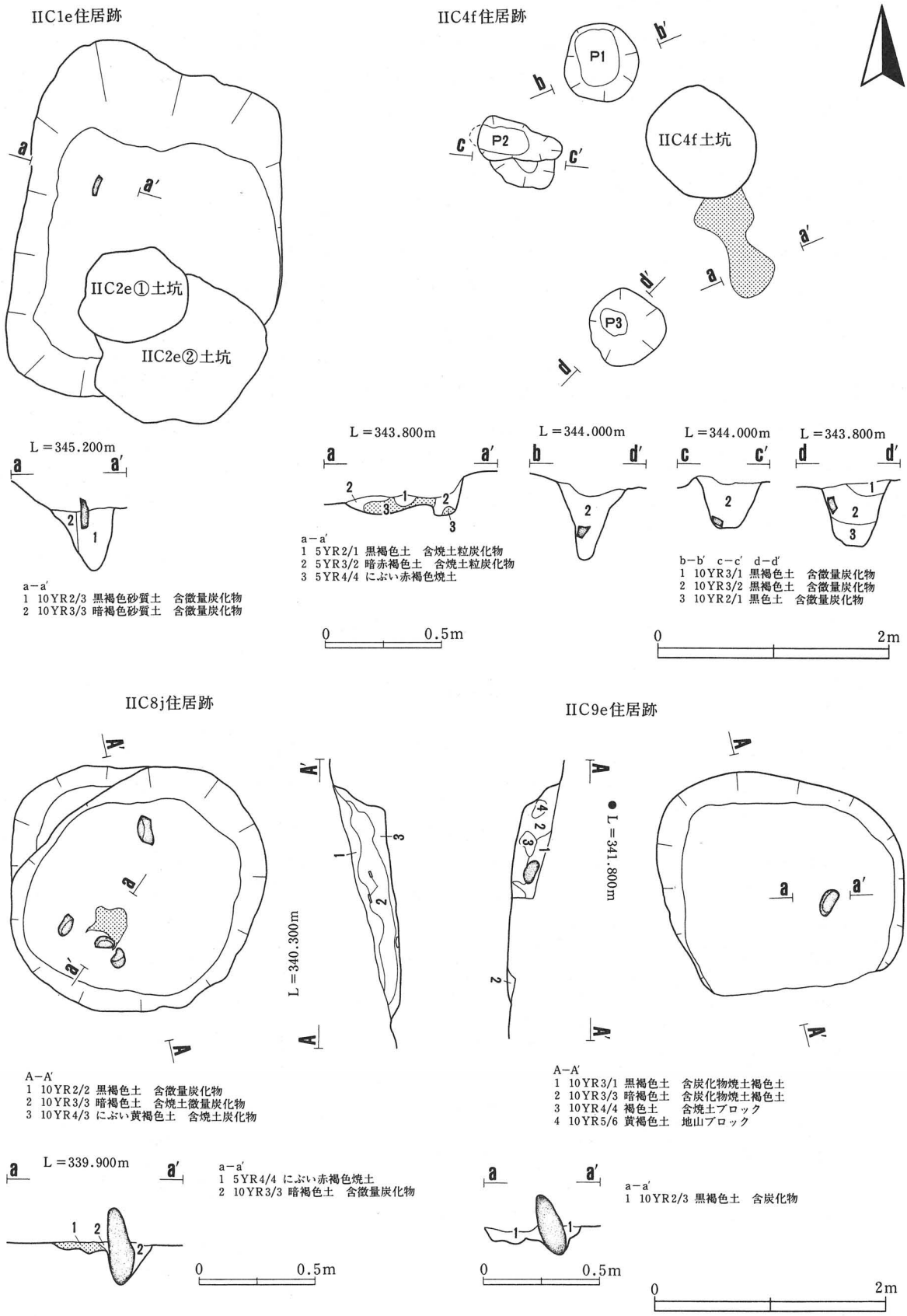
調査区中央西寄りの沢に近い位置から、折れ曲がりながらも南南東に延び、ⅣＣ３ｇグリッド付近から東へ折れ曲がりⅣＤ０ｉグリッド付近で途切れる。一部風倒木、試掘溝に切られているが、長さ85.4m、幅は平均して30cm程度で、深さも30cm程度である。東側は調査区外に延長するようである。埋土の様相から近世以降の遺構と考えられる。

６．段状遺構（形状から仮に命名した）（第15図・写真図版16）

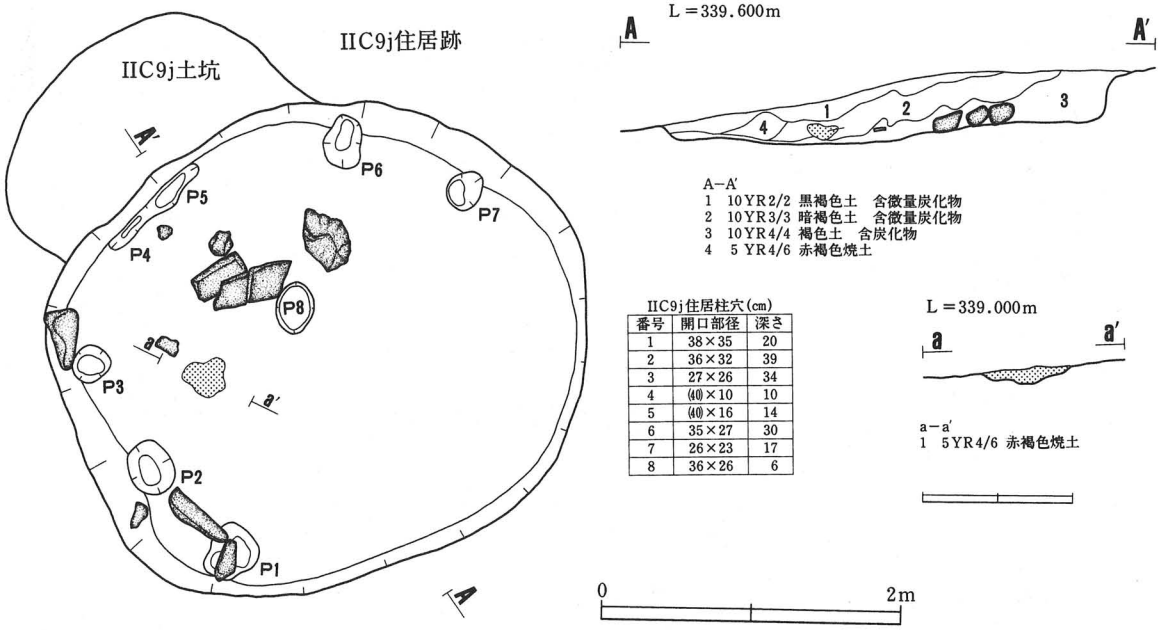
調査区中央東寄り標高338mで検出された。斜面下方に直角に長軸を持ち、長さ5.8m、幅は最大で125cmの僅かに斜面下方に傾斜するが比較的平坦な面である。平坦面はⅢ層を掘り込んで構築され締まりがある。埋土の様相から近世以降の遺構の可能性がある。

表２　遺　構　一　覧　表

No.	遺構名	No.	遺構名	No.	遺構名
1	ⅡＣ１ｅ住居跡	14	ⅡＣ０ｈ土坑	27	ⅡＣ８ｄ土坑
2	ⅡＣ４ｆ住居跡	15	ⅡＣ０ｊ土坑	28	ⅡＣ８ｅ土坑
3	ⅡＣ８ｊ住居跡	16	ⅡＣ２ｅ①土坑	29	ⅡＣ９ｊ土坑
4	ⅡＣ９ｅ住居跡	17	ⅡＣ２ｅ②土坑	30	ⅢＣ０ｊ土坑
5	ⅡＣ９ｊ住居跡	18	ⅡＣ２ｊ土坑	31	ⅢＣ４ｆ土坑
6	ⅢＣ０ｅ住居跡	19	ⅡＤ２ａ土坑	32	ⅢＣ４ｇ土坑
7	ⅢＣ３ｄ住居跡	20	ⅡＣ３ｅ土坑	33	ⅣＤ１ｂ①土坑
8	ⅢＣ３ｇ住居跡	21	ⅡＤ３ｄ土坑	34	ⅣＤ１ｂ②土坑
9	ⅡＣ４ａ焼土	22	ⅡＣ４ｆ土坑	35	ⅡＢ６ｉ溝跡
10	ⅡＣ７ｅ焼土	23	ⅡＤ４ｃ土坑	36	ⅢＤ５ｇ溝跡
11	ⅢＣ４ｆ土器埋設遺構	24	ⅡＣ５ｅ土坑	37	ⅣＣ３ｇ溝跡
12	ＩＣ９ａ土坑	25	ⅡＣ７ｅ土坑	38	ⅢＤ０ｅ段状遺構
13	ⅡＣ０ｅ土坑	26	ⅡＣ７ｇ土坑		

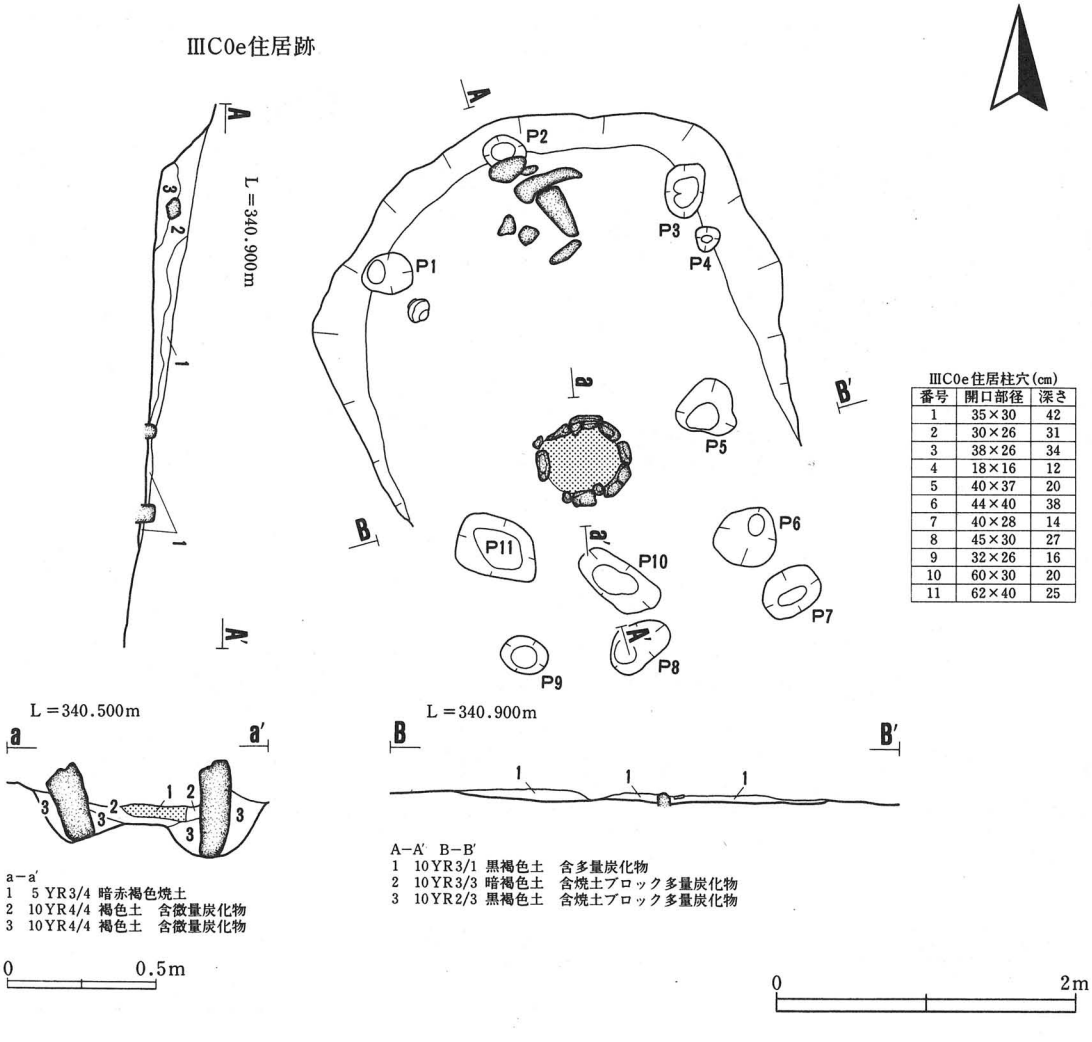


第8図 IIC1e・IIC4f・IIC8j・IIC9e住居跡



IIC9j住居柱穴(cm)

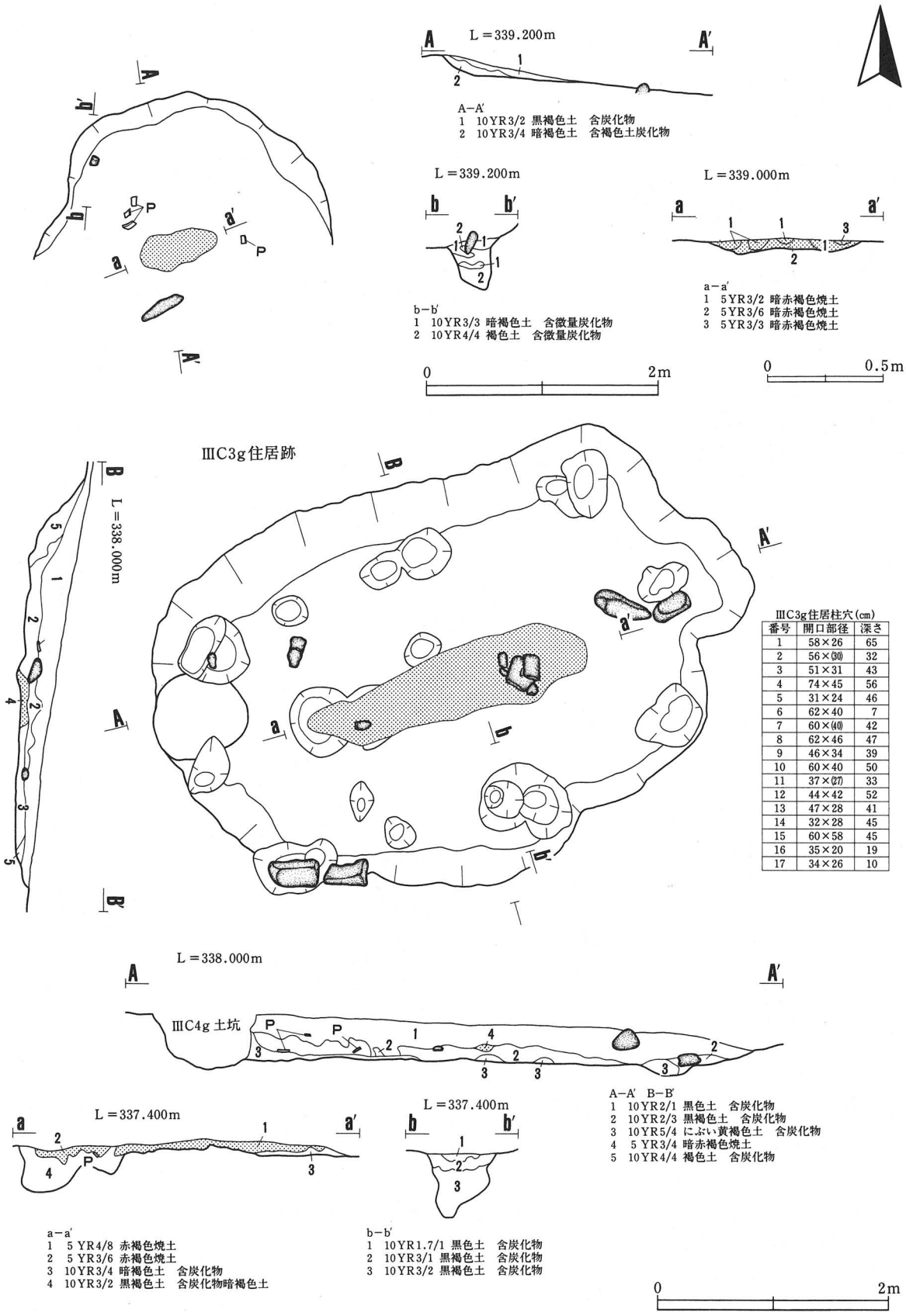
番号	開口部径	深さ
1	38×35	20
2	36×32	39
3	27×26	34
4	(40)×10	10
5	(40)×16	14
6	35×27	30
7	26×23	17
8	36×26	6



IIIC0e住居柱穴(cm)

番号	開口部径	深さ
1	35×30	42
2	30×26	31
3	38×26	34
4	18×16	12
5	40×37	20
6	44×40	38
7	40×28	14
8	45×30	27
9	32×26	16
10	60×30	20
11	62×40	25

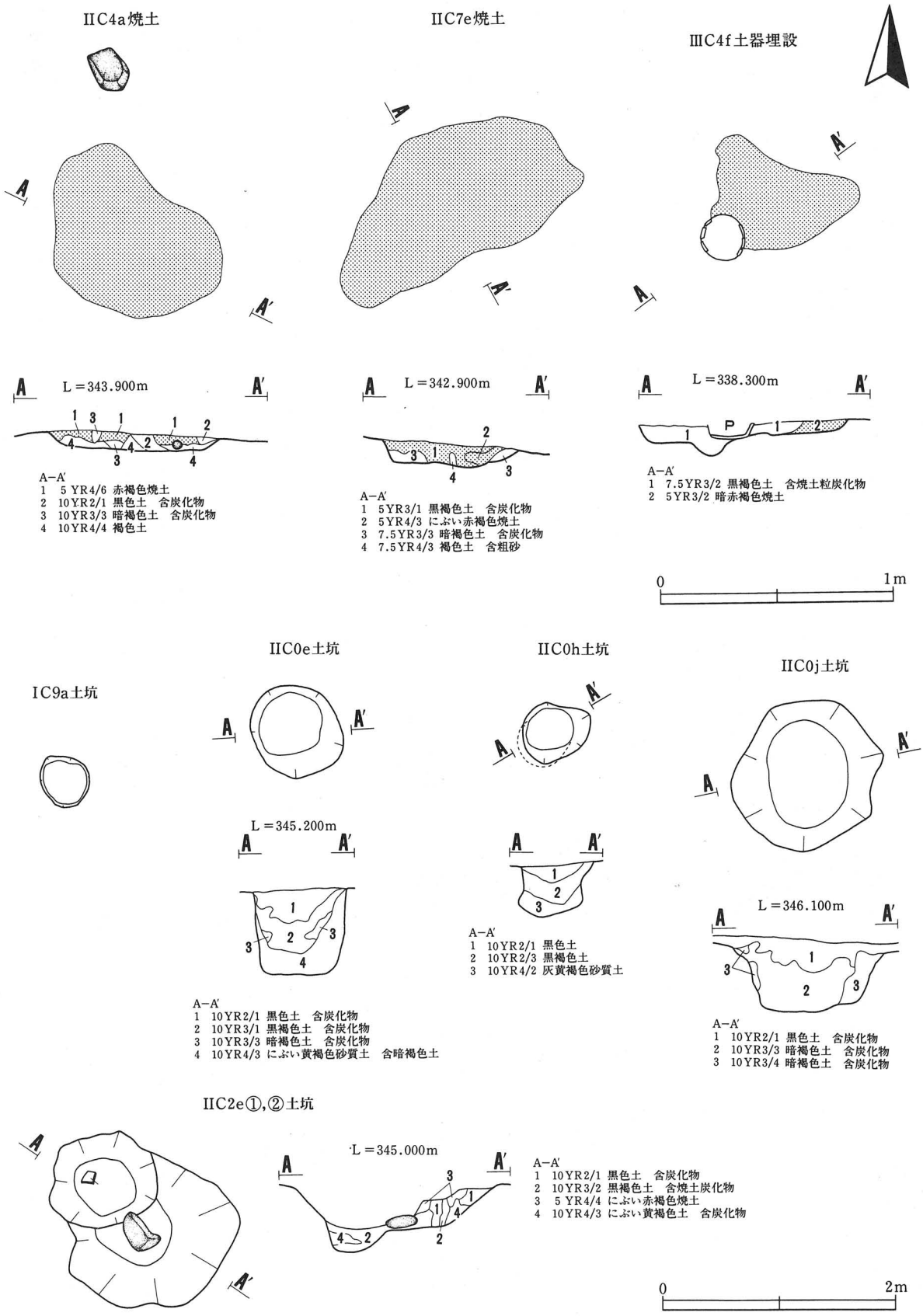
第9図　IIC9j・IIIC0e住居跡



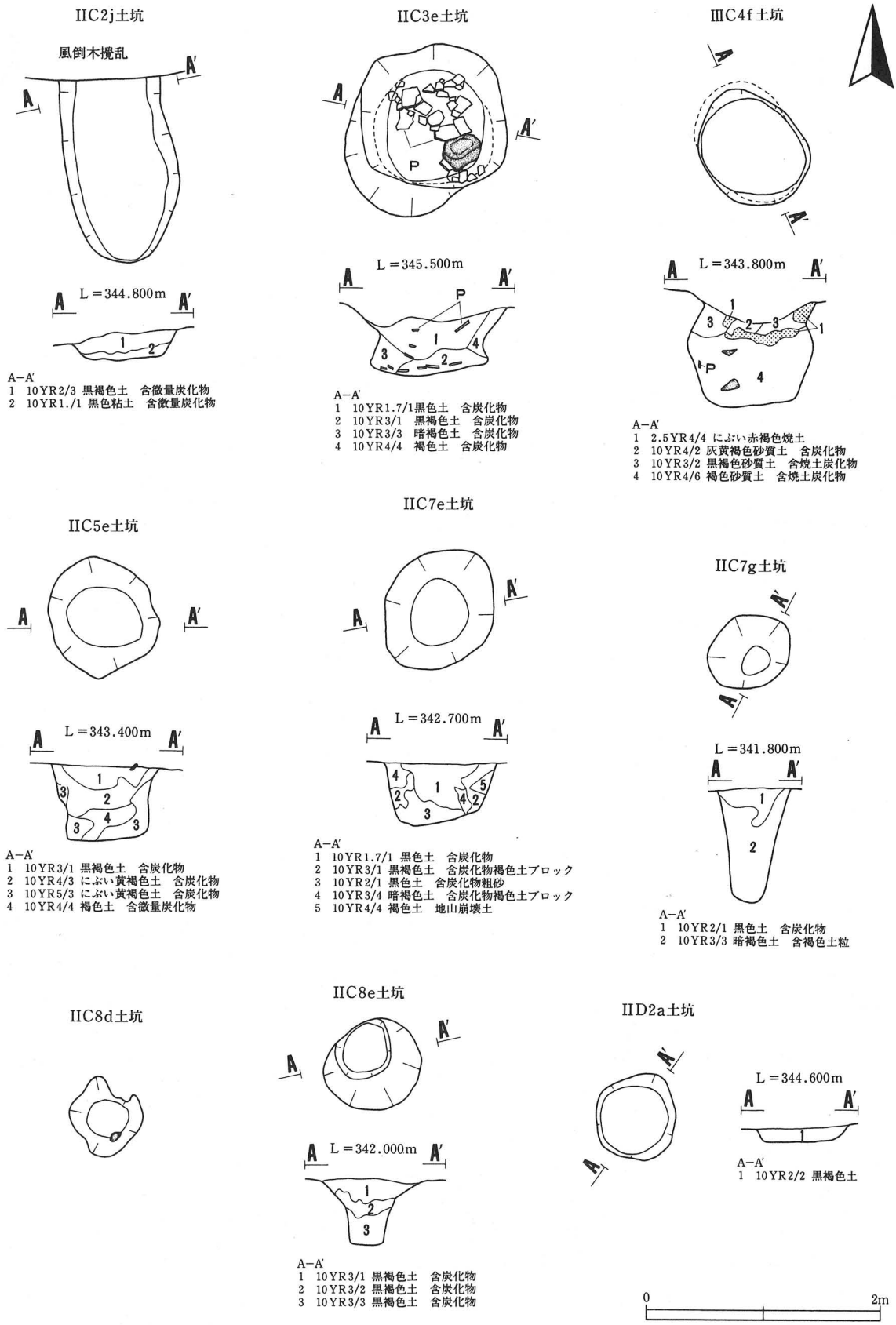
ⅢC3g住居柱穴(cm)

番号	開口部径	深さ
1	58×26	65
2	56×(30)	32
3	51×31	43
4	74×45	56
5	31×24	46
6	62×40	7
7	60×(40)	42
8	62×46	47
9	46×34	39
10	60×40	50
11	37×(27)	33
12	44×42	52
13	47×28	41
14	32×28	45
15	60×58	45
16	35×20	19
17	34×26	10

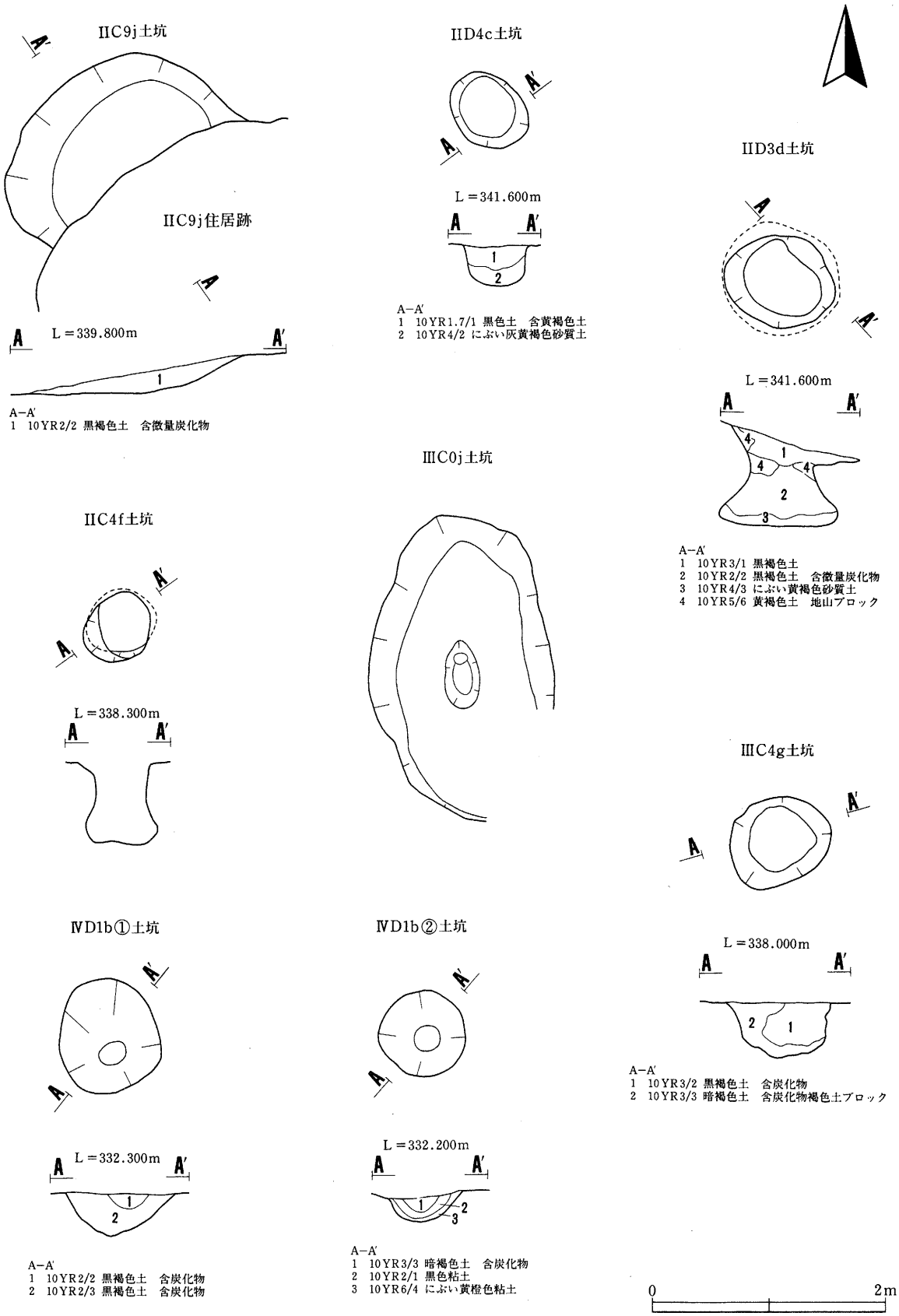
第10図　ⅢC3d・ⅢC3g住居跡



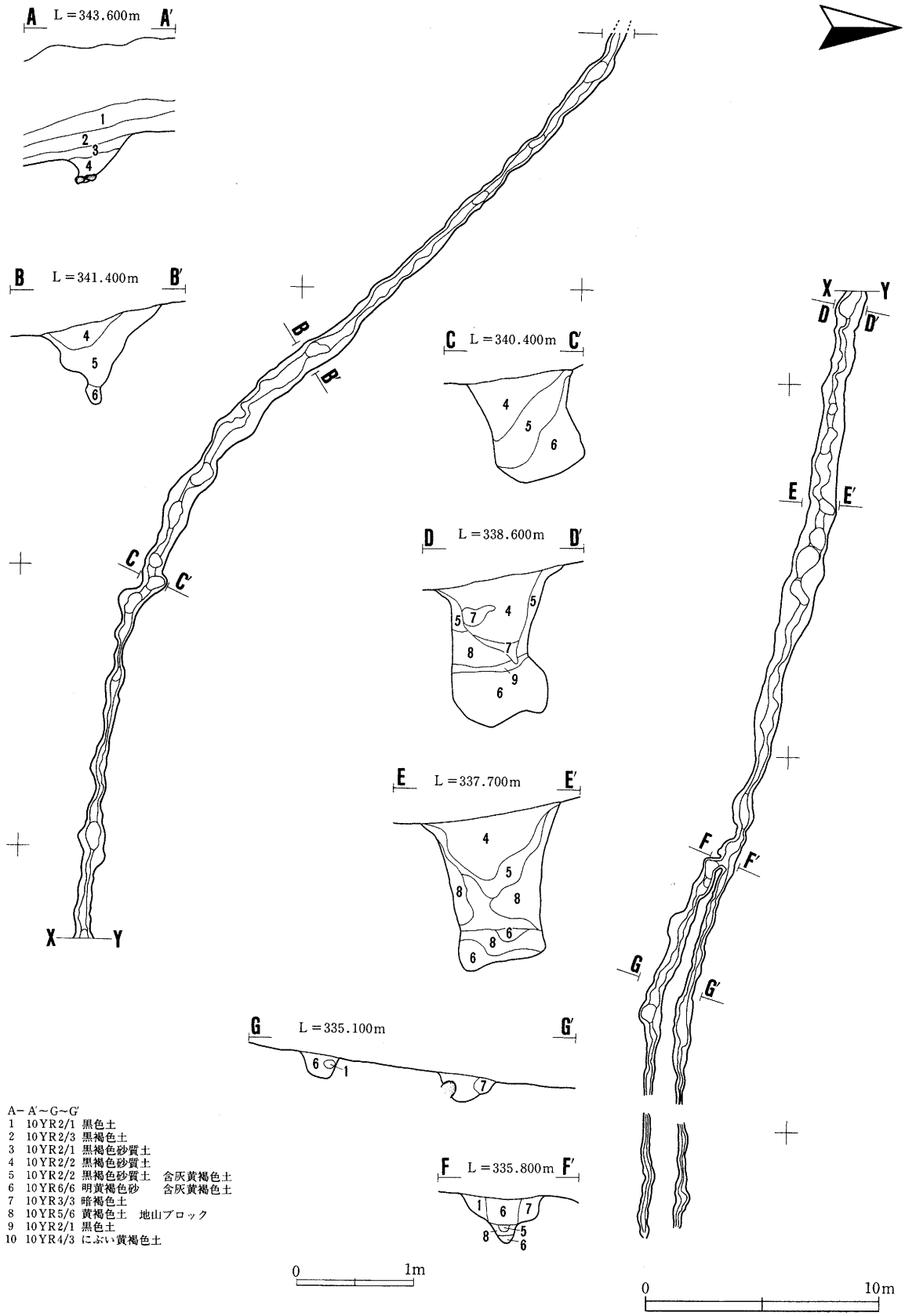
第11図　IIC4a・IIC7e焼土・IIIC4f土器埋設遺構・土坑（1）


IIC2j土坑
風倒木攪乱
A
A′
L＝344.800m
1
2
A−A′
1 10YR2/3 黒褐色土 含微量炭化物
2 10YR1./1 黒色粘土 含微量炭化物
IIC3e土坑
P
L＝345.500m
1
2
3
4
A−A′
1 10YR1.7/1黒色土 含炭化物
2 10YR3/1 黒褐色土 含炭化物
3 10YR3/3 暗褐色土 含炭化物
4 10YR4/4 褐色土 含炭化物
IIIC4f土坑
L＝343.800m
1
2
3
4
P
A−A′
1 2.5YR4/4 にぶい赤褐色焼土
2 10YR4/2 灰黄褐色砂質土 含炭化物
3 10YR3/2 黒褐色砂質土 含焼土炭化物
4 10YR4/6 褐色砂質土 含焼土炭化物
IIC5e土坑
L＝343.400m
1
2
3
4
A−A′
1 10YR3/1 黒褐色土 含炭化物
2 10YR4/3 にぶい黄褐色土 含炭化物
3 10YR5/3 にぶい黄褐色土 含炭化物
4 10YR4/4 褐色土 含微量炭化物
IIC7e土坑
L＝342.700m
1
2
3
4
5
A−A′
1 10YR1.7/1 黒色土 含炭化物
2 10YR3/1 黒褐色土 含炭化物褐色土ブロック
3 10YR2/1 黒色土 含炭化物粗砂
4 10YR3/4 暗褐色土 含炭化物褐色土ブロック
5 10YR4/4 褐色土 地山崩壊土
IIC7g土坑
L＝341.800m
1
2
A−A′
1 10YR2/1 黒色土 含炭化物
2 10YR3/3 暗褐色土 含褐色土粒
IIC8d土坑
IIC8e土坑
L＝342.000m
1
2
3
A−A′
1 10YR3/1 黒褐色土 含炭化物
2 10YR3/2 黒褐色土 含炭化物
3 10YR3/3 黒褐色土 含炭化物
IID2a土坑
L＝344.600m
1
A−A′
1 10YR2/2 黒褐色土
0
2m

第12図 土坑（2）

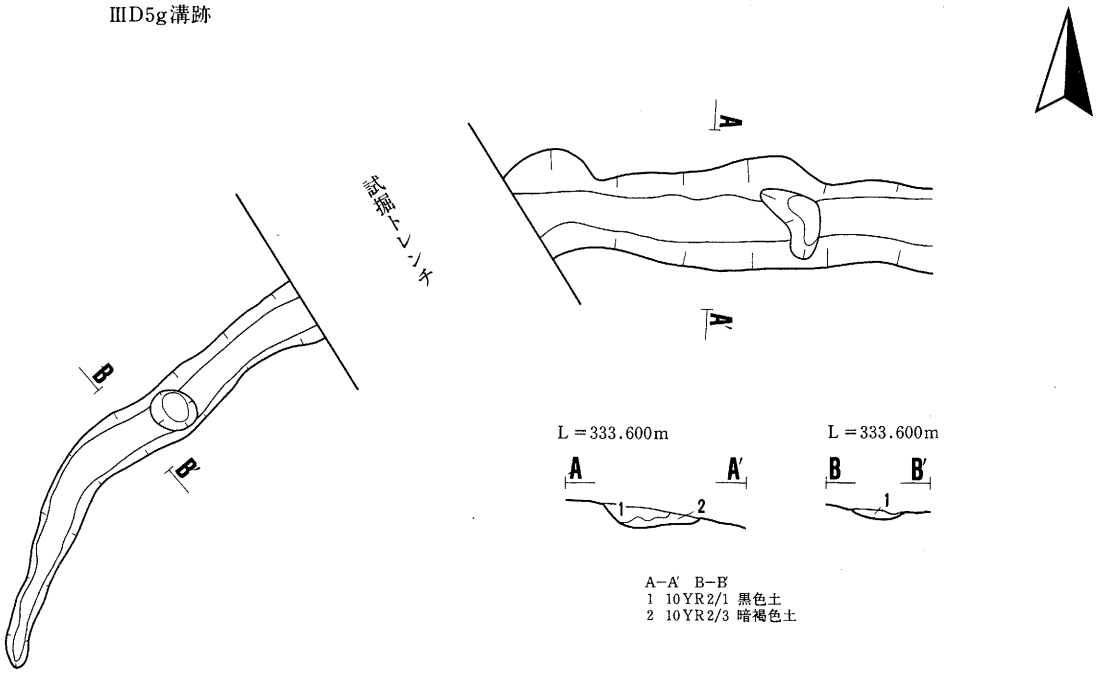

IIC9j土坑
IIC9j住居跡
L＝339.800m
A−A′
1　10YR2/2 黒褐色土　含微量炭化物
IID4c土坑
L＝341.600m
A−A′
1　10YR1.7/1 黒色土　含黄褐色土
2　10YR4/2 にぶい灰黄褐色砂質土
IID3d土坑
L＝341.600m
A−A′
1　10YR3/1 黒褐色土
2　10YR2/2 黒褐色土　含微量炭化物
3　10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土
4　10YR5/6 黄褐色土　地山ブロック
IIIC0j土坑
IIC4f土坑
L＝338.300m
IIIC4g土坑
L＝338.000m
A−A′
1　10YR3/2 黒褐色土　含炭化物
2　10YR3/3 暗褐色土　含炭化物褐色土ブロック
IVD1b①土坑
L＝332.300m
A−A′
1　10YR2/2 黒褐色土　含炭化物
2　10YR2/3 黒褐色土　含炭化物
IVD1b②土坑
L＝332.200m
A−A′
1　10YR3/3 暗褐色土　含炭化物
2　10YR2/1 黒色粘土
3　10YR6/4 にぶい黄橙色粘土
0
2m

第13図　土坑（3）

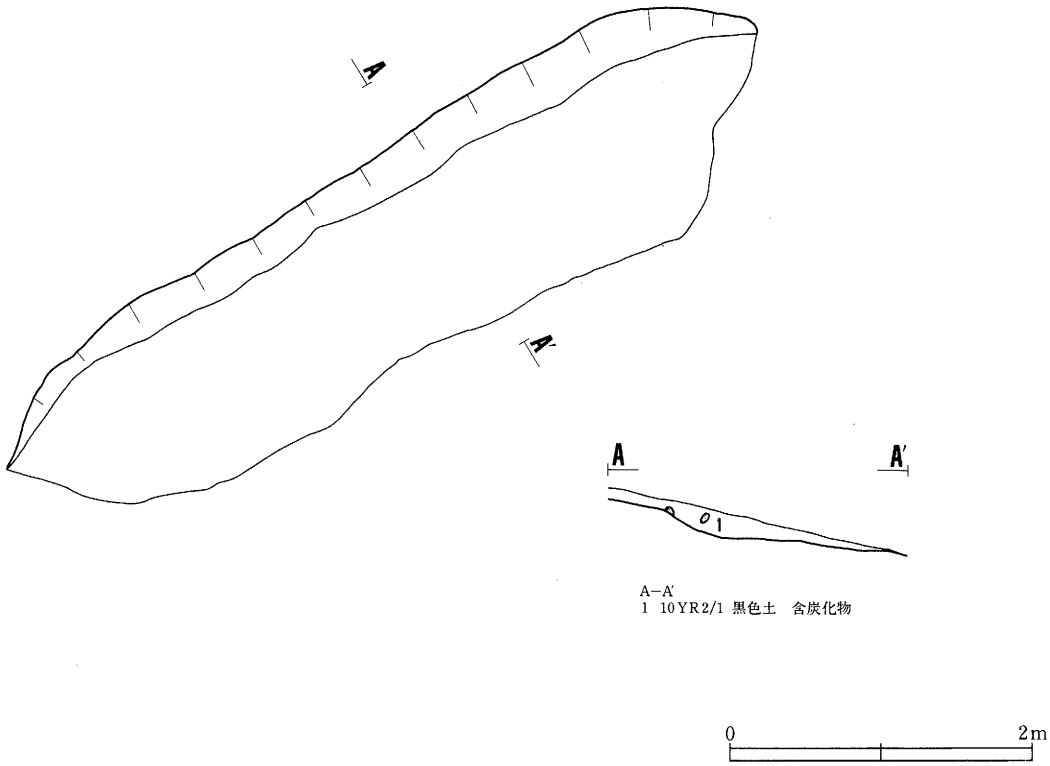


第14図 IIB6i溝跡

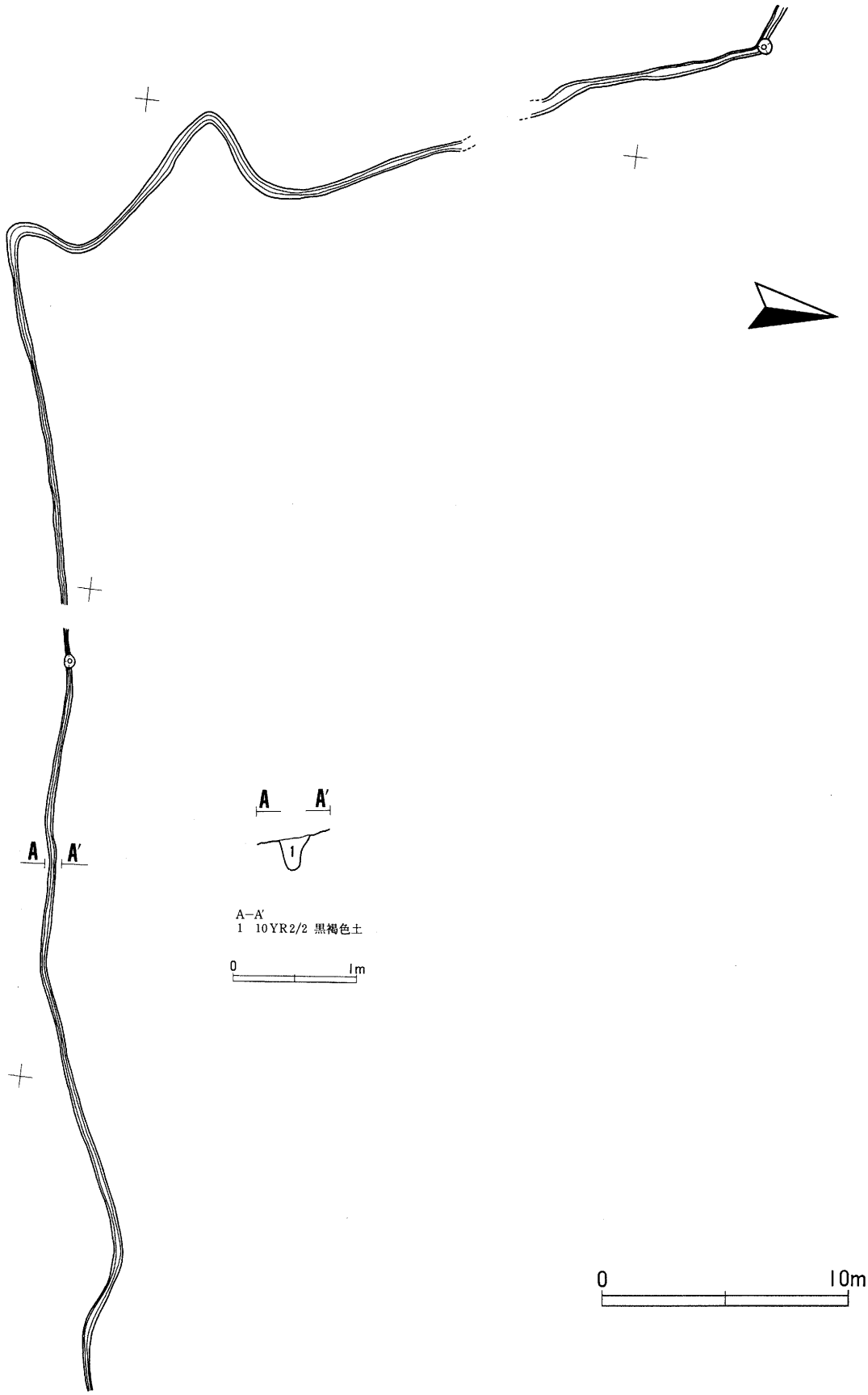
ⅢD5g溝跡



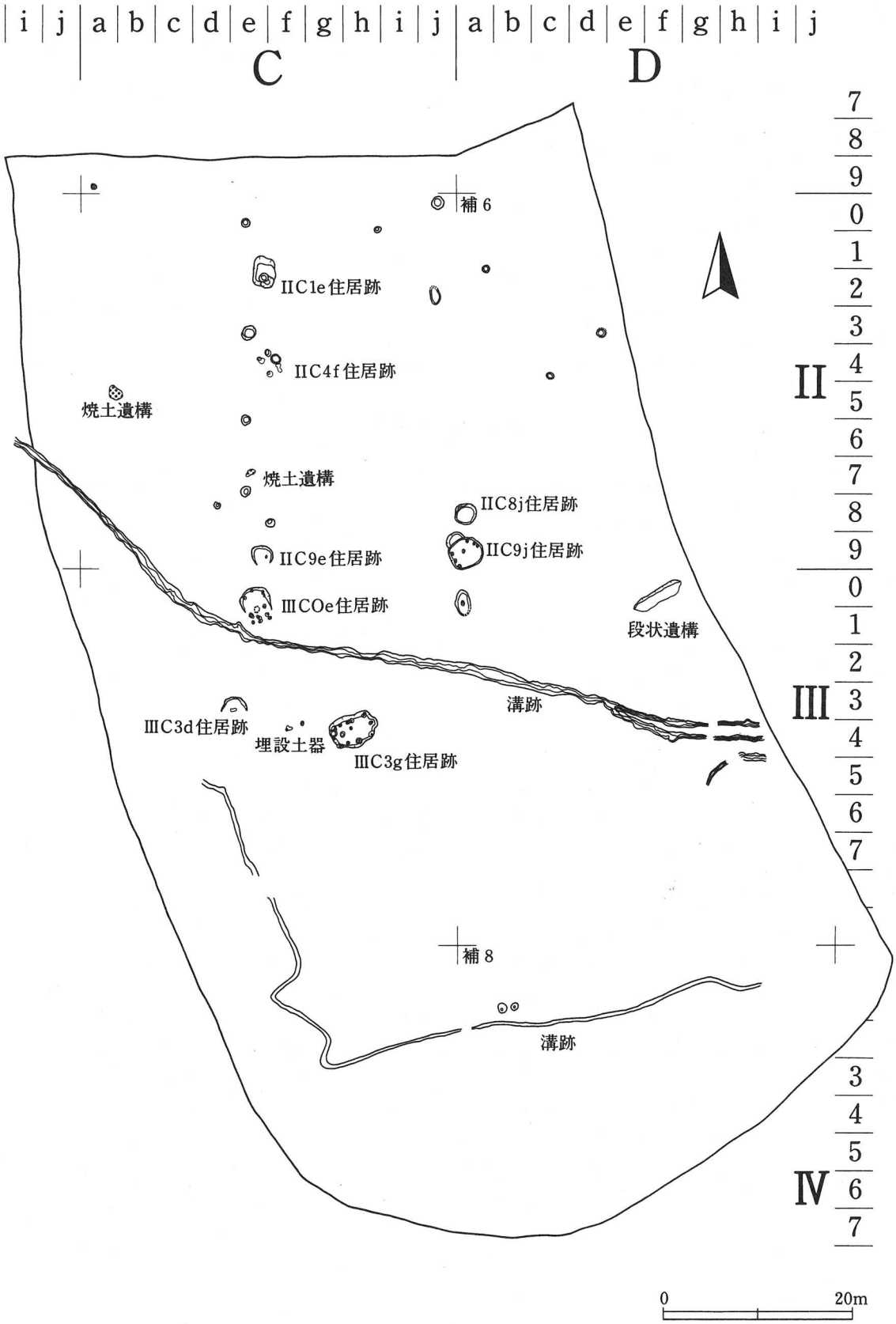
ⅢD0e段状遺構



第15図 ⅢD5g溝跡・ⅢD0e段状遺構



第16図　IVC3g溝跡


i j a b c d e f g h i j a b c d e f g h i j
C
D
補 6
IIC1e住居跡
IIC4f住居跡
焼土遺構
焼土遺構
IIC8j住居跡
IIC9j住居跡
IIC9e住居跡
IIICOe住居跡
段状遺構
溝跡
IIIC3d住居跡
埋設土器
IIIC3g住居跡
補 8
溝跡
II
III
IV
0
20m

第17図　遺構配置図

表３　住居跡一覧表

遺構名	平面形	規模(m)	炉の形態	炉の規模(cm)	柱穴配置	特　　徴
ⅡＣ１ｅ	隅丸方形	2.3×3.1	な　し		0	床面北西壁寄り立石
ⅡＣ４ｆ	不　明	(4.0)以上	地床炉	96×30	３本以上	
ⅡＣ８ｊ	楕円形	2.3×2.0	地床炉	30×30	0	炉焼土を切って立石
ⅡＣ９ｅ	楕円形	2.2×2.0	な　し		0	床面中央付近立石
ⅡＣ９ｊ	楕円形	3.7×3.2	地床炉	30×30	3	
ⅢＣ０ｅ	楕円形	(4.0)×3.0	石囲炉	64×60	6	拡張？
ⅢＣ３ｄ	円or楕円	(2.6)	地床炉	68×34	0	床面北西壁寄り立石
ⅢＣ３ｇ	楕円形	5.3×3.6	地床炉	250×70	8	拡張

表４　土坑一覧表

遺構名	平面形	断面形	炉の形態	頸部径	柱穴配置	深	出土遺物
ＩＣ９ａ	楕円	ビーカー	48×42	－	42×38	46	－
ⅡＣ０ｅ	楕円	ビーカー	80×74	－	58×56	72	－
ⅡＣ０ｈ	楕円	袋状	62×50	－	53×52	48	－
ⅡＣ０ｊ	不整楕円	逆台形	134×122	－	95×68	60	－
ⅡＣ２ｅ①	楕円	逆台形	97×80	－	57×48	58	土器･剝片(埋土中)
ⅡＣ２ｅ②	楕円	逆台形	142×145	－	60×62	38	－
ⅡＣ２ｊ	長楕円	浅皿状	(160)×96	－	－	28	－
ⅡＤ２ａ	円	浅皿状	76×72	－	104×98	14	－
ⅡＣ３ｅ	不整楕円	フラスコ	156×136	96×83	104×98	62	土器(床面直上)
ⅡＤ３ｄ	楕円	フラスコ	98×80	72×54	104×96	88	－
ⅡＣ４ｆ	楕円	袋状	108×86	108×82	90×78	100	土器･剝片(埋土中)
ⅡＤ４ｃ	楕円	円筒	76×60	－	52×48	36	－
ⅡＣ５ｅ	楕円	ビーカー	102×92	－	68×51	68	土器･剝片(埋土中)
ⅡＣ７ｅ	楕円	ビーカー	117×94	－	58×50	53	－
ⅡＣ７ｇ	楕円	円筒	70×62	－	28×12	98	－
ⅡＣ８ｄ	楕円	円筒	68×63	－	34×30	33	－
ⅡＣ８ｅ	楕円	円筒	84×78	52×48	42×38	56	－
ⅡＣ９ｊ	楕円	浅皿状	200×(100)	－	－	32	－
ⅢＣ０ｊ	楕円	浅皿状	266×160	－	152×117	15	土器･剝片(埋土中)

遺構名	平面形	断面形	炉の形態	頸部径	柱穴配置	深	出土遺物
ⅢＣ４ｆ	楕円	フラスコ	62×55	56×44	62×56	72	土器・剝片(埋土中)
ⅢＣ４ｇ	楕円	円筒	100×74	－	56×53	50	－
ⅥＤ１ｂ①	楕円	浅鉢状	96×86	－	24×20	36	－
ⅥＤ１ｂ②	楕円	浅鉢状	76×73	－	21×20	28	－

注：表中の単位はcm　・深さは検出面からの深さを表す

（　）付は重複や攪乱のために全体を検出できなかったので数値は検出時の最大径を表す

７．遺構外出土遺物

Ｂ地区の遺構外から出土した遺物は、全部でコンテナ８箱である。種別は縄文土器・土製品・石器・石製品・古銭であるが、圧倒的に縄文土器が多く、石器・石製品は少ない。

（１）　土器

遺構外からコンテナ（40×32×30cm）７箱が出土した。出土は、調査区の中央部および北側の斜面上部の出土が多い。その内容は縄文早期末～前期（第Ⅰ群）、中期末葉～後期初頭（第II群）、後期前葉（第III群）、その他の後期と見られる土器（第IV群）、晩期（第Ⅴ群）の５つに分けられる。その内、特に出土量が多い後期の土器については、その文様の特徴と粗製土器の口縁の特徴から５類に分け、縄文早期末～前期については、３類に分けてみた。晩期の土器については出土量が少ないので細分は行わなかった。第III群（後期前葉）としたものの中には、第II群（中期末葉～後期初頭）の時期に含まれるものもあると思う。遺構外の土器で掲載したものは183点である。

第Ⅰ群（縄文時代早期末～前期としたもの）

１類　胎土に繊維が含まれる土器　（掲載番号　77）

２類　口縁に指頭や工具で圧痕や刻みを加えて、波状口縁または鋸歯状装飾になっているもの　（掲載番号　78～85）

３類　竹管による沈線や鋸歯状文、刺突が見られるもの　（掲載番号　86～101）

第II群（縄文中期末葉～後期初頭と見られるもの）

・沈線によりＪ字状文をモチーフとするものや断面が三角形の隆帯を貼付されるものなど　（掲載番号　102～105）

第III群（縄文時代後期前葉としたもの）

１類　連鎖状隆起線文を主とするもの　（掲載番号　106～110）

２類　連鎖状隆起線文＋沈線文によって施文されるもの　（掲載番号　111～116）

３類　沈線文を主とするもの　（掲載番号　117～214）

４類　壺形の土器　（掲載番号　215～218）

５類　地紋のみの土器で、波状口縁をもつものや縄文原体を横縦回転し羽状縄文のように施文しているもの　（掲載番号　219～225）

第IV群（第III群に含まれると思われる地紋のみの土器及び底部）　（掲載番号　226～256）

第Ⅴ群（縄文時代晩期としたもの）　（掲載番号　257～259）

（2）　土製品

出土しているのは、全て土器片を利用した円盤状土製品である。　（掲載番号　260～264）

（3）　石器・石製品

遺構内外から567点の石器・石製品が出土した。遺構内から出土は64点と全体の11.3％である。本報告書では、刃部の作り出しや使用痕跡が明瞭に認められる剝片石器と礫石器、石製品など101点と黒曜石の剝片４点を掲載した。また、出土した石器・石製品を形状から下記のように分類してみた。

A群　石鏃 遺構外からは４点出土している。

１類　無茎鏃　３点出土している。　（掲載番号　265～267）

２類　有茎鏃　１点出土しているが、破損している。　（掲載番号　268）

B群　石匙　６点出土している。

１類　縦長石匙　５点出土している。　（掲載番号　269～273）

２類　横長石匙　１点出土している。　（掲載番号　274）

C群　石錐　１点出土している。剝片石器の尖っている部分を利用している。　（掲載番号　275）

D群　箆状石器　14点出土している。

１類　刃部に両面から調整を加えているもの　１点出土している。　（掲載番号　276）

２類　刃部に片面から調整を加えているもの　13点出土している。　（掲載番号　277～289）

E群　不定形石器　28点出土している。

１類　２次調整が両面から加えられているもの　９点出土している。　（掲載番号　290～298）

２類　２次調整が片面から加えられているもの　15点出土している。　（掲載番号　299～313）

３類　微少剝離痕を有するもの　４点出土している。　（掲載番号　314～317）

F群　磨製石斧　２点出土している。いずれも基部のみの欠損品である。　（掲載番号　318・319）

G群　敲石・磨石類　26点出土している。

１類　磨石　８点出土している。　（掲載番号　320～326）

２類　凹石　４点出土している。　（掲載番号　327～331）

３類　敲石 単独で使用されたものは出土していない。

４類　１・２・３類の特徴が複数表れているもの　13点出土している。　（掲載番号　332～344）

５類　礫石錘　１点出土している。　（掲載番号　345）

H群　石製品　７点出土している。

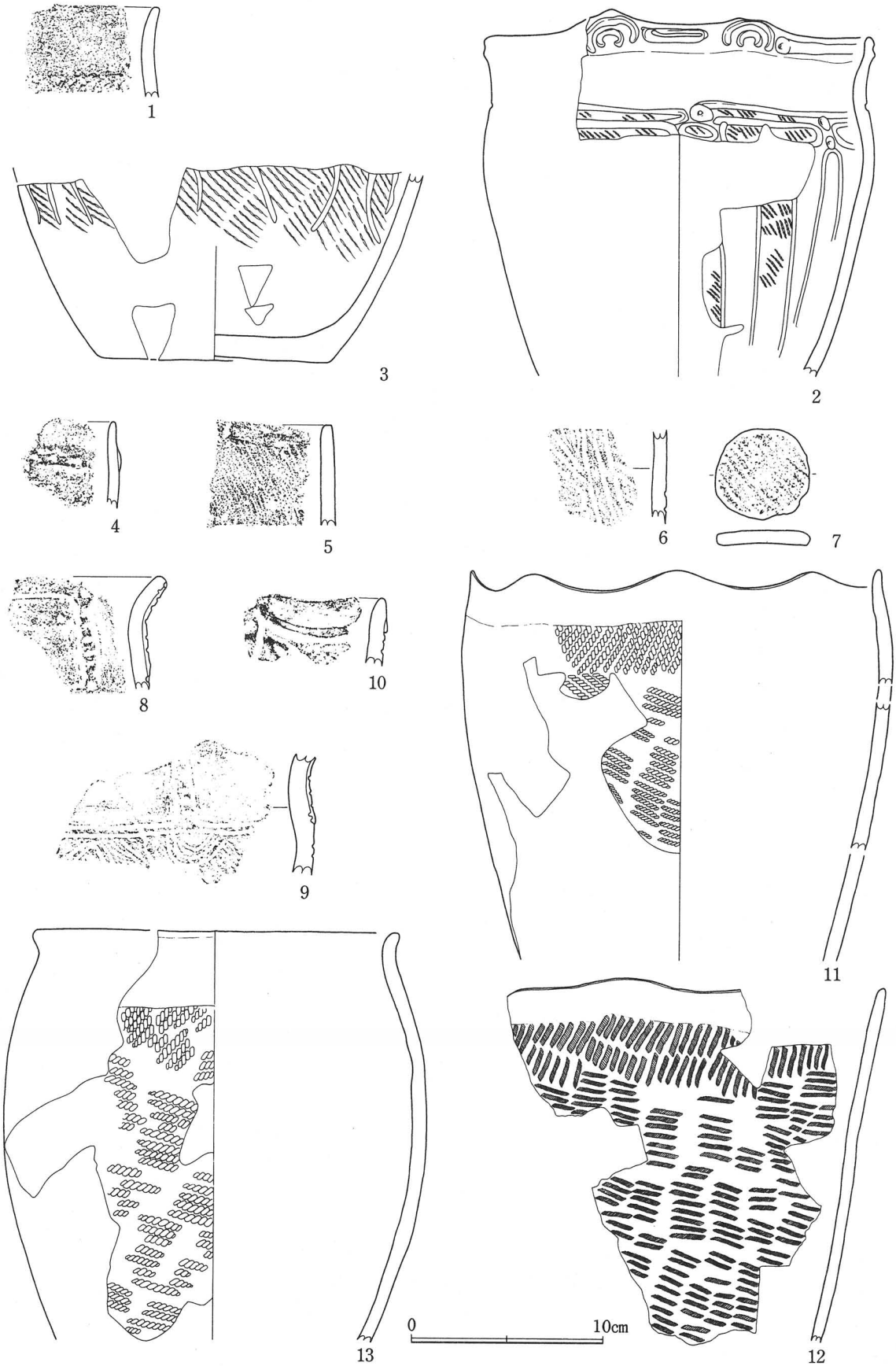
１類　有孔石製品　１点出土している。　（掲載番号　346）

２類　円盤状石製品　６点出土している。　（掲載番号　347～352）

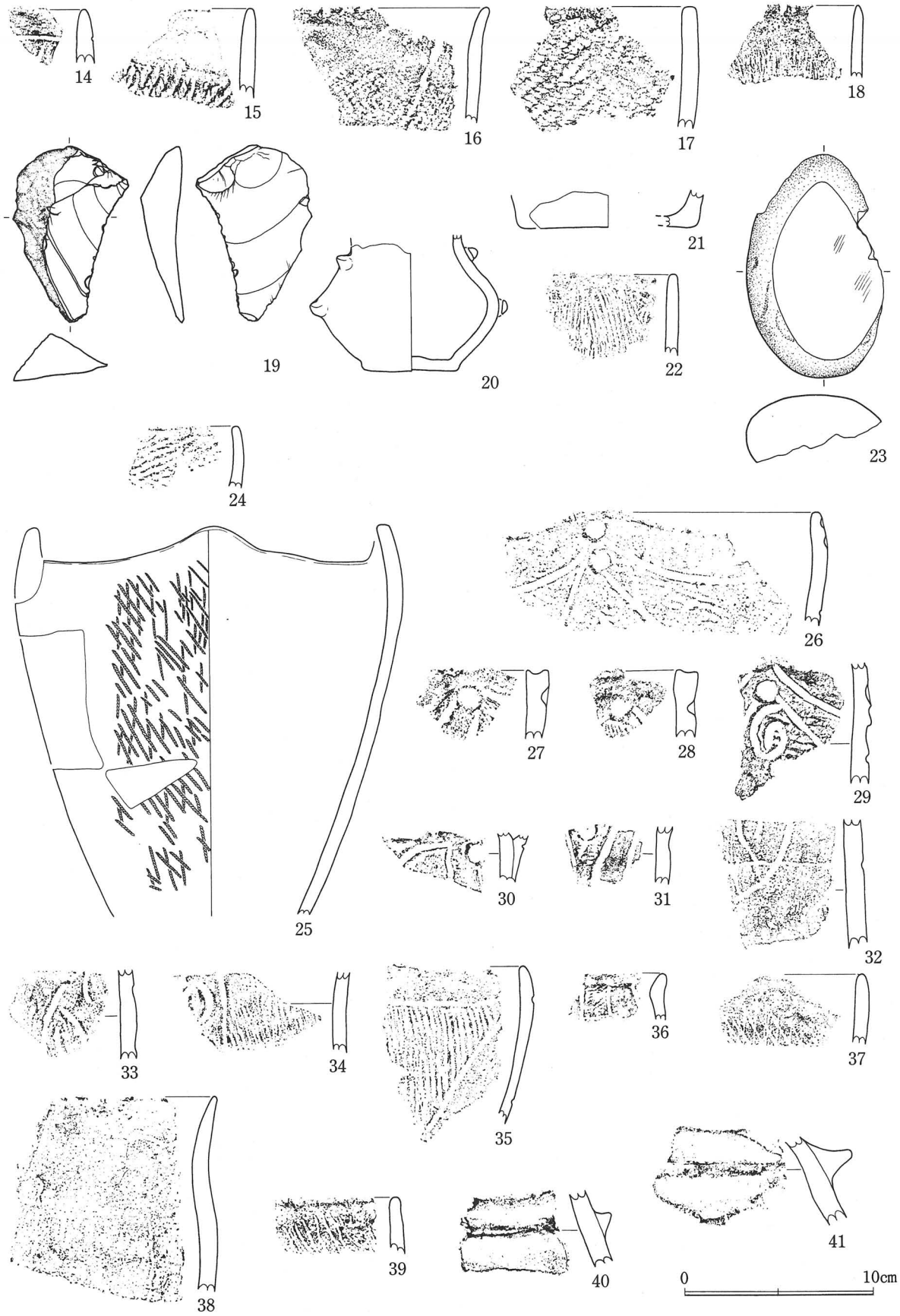
I群　黒曜石剝片　３点出土している。　（掲載番号　353～355）

（4）　古銭

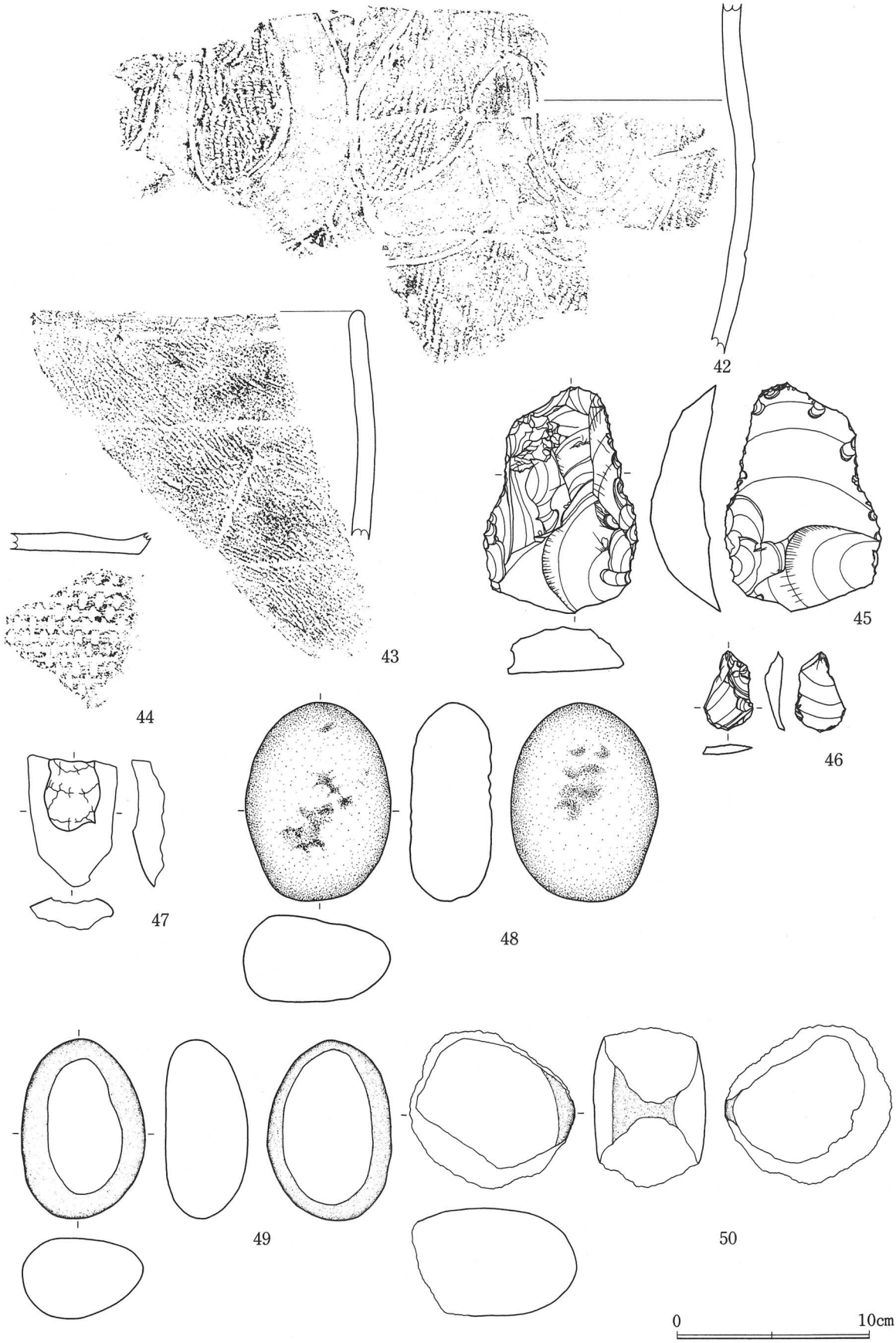
５枚出土している。永楽通宝１枚と寛永通宝４枚が出土している。　（掲載番号　356～360）



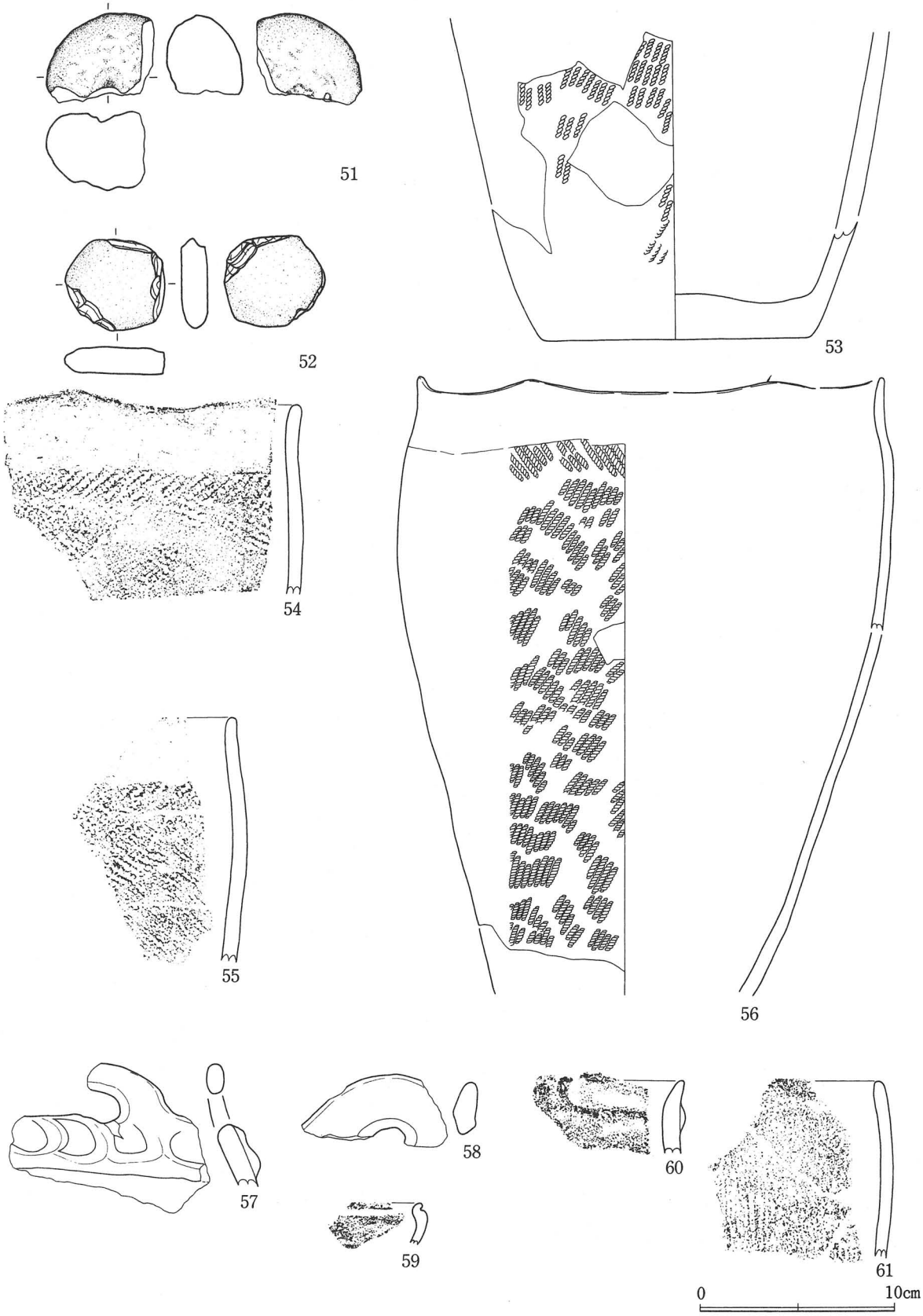
第18図　住居内出土遺物（1）



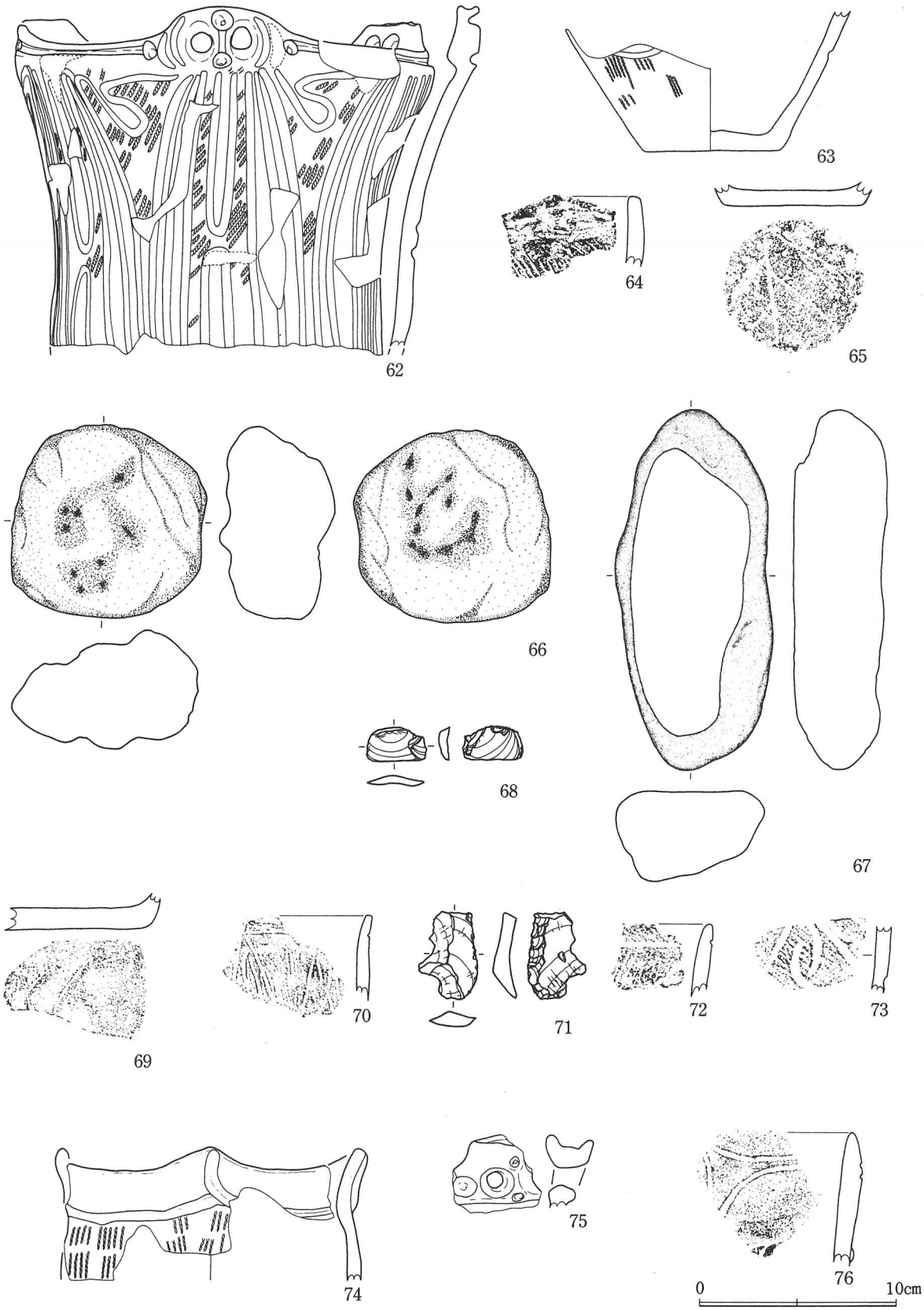
第19図　住居内出土遺物（2）



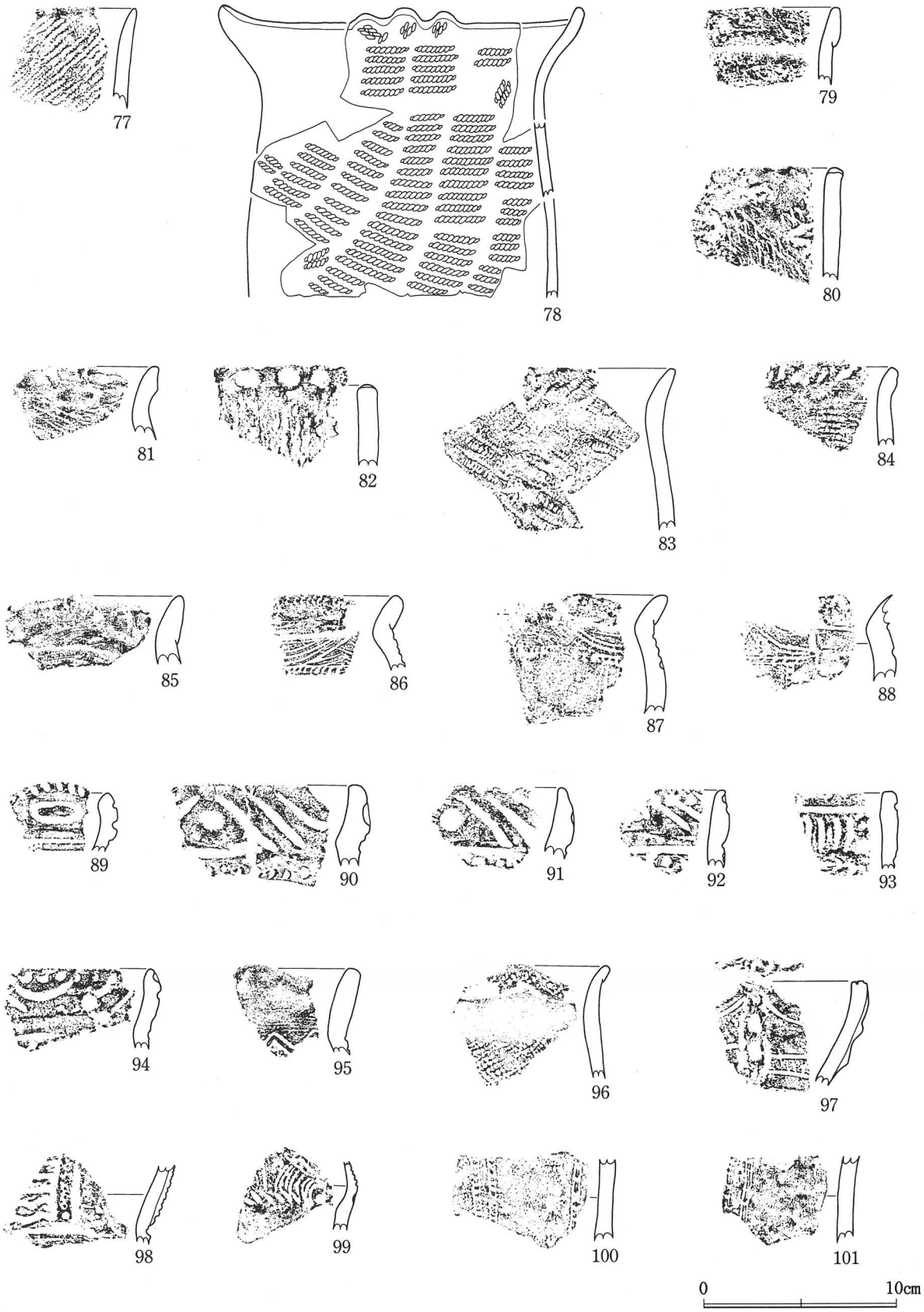
第20図　住居内出土遺物（3）



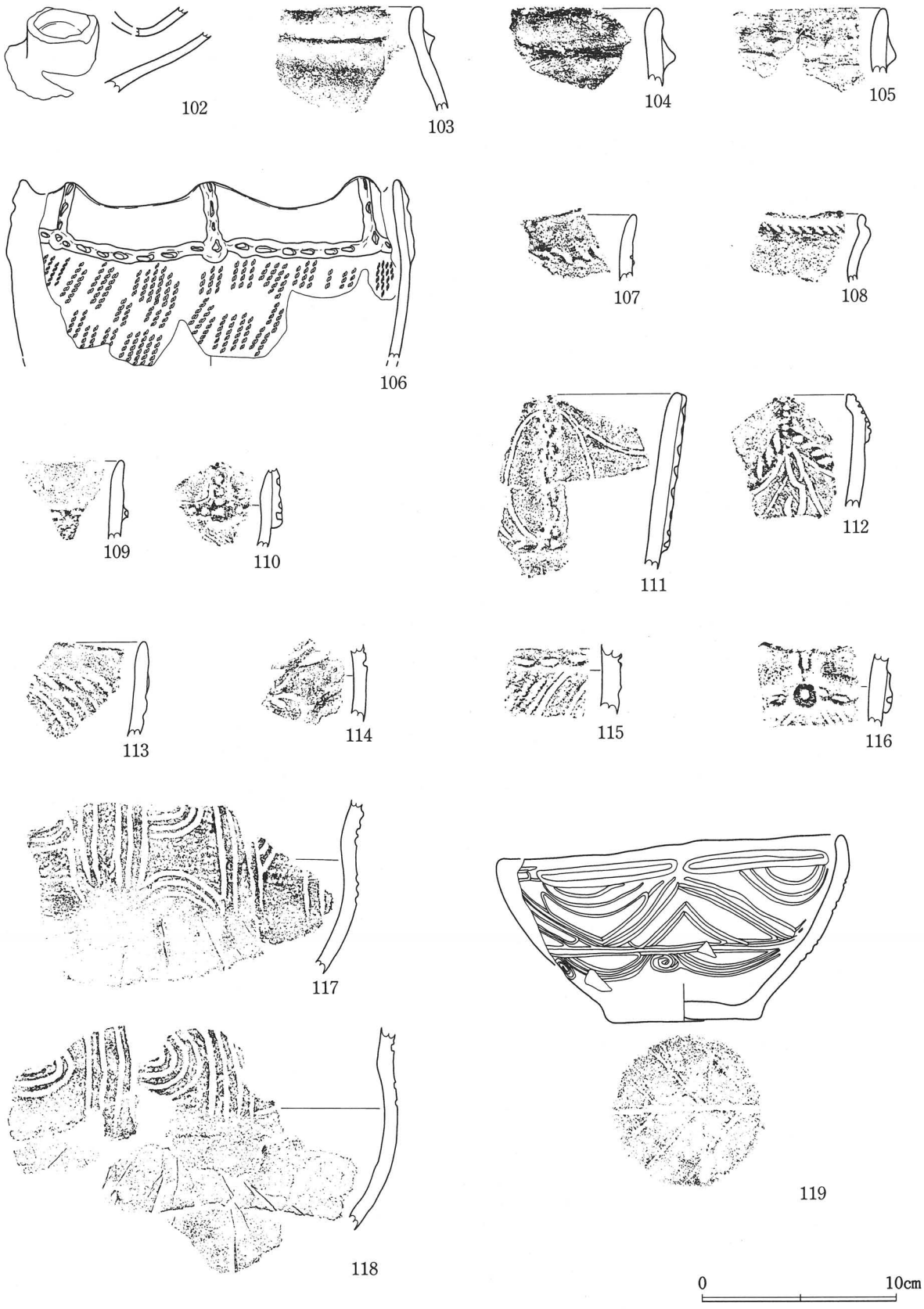
第21図　住居内出土遺物（4）・埋設土器・土坑内出土遺物（1）



第22図　土坑内出土遺物（２）・溝跡出土遺物

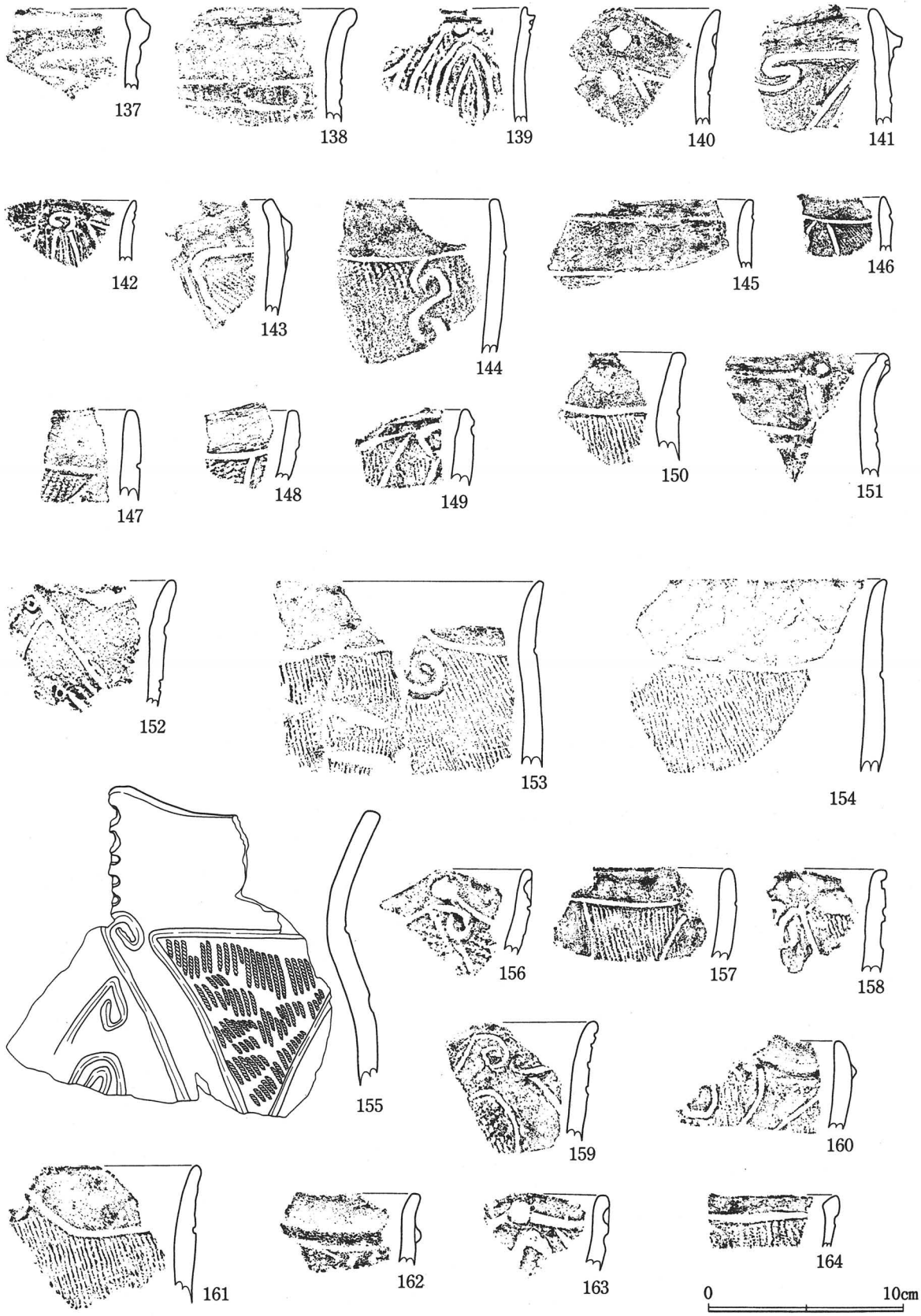


第23図　遺構外出土土器（1）

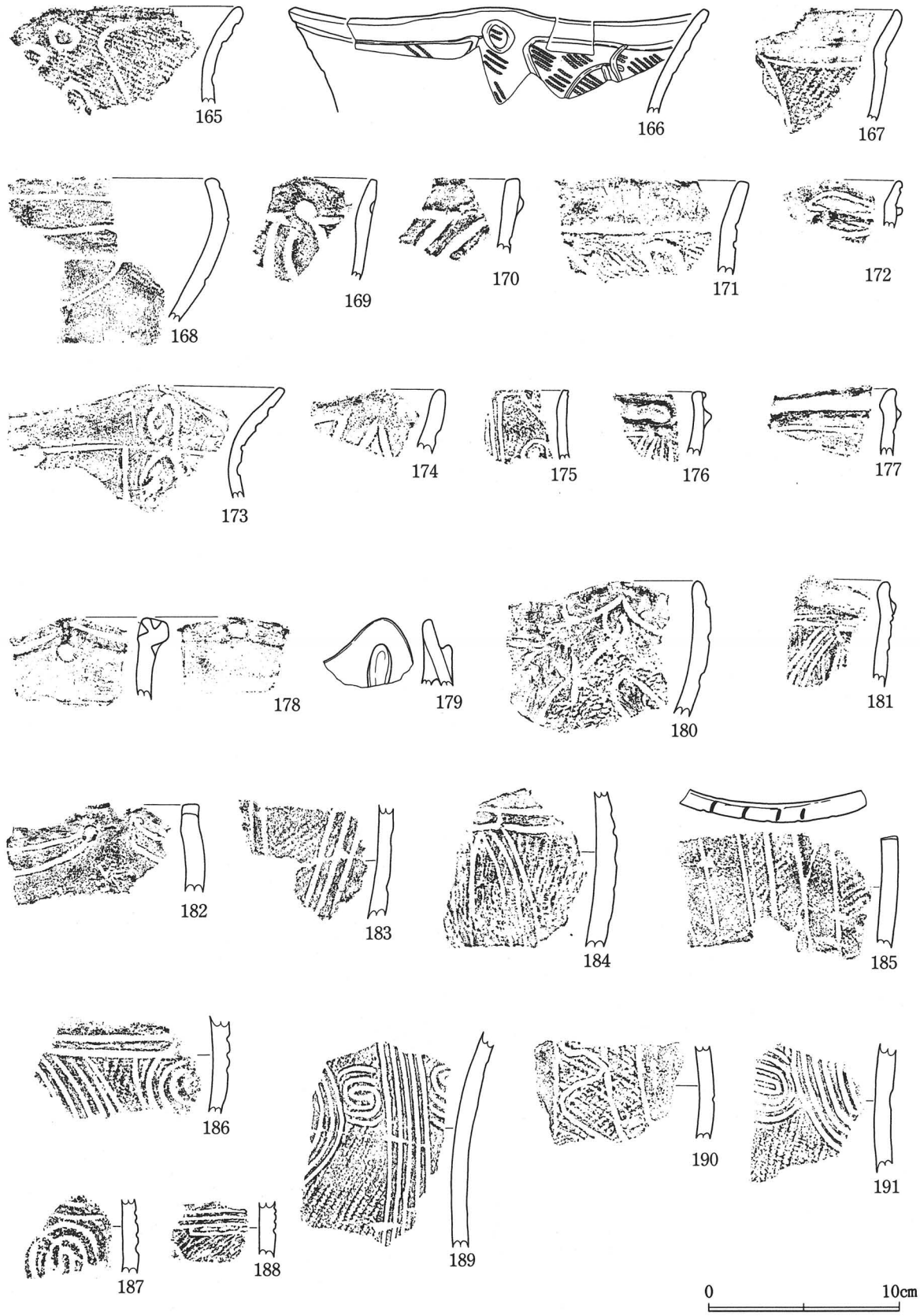


第24図　遺構外出土土器（2）

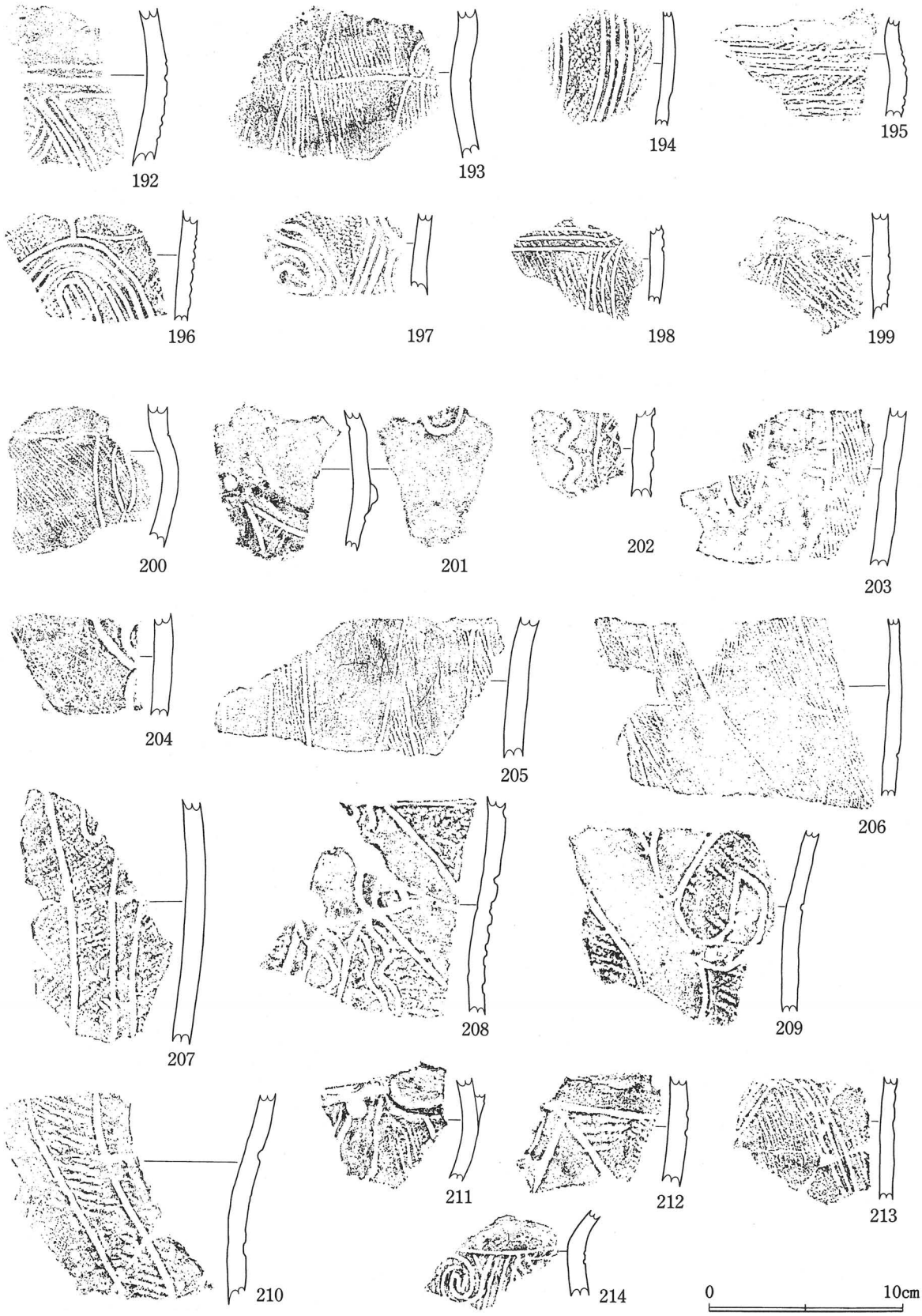
第25図　遺構外出土土器（3）



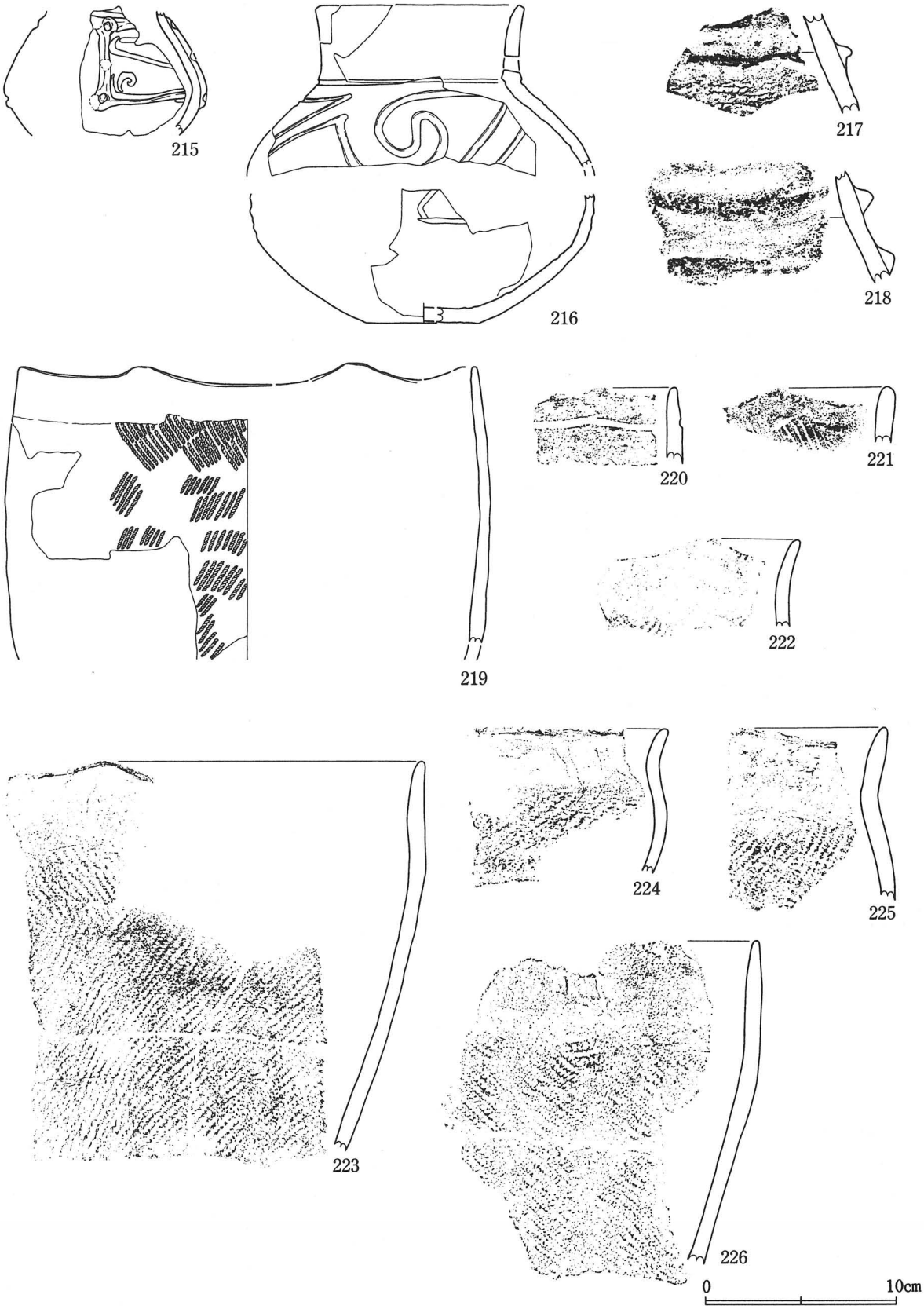
第26図　遺構外出土土器（4）



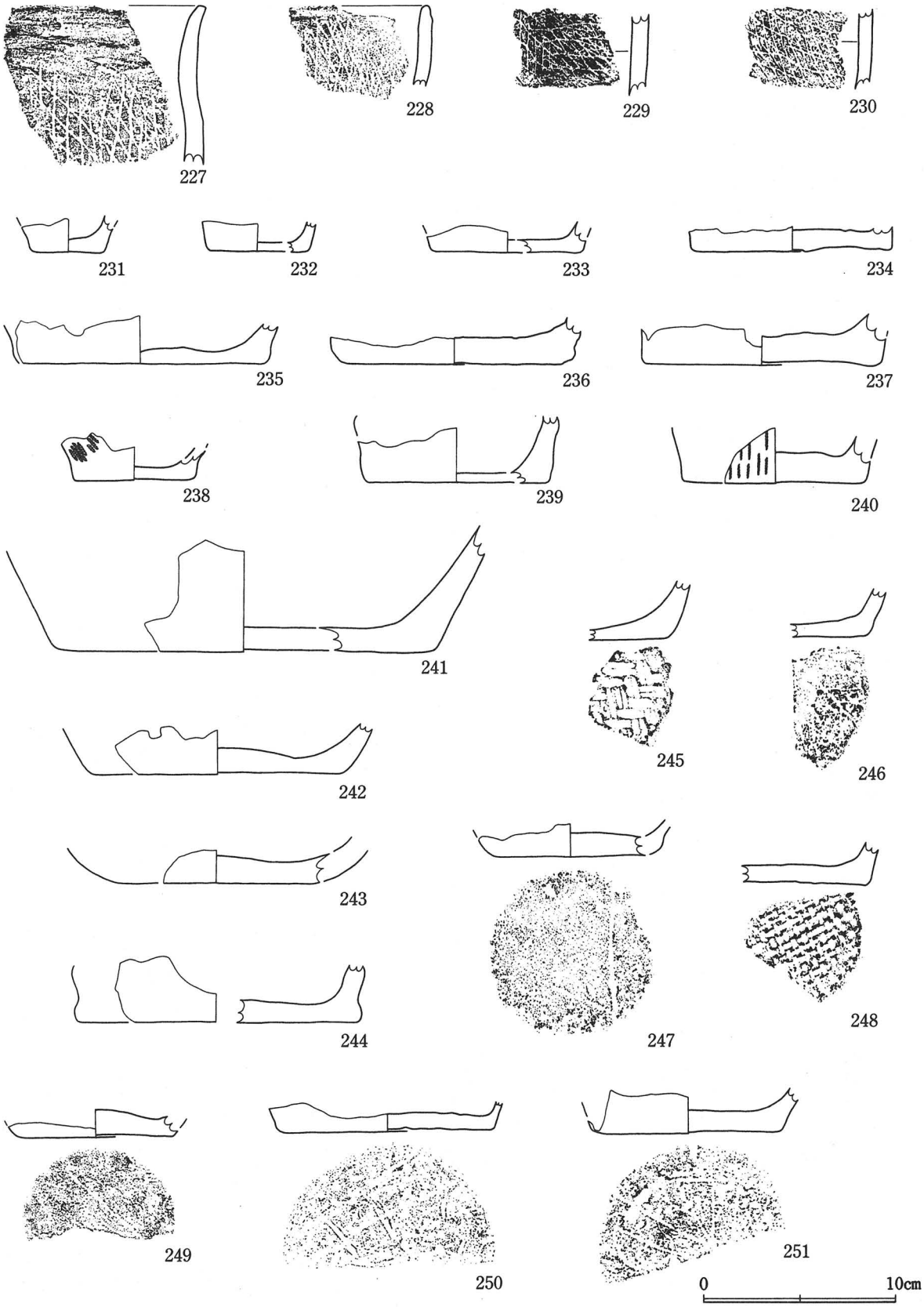
第27図　遺構外出土土器（5）



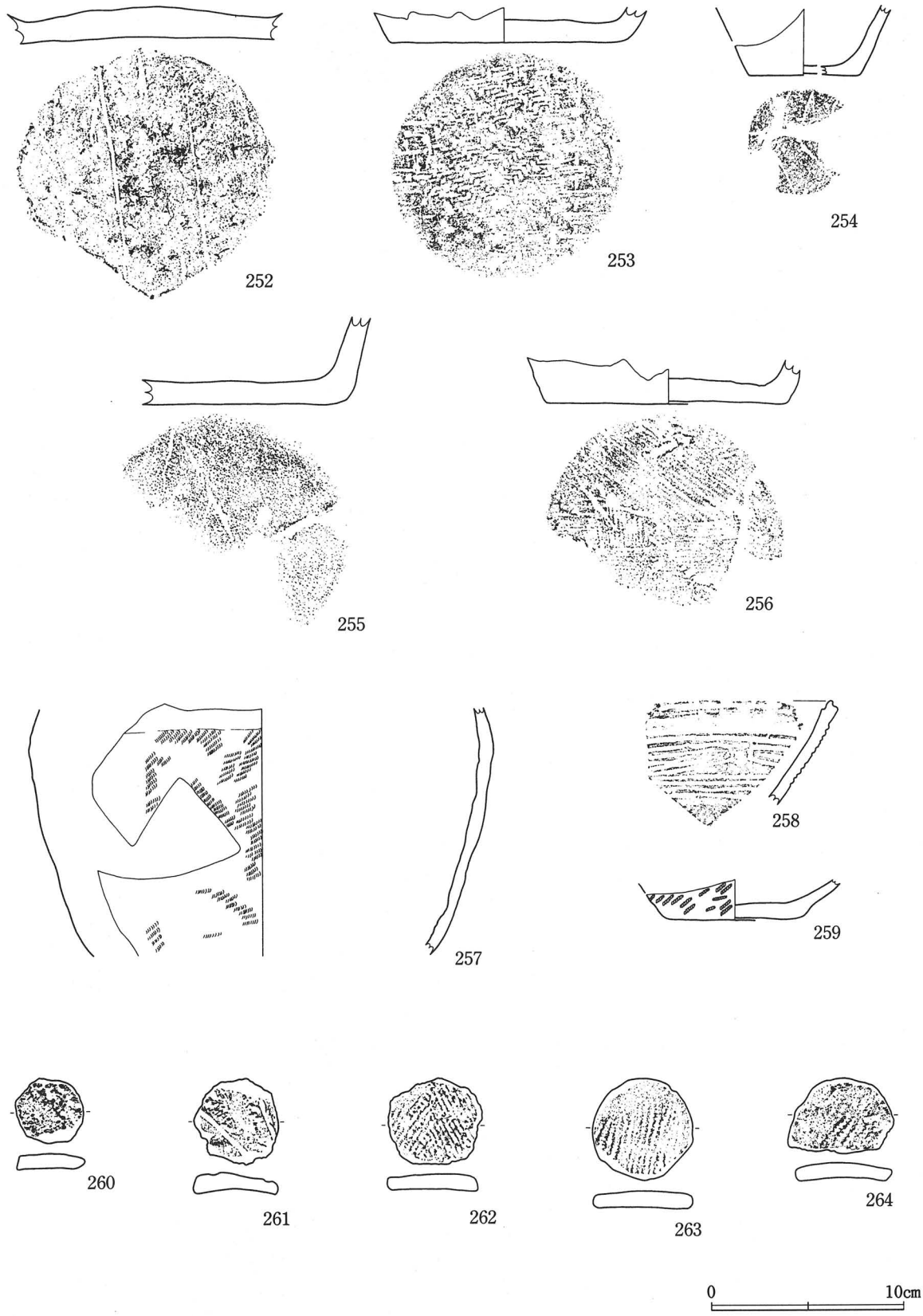
第28図　遺構外出土土器（6）



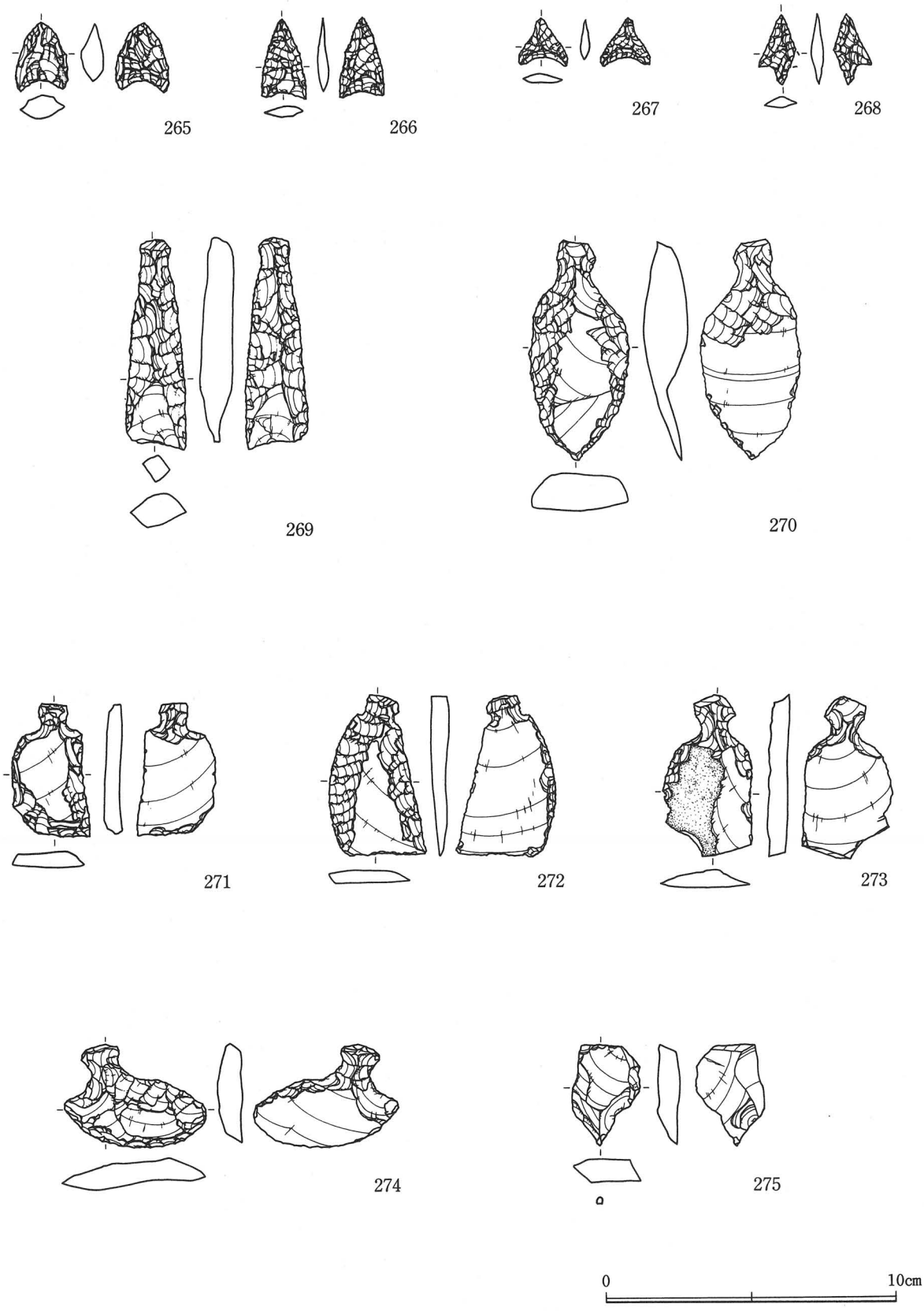
第29図　遺構外出土土器（7）



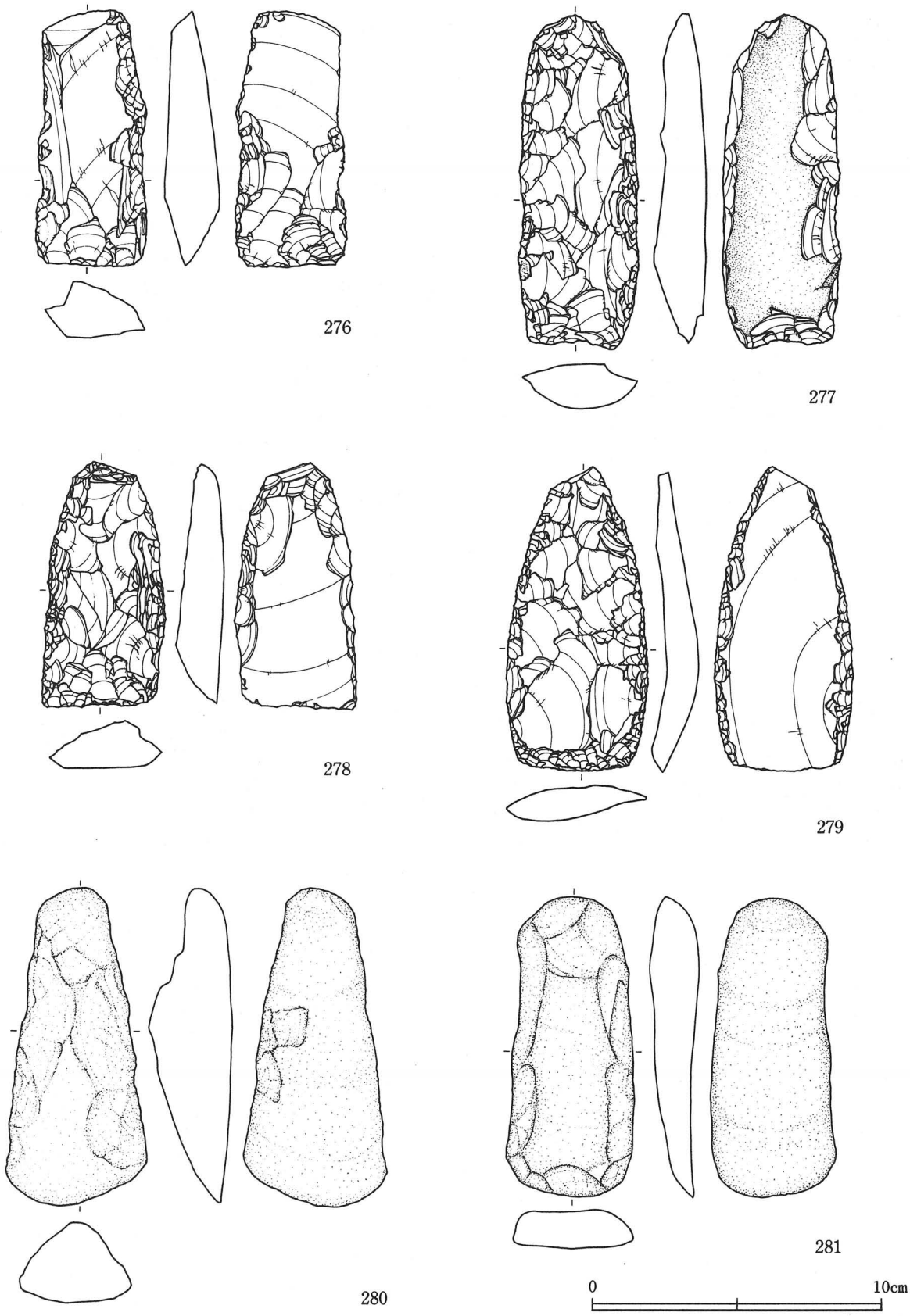
第30図　遺構外出土土器（8）



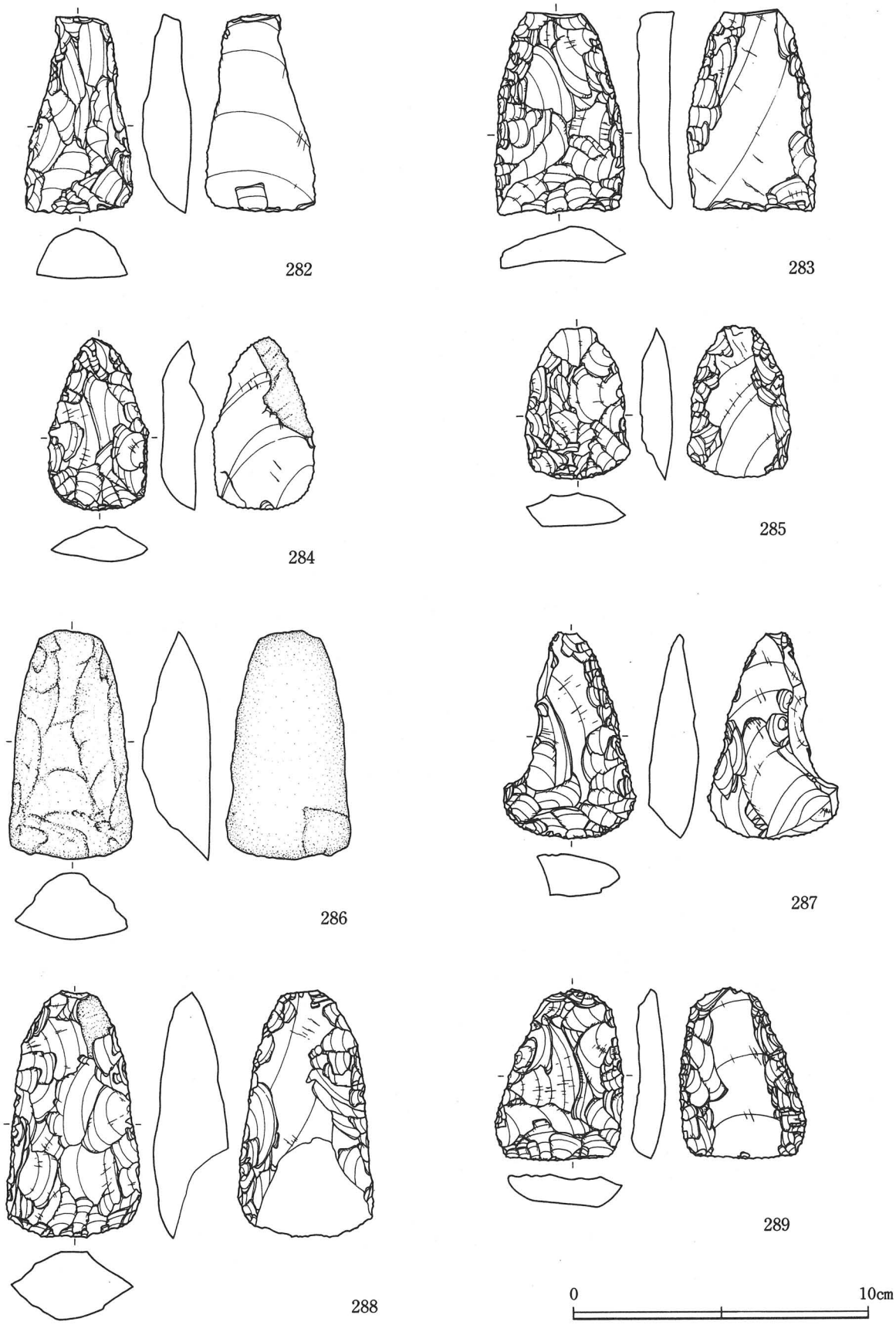
第31図　遺構外出土土器（9）・土製品



第32図　遺構外出土石器（1）

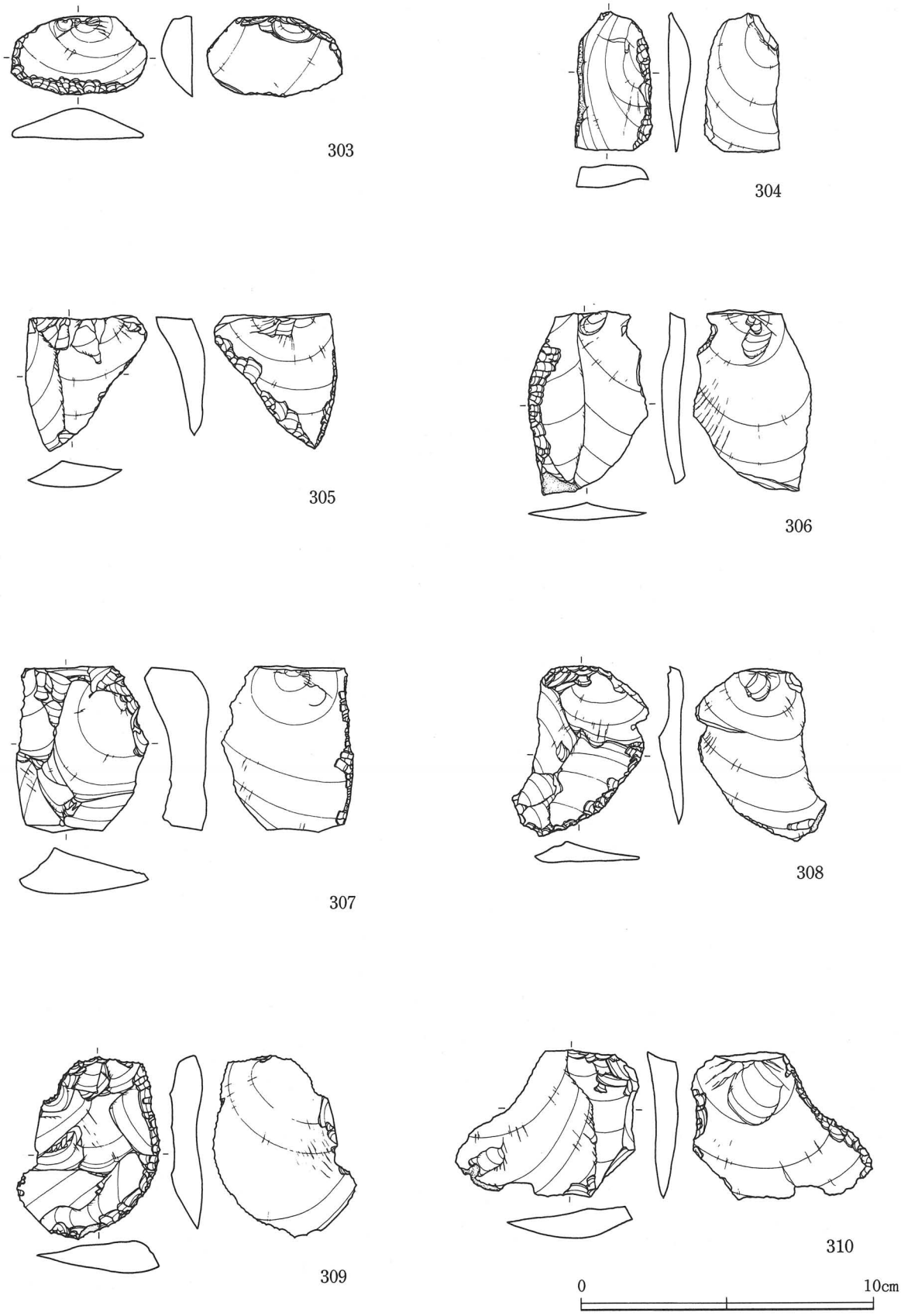


第33図　遺構外出土石器（2）

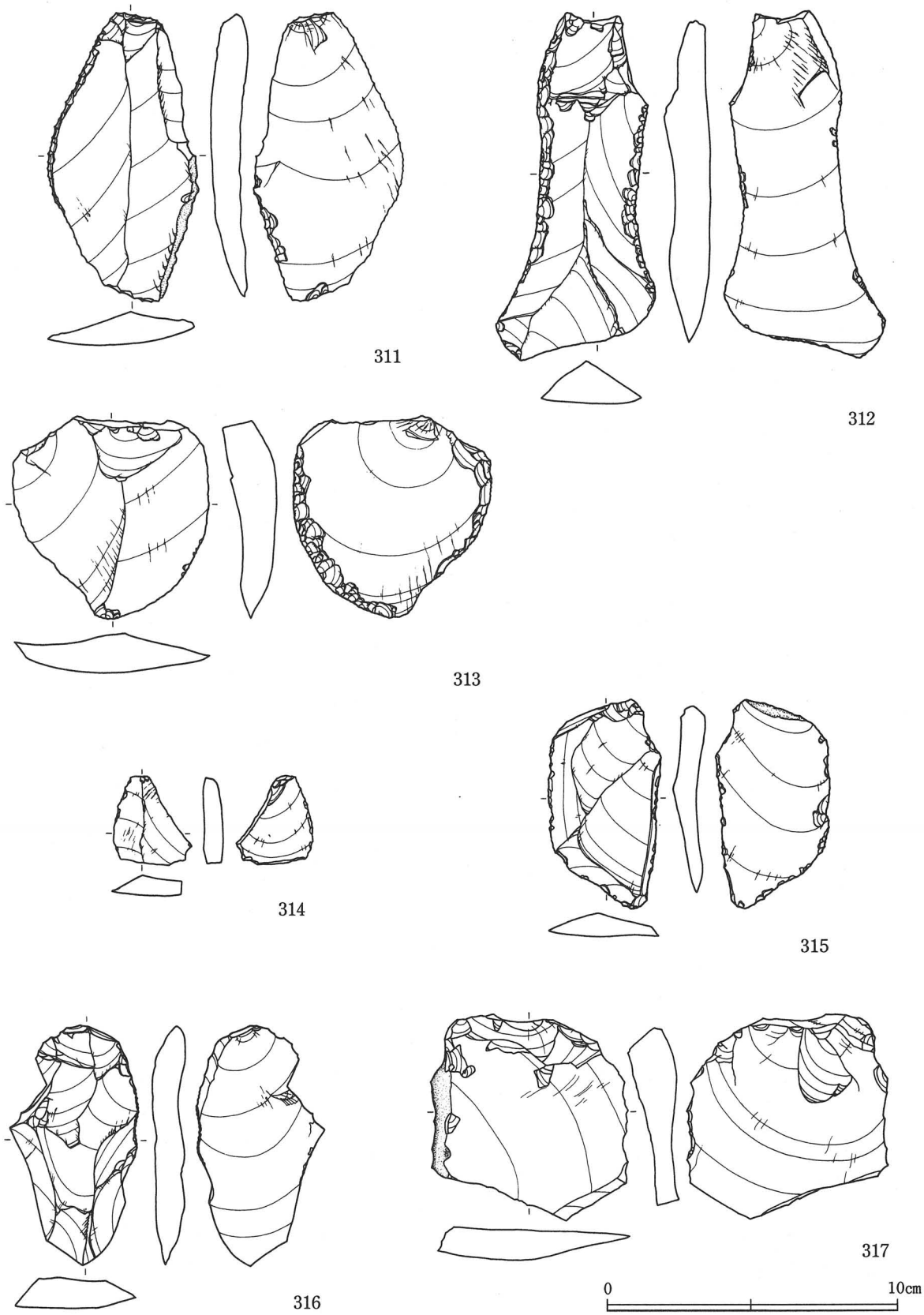


第34図　遺構外出土石器（3）

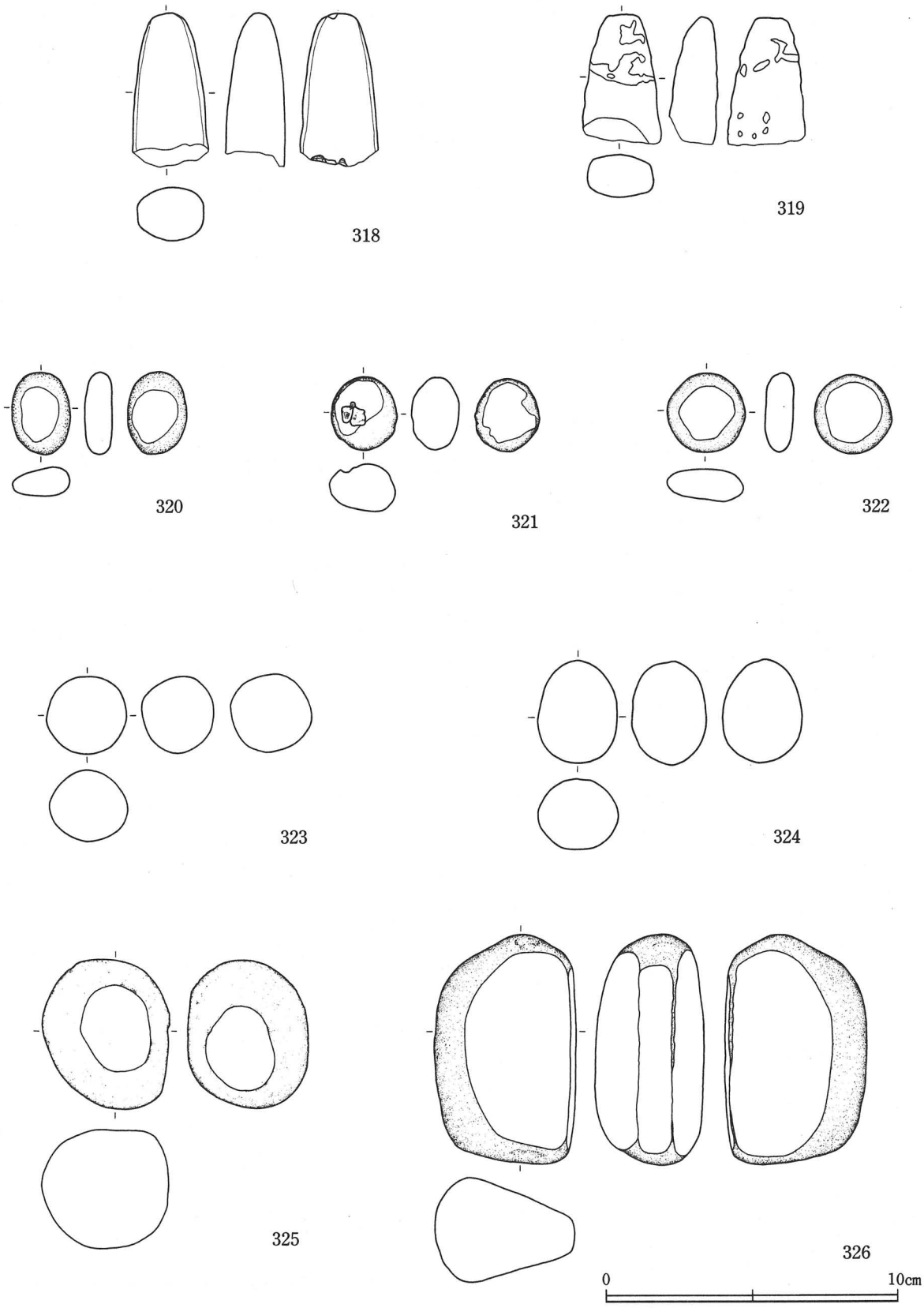
第35図　遺構外出土石器（4）



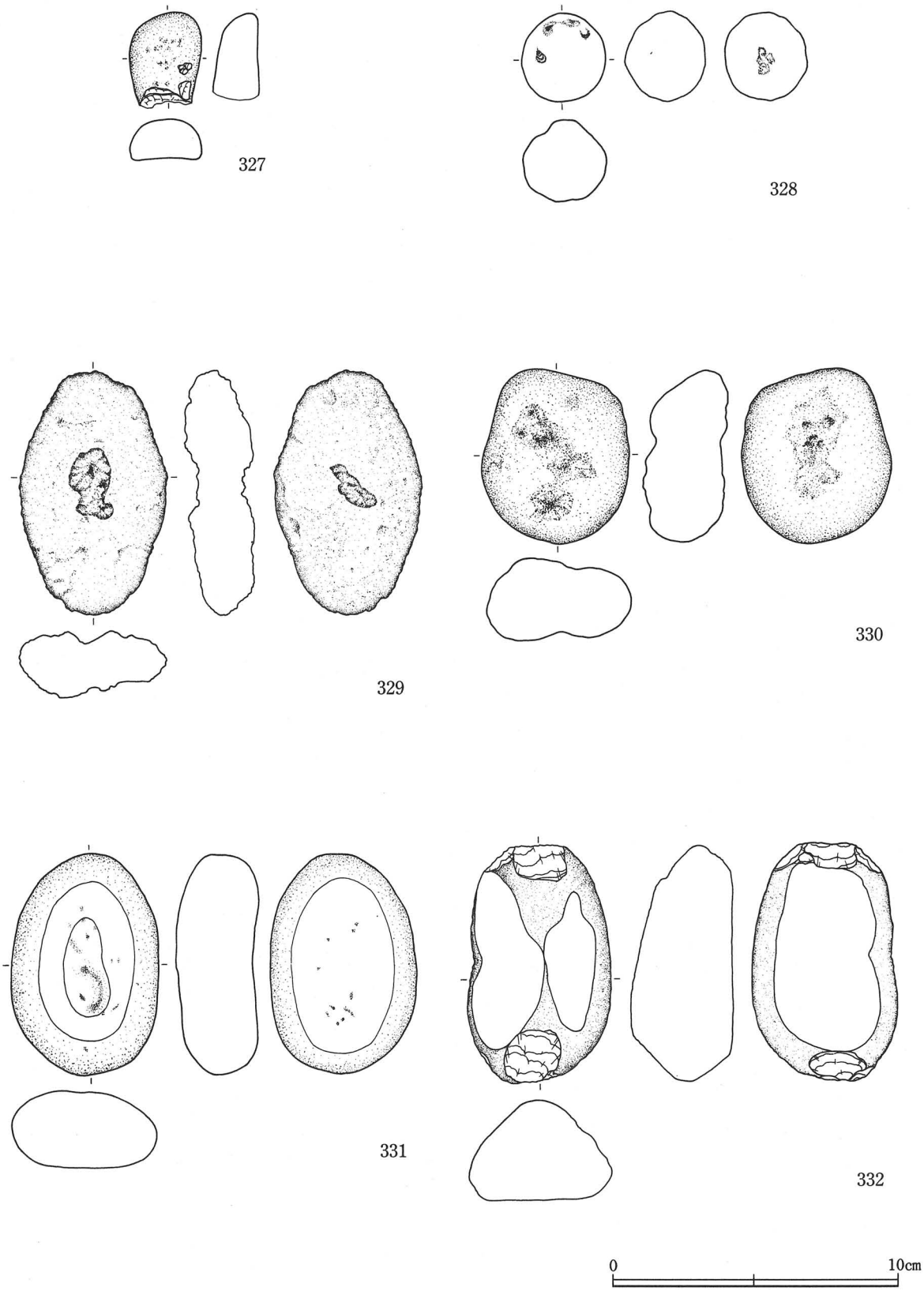
第36図　遺構外出土石器（5）



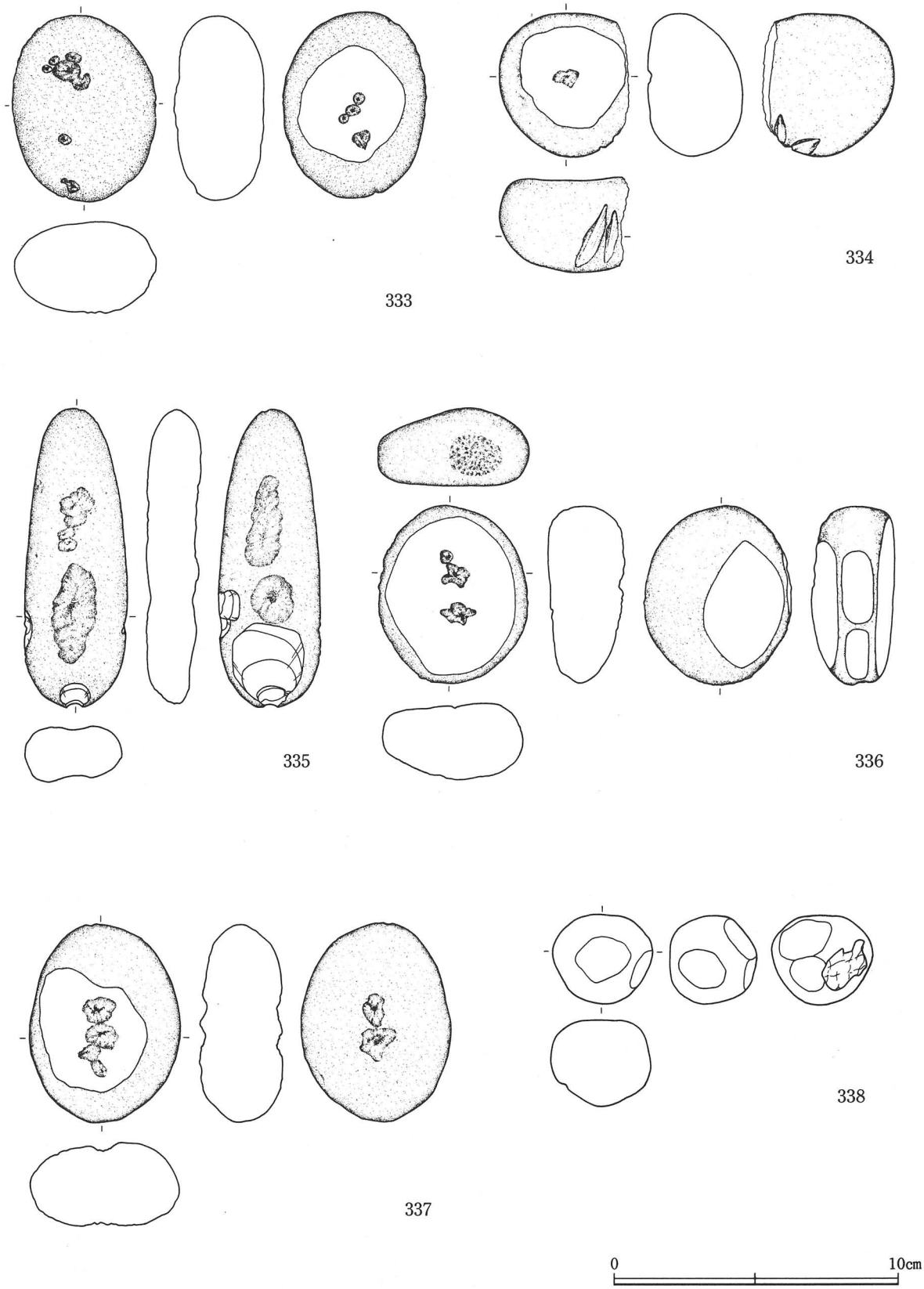
第37図　遺構外出土石器（6）



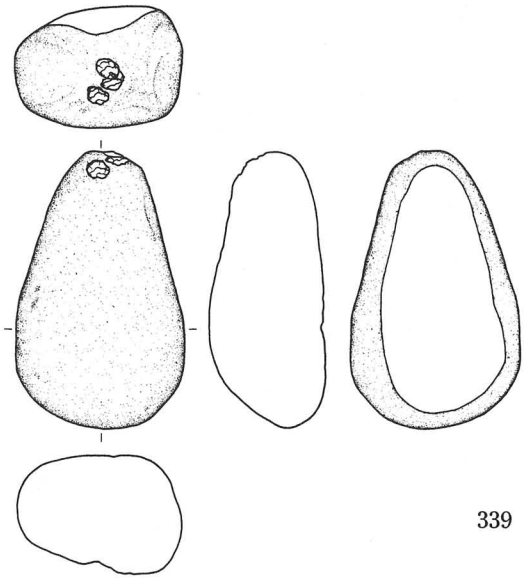
第38図　遺構外出土石器（7）



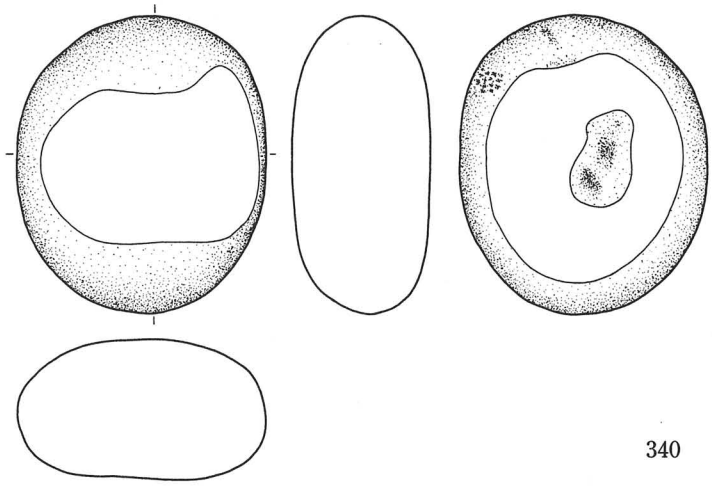
第39図　遺構外出土石器（8）



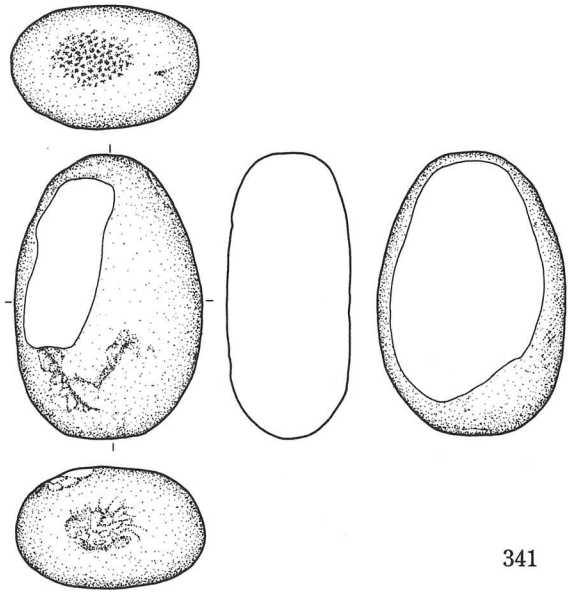
第40図　遺構外出土石器（9）



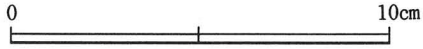
339



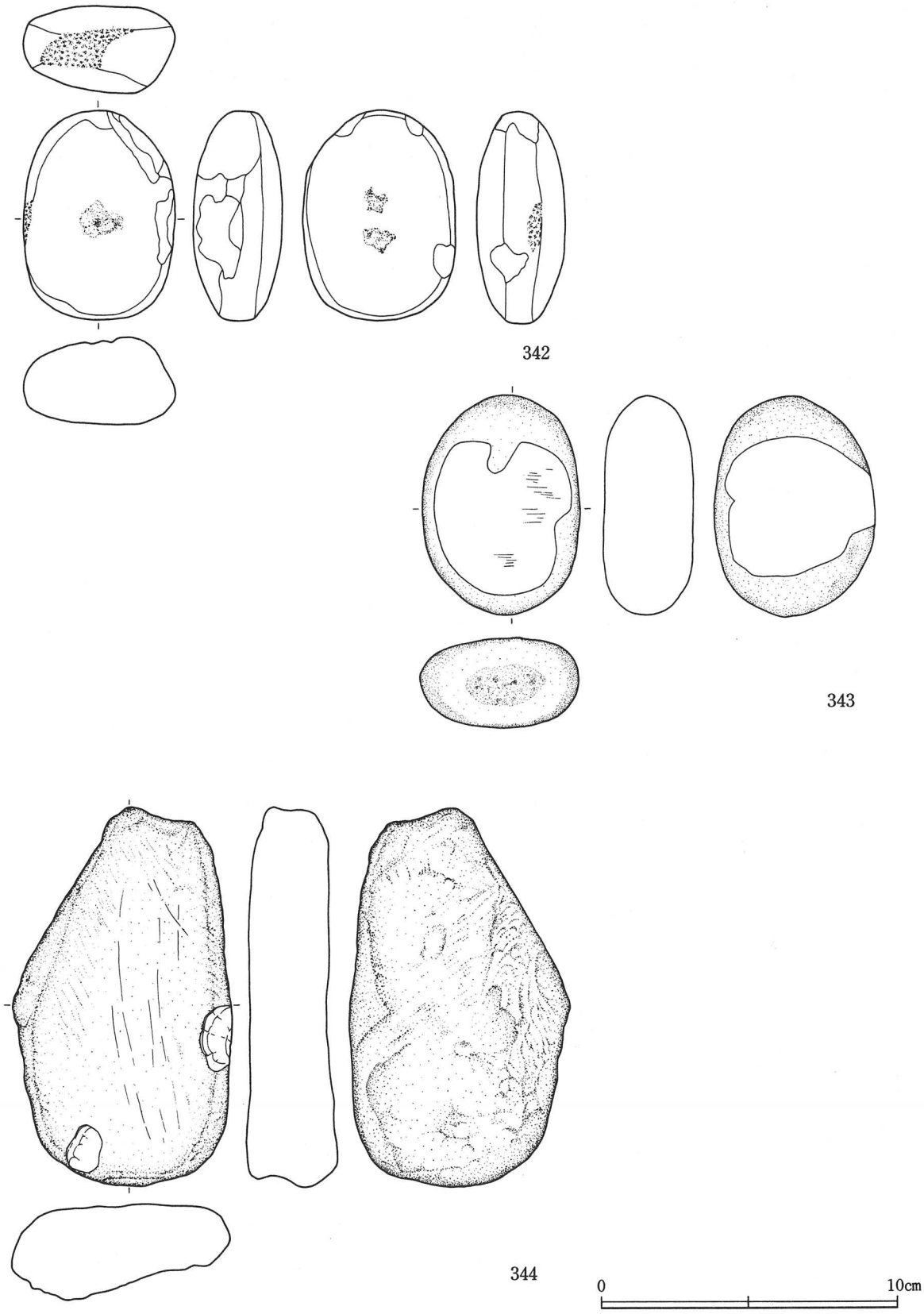
340



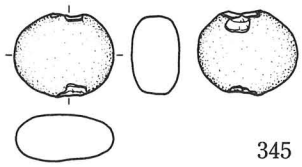
341

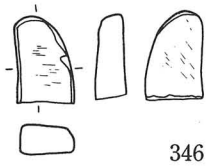


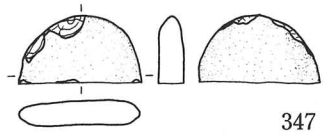
第41図　遺構外出土石器（10）

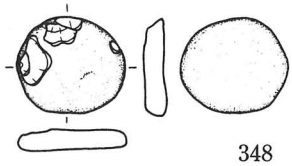


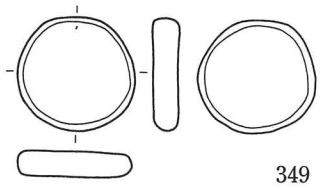
第42図　遺構外出土石器（11）

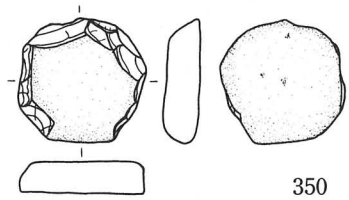


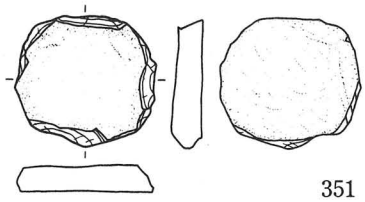


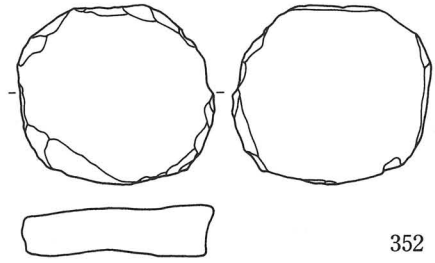


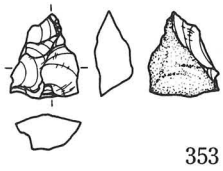


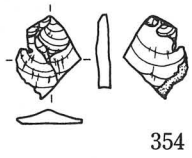


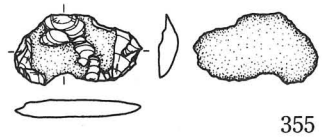




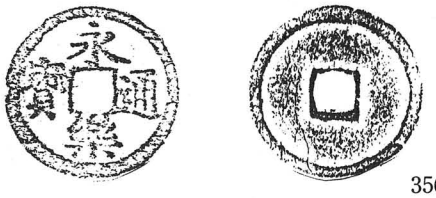




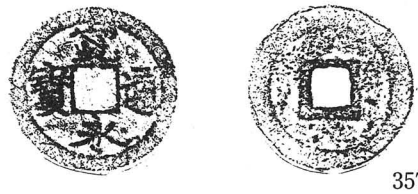




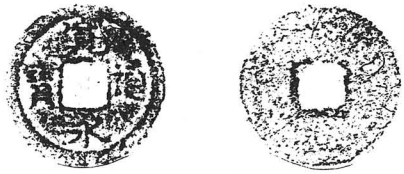
第43図　遺構外出土石器（12）・石製品



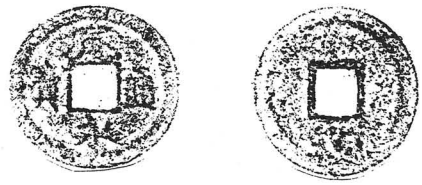
356



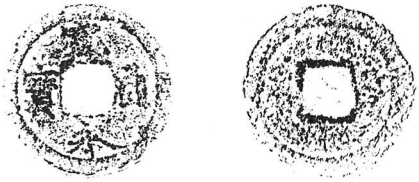
357



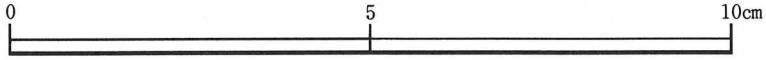
358



359



360



第44図　古銭

No.	仮	出土地点	器種	部位	文様の特徴等	分類
1	4	ⅡＣ１ｅ住埋土	深鉢	口	ＬＲ横　すす	Ⅲ５
2	51	ⅡＣ４ｆ住Ｐ２埋土	深鉢	口～胴	口縁突起Ｃ字状文　頸部刺突　逆U字状文　撚糸	Ⅲ３
3	53	ⅡＣ４ｆ住Ｐ１埋土	深鉢	胴～底	弧状文　撚糸　焼成	Ⅲ３
4	12	ⅡＣ４ｆ住Ｐ２	深鉢	口	連鎖状隆帯　ＲＬ縦	Ⅲ１
5	13	ⅡＣ４ｆ住Ｐ１	深鉢	口	撚糸	Ⅲ５
6	17	ⅡＣ８ｊ住西半埋土	深鉢	胴	平行沈線渦巻文	Ⅲ１
7	358	ⅡＣ８ｊ住埋土	円盤状		径５．０×４．５cm　厚さ７mm　重量２０．３ｇ	
8	20	ⅡＣ９ｅ住埋土	深鉢	口	連鎖状隆帯懸垂　隆帯上下刺突	Ⅲ２
9	19	ⅡＣ９ｅ住埋土	深鉢	頸	連鎖状隆帯懸垂　頸部平行沈線　曲線文　撚糸	Ⅲ２
10	24	ⅡＣ９ｅ住埋土	深鉢	口	波状口縁頂部から頸部隆帯連絡　ＲＬ縦	Ⅲ２
11	54	ⅡＣ９ｊ住埋土下部	深鉢	口～胴	波状口縁８単位　ＬＲ横縦	Ⅲ５
12	55	ⅡＣ９ｊ住褐色土	深鉢	口～胴	波状口縁　０段多条横縦　すす	Ⅲ５
13	50	ⅡＣ９ｊ住褐色土	深鉢	口～胴	ＬＲ横縦	Ⅳ
14	26	ⅡＣ９ｊ住埋土下部	深鉢	口	平行沈線渦巻文	Ⅲ３
15	25	ⅡＣ９ｊ住褐色土	深鉢	口	０段多条	Ⅳ
16	22	ⅡＣ９ｊ住褐色土	深鉢	口	波状口縁　ＲＬ斜	Ⅲ５
17	21	ⅡＣ９ｊ住埋土上部	深鉢	口～胴	ＲＬ縦	Ⅳ
18	23	ⅡＣ９ｊ住暗褐色土	深鉢	口	撚糸	Ⅳ
20	1	ⅢＣ０ｅ住床直上	小型壺	頸～底	頸部胴部突起（貫通孔）２単位	Ⅲ４
21	28	ⅢＣ０ｅ住Ｐ２	深鉢	底	焼成	Ⅳ
22	27	ⅢＣ０ｅ住埋土	深鉢	口	撚糸	Ⅳ
24	46	ⅢＣ３ｄ住埋土	深鉢	口	ＬＲ横　すす	Ⅳ
25	57	ⅢＣ３ｇ住暗褐色土	深鉢	口～胴	波状口縁４単位　網目状撚糸	Ⅲ５
26	37	ⅢＣ３ｇ住黒褐色土	深鉢	口	波状口縁頂部下部２個刺突　弧状文　ＲＬ横　すす	Ⅲ３
27	40	ⅢＣ３ｇ住暗褐色土	深鉢	口	口唇突起下部刺突　弧状沈線文　撚糸	Ⅲ３
28	39	ⅢＣ３ｇ住暗褐色土	深鉢	口	口唇突起下部刺突　弧状沈線文　撚糸　すす	Ⅲ３
29	253	ⅢＣ３ｇ住黒褐色土	深鉢	胴	刺突　渦巻文　ＬＲ縦	Ⅲ３
30	32	ⅢＣ３ｇ住暗褐色土	深鉢	頸	橋状把手下部刺突　頸部隆帯　沈線弧状文	Ⅲ２
31	38	ⅢＣ３ｇ住Ｐ１１	深鉢	胴	平行沈線　竹管刺突　ＲＬ縦	Ⅲ３
32	42	ⅢＣ３ｇ住Ｐ９	深鉢	胴	沈線区画内楕円形文　撚糸	Ⅲ３
33	44	ⅢＣ３ｇ住埋土	深鉢	胴	沈線区画内楕円形文　撚糸	Ⅲ３
34	30	ⅢＣ３ｇ住暗褐色土	深鉢	胴	沈線区画内楕円形文　撚糸	Ⅲ３
35	324	ⅢＣ３ｇ住Ｐ７	深鉢	口～胴	波状口縁　弧状文　撚糸　すす	Ⅲ３
36	33	ⅢＣ３ｇ住Ｐ１０	深鉢	頸	沈線縦区画交互磨消縄文	Ⅲ３

No.	仮	出土地点	器種	部位	文様の特徴等	分類
37	35	ⅢＣ３ｇ住黒褐色土	深鉢	口	波状口縁　網目状撚糸	Ⅲ５
38	41	ⅢＣ３ｇ住黒褐色土	深鉢	口～胴	網目状撚糸　すす	Ⅳ
39	45	ⅢＣ３ｇ住床面直上	深鉢	口	撚糸	Ⅳ
40	43	ⅢＣ３ｇ住黒褐色土	壺	頸	頸部隆帯	Ⅲ４
41	36	ⅢＣ３ｇ住黒褐色土	壺	頸	頸部隆帯	Ⅲ４
42	59	ⅢＣ３ｇ住暗褐色土	深鉢	胴	平行沈線Ｊ字状文　ＲＬ縦	Ⅱ
43	58	ⅢＣ３ｇ住床面直上	深鉢	口～胴	撚糸	Ⅳ
44	31	ⅢＣ３ｇ住暗褐色土	深鉢	底	網代痕	Ⅳ
53	68	ⅢＣ４ｆ埋設土器	深鉢	胴～底	ＲＬ縦　網代痕	Ⅳ
54	6	ⅡＣ２ｅ①土坑埋土	深鉢	口～胴	波状口縁　ＬＲ横縦　すす	Ⅲ５
55	5	ⅡＣ２ｅ①土坑埋土	深鉢	口～胴	ＬＲ横縦	Ⅲ５
56	56	ⅡＣ３ｅ土坑埋土	深鉢	口～胴	波状口縁６単位　ＲＬ横縦　すす	Ⅲ５
57	7	ⅡＣ３ｅ土坑埋土	深鉢	口	中空突起　頸部指頭圧痕隆帯	Ⅲ１
58	10	ⅡＣ３ｅ土坑埋土	深鉢	口	中空突起	Ⅲ５
59	11	ⅡＣ３ｅ土坑埋土	浅鉢	口	頸部沈線	Ⅲ３
60	9	ⅡＣ３ｅ土坑埋土	深鉢	口	波状口縁頂部隆帯連絡	Ⅲ５
61	8	ⅡＣ３ｅ土坑埋土	深鉢	口～胴	撚糸　すす	Ⅲ５
62	49	ⅡＣ４ｆ土坑埋土	深鉢	口～胴	複合口縁中空突起３単位　弧状文　Ｓ字状文ＲＬ縦	Ⅲ３
63	52	ⅡＣ４ｆ土坑埋土	深鉢	胴～底	弧状文　撚糸　焼成	Ⅲ３
64	15	ⅡＣ４ｆ土坑埋土	深鉢	口	波状口縁　撚糸	Ⅲ５
65	14	ⅡＣ４ｆ土坑埋土	深鉢	底	木葉痕	Ⅳ
69	16	ⅡＣ５ｅ土坑埋土	深鉢	底	木葉痕	Ⅳ
70	29	ⅢＣ０ｊ土坑埋土	深鉢	口～胴	沈線弧状文	Ⅲ３
72	47	ⅢＣ４ｆ土坑埋土	深鉢	口～胴	沈線弧状文　撚糸	Ⅲ３
73	48	ⅢＣ４ｆ土坑埋土	深鉢	胴	沈線弧状文　Ｓ字状文　撚糸	Ⅲ３
74	60	ⅡＢ６ｉ溝跡埋土	深鉢	口～胴	波状口縁頂部から頸部隆帯連絡　撚糸	Ⅲ５
75	3	ⅡＢ６ｉ溝跡埋土	深鉢	口	中空突起	Ⅲ３
76	2	ⅡＢ６ｉ溝跡埋土	深鉢	口	連鎖状隆帯　弧状文	Ⅲ２
77	91	ⅡＣ０・１区検出	深鉢	口	繊維　ＬＲ横	Ⅰ１
78	61	ⅡＢ４ｉ区Ⅱ層	深鉢	口～胴	山形口縁４単位　波頂部鋸歯状　ＬＲ斜	Ⅰ２
79	111	ⅡＣ３ｇ区Ⅰ層	深鉢	口	口唇折り返し肥厚	Ⅰ２
80	112	ⅡＣ３ａ区粗堀	深鉢	口	口唇刻み　撚糸　内側ナデ	Ⅰ２
81	148	ⅡＢ５ｉ・ｊ区粗堀	深鉢	口	口唇内外押圧　撚糸　焼成	Ⅰ２
82	186	ⅡＣ６ｇ区。層	深鉢	口	口唇指頭圧痕　口縁貫通孔　撚糸　すす	Ⅰ２
83	220	ⅡＣ９ａ・ｂ区粗堀	深鉢	口～胴	ＬＲ横縦　すす	Ⅰ２
84	221	ⅡＣ９ｆ杭周辺検出	深鉢	口	口唇刺突　無節Ｌ　すす	Ⅰ２

土器・土製品観察表

No.	仮	出土地点	器種	部位	文様の特徴等	分類
85	357	ⅣＣ１ｈ区Ⅰ層	深鉢	口	口唇折り返し肥圧　すす　外面ナデ	Ⅰ２
86	75	ⅡＣ０ｈ区検出	深鉢	口	連続刺突区画　半裁竹管文　口唇部刻目肥厚	Ⅰ３
87	79	ⅡＣ０ｇ区試掘	深鉢	口～胴	連続刺突区画　半裁竹管文　口唇部刻目肥厚	Ⅰ３
88	82	ⅡＣ区検出	深鉢	頸	連続刺突区画　半裁竹管文	Ⅰ３
89	336	ⅢＤ０ａ・ｂ区Ⅰ層	深鉢	口	波状口縁口唇刻み　波頂部楕円形文	Ⅰ３
90	149	ⅡＢ５ｊ区風倒木	深鉢	口	刺突中心に斜位に太い沈線　頸部刺突列　すす	Ⅰ３
91	150	ⅡＢ５ｊ杭周辺検出	深鉢	口	刺突中心に斜位に太い沈線　頸部刺突列　口唇刻み	Ⅰ３
92	344	ⅢＤ４ｈ区Ⅰ層	深鉢	口	口縁上部及び頸部列点　竹管文	Ⅰ３
93	187	ⅡＣ６ｇ区Ⅰ層	深鉢	口	頸部刺突列区画　ボタン状貼付　縦沈線　すす	Ⅰ３
94	345	ⅢＤ４ａ区検出	深鉢	口	口縁上部及び頸部列点　竹管文	Ⅰ３
95	205	ⅡＣ７ｂ杭周辺検出	深鉢	口	波状口縁　頸部連続山形文	Ⅰ３
96	233	ⅢＣ０ｆ・ｇ区粗堀	深鉢	口	波状口縁　口唇折り返し原体押圧　ＬＲ横　内面すす	Ⅰ３
97	232	ⅢＣ１ｉ・ｊ区粗堀	深鉢	口	波状口縁　懸垂隆帯指頭圧痕　平行沈線間原体押圧	Ⅰ３
98	113	ⅡＣ３ａ区粗堀	深鉢	口	頸部２条１対縦隆帯竹管刺突　連続山形文	Ⅰ３
99	340	ⅢＤ０ａ・ｂ区検出	深鉢	頸	頸部列点　ボタン状貼付　曲線文　すす	Ⅰ３
100	76	ⅡＣ０ｇ区試掘	深鉢	胴	半裁竹管刺突列	Ⅰ３
101	81	ⅡＣ０ｇ区試掘	深鉢	胴	半裁竹管刺突列	Ⅰ３
102	72	ⅢＣ５ｇ区Ⅰ層	深鉢	口	中空突起	Ⅱ
103	114	ⅡＣ３ｄ区Ⅰ層	深鉢	口	頸部隆帯	Ⅱ
104	106	ⅡＣ３ｃ・ｄ区粗堀	深鉢	口	頸部隆帯	Ⅱ
105	230	ⅢＣ０・１ｊ区粗堀	深鉢	口	頸部隆帯	Ⅱ
106	62	ⅡＣ４ｅ区風倒木	深鉢	口～胴	波状口縁６単位　連鎖状隆帯　刺突　ＲＬＲ縦　すす	Ⅲ１
107	96	ⅡＣ１ｄ区Ⅰ層	深鉢	口	連鎖状隆帯	Ⅲ１
108	181	ⅡＣ６ｇ杭周辺Ⅰ層	深鉢	口	波状複合口縁　連鎖状隆帯	Ⅲ１
109	194	ⅡＣ６ｇ杭周辺Ⅰ層	深鉢	口	波状口縁　連鎖状隆帯　ＲＬ縦	Ⅲ１
110	200	ⅡＣ７ｆ杭周辺Ⅱ層	深鉢	頸	連鎖状隆帯頸部連結　ボタン状貼付　弧状文　撚糸	Ⅲ１
111	346	ⅢＤ１ａ・ｂ区Ⅰ層	深鉢	口	波状口縁　連鎖状隆帯懸垂頸部連絡　楕円形文	Ⅲ２
112	145	ⅡＣ４ｈ区粗堀	深鉢	口	波状口縁　連鎖状隆帯懸垂　曲線文　ＬＲ縦	Ⅲ２
113	90	ⅡＣ１ｄ区Ⅰ層	深鉢	口	波状口縁　連鎖状隆帯　弧状文	Ⅲ２
114	212	ⅡＣ８ｅ区Ⅰ層	深鉢	胴	連鎖状隆帯　沈線渦巻文	Ⅲ２
115	171	ⅡＣ６ｆ区Ⅰ層	深鉢	胴	連鎖状隆帯　弧状文　ＲＬ縦　すす	Ⅲ２
116	174	ⅡＣ６ｆ区Ⅰ層	深鉢	頸	連鎖状隆帯結合部ボタン状貼付　弧状文	Ⅲ２
117	66	ⅡＣ９ｊ区Ⅱ層	深鉢	胴	平行沈線縦区画内部曲線文	Ⅲ３
118	66	ⅡＣ９ｊ区Ⅱ層	深鉢	胴	平行沈線縦区画内部曲線文	Ⅲ３
119	67	ⅡＤ１ｃ区Ⅰ層	浅鉢	口～底	平行沈線渦巻文弧状文　胴部中央上下区画　木葉痕	Ⅲ３
120	307	ⅢＣ６ｉ区粗堀	深鉢	口	中空突起　橋状把手　沈線文　刺突	Ⅲ３

No.	仮	出土地点	器種	部位	文様の特徴等	分類
121	160	ⅡＣ５ｇ区検出	深鉢	口～胴	中空突起　橋状把手　平行沈線弧状文　ＬＲ横　すす	Ⅲ３
122	77	ⅡＣ区検出	深鉢	口	中空突起　平行沈線文	Ⅲ３
123	242	ⅢＣ２ｉ区粗堀	深鉢	口	橋状把手　曲線文　刺突	Ⅲ３
124	158	ⅡＣ５ｈ・ｉ区粗堀	深鉢	口	中空突起　頸部内外隆帯	Ⅲ３
125	122	ⅡＣ４ｅ区風倒木	浅鉢	口	中空突起	Ⅲ３
126	245	ⅢＣ３ｊ区試掘	深鉢	口	中空突起　曲線文　撚糸	Ⅲ３
127	71	ⅢＣ５ｉ区Ⅰ層	深鉢	口～胴	波状口縁　肩部隆帯　沈線弧状文　ＬＲ横	Ⅲ３
128	139	ⅡＣ４ｆ区風倒木	深鉢	口	波状口縁　頸部平行沈線	Ⅲ３
129	92	ⅡＣ１ｅ区粗堀	深鉢	口	波状口縁波頂部下部沈線楕円文	Ⅲ３
130	86	ⅡＣ１ａ区試掘	深鉢	口	波状口縁　沈線文　すす	Ⅲ３
131	116	ⅡＣ３ｃ区風倒木	深鉢	口	頸部沈線区画　平行沈線弧状文	Ⅲ３
132	143	ⅡＣ４ｈ区粗堀	深鉢	口	波状複合口縁　曲線文　撚糸	Ⅲ３
133	105	ⅡＣ３ｄ区Ⅰ層	深鉢	口	波状口縁　波頂部刺突沈線連結　すす	Ⅲ３
134	131	ⅡＣ４ｅ・ｆ区粗堀	深鉢	口～胴	懸垂２条沈線頸部で曲がる　ボタン状貼付　弧状文	Ⅲ３
135	155	ⅡＣ５ｆ区Ⅰ層	深鉢	口～胴	波状口縁頂部下部刺突　沈線区画内曲線文　ＬＲ縦	Ⅲ３
136	161	ⅡＣ５ｇ区粗堀	深鉢	口	沈線曲線文　ＬＲ縦	Ⅲ３
137	164	ⅡＣ５ｉ区検出	深鉢	口	複合口縁　曲線文	Ⅲ３
138	176	ⅡＣ６ｂ区試掘	深鉢	口～胴	曲線文弧状文　撚糸　すす	Ⅲ３
139	207	ⅡＣ７ｄ区検出	深鉢	口	複合口縁　２個１対刺突下部楕円形文　ＬＲ縦	Ⅲ３
140	214	ⅡＣ８ｈ区風倒木	深鉢	口	波状口縁頂部刺突　沈線弧状文　すす	Ⅲ３
141	224	ⅡＤ８ｃ区検出	深鉢	口	波状複合口縁　Ｓ字状文　弧状文	Ⅲ３
142	226	ⅡＤ９ｂ杭周辺検出	深鉢	口	波状口縁頂部下部円形文　弧状文　撚糸	Ⅲ３
143	228	ⅡＤ９ｃ区検出	深鉢	口～胴	波状複合口縁頂部下部貫通孔　平行沈線弧状文	Ⅲ３
144	235	ⅢＣ２ｄ区Ⅰ層	深鉢	口～胴	頸部沈線区画　Ｓ字状文　撚糸　すす	Ⅲ３
145	239	ⅢＣ２ｃ区粗堀	深鉢	口	頸部沈線　すす	Ⅲ３
146	241	ⅢＣ２ｅ区粗堀	深鉢	口	波状口縁　弧状文　撚糸	Ⅲ３
147	259	ⅢＣ４ｇ区Ⅰ層	深鉢	口	波状口縁　沈線文　ＲＬ縦	Ⅲ３
148	264	ⅢＣ４ｊ区試掘	深鉢	口	波状口縁　頸部沈線区画　弧状文　ＲＬ縦　すす	Ⅲ３
149	271	ⅢＣ５ｈ区粗堀	深鉢	口	波状口縁　弧状文　撚糸　すす	Ⅲ３
150	257	ⅢＣ４ｄ区検出	深鉢	口	頸部沈線　撚糸	Ⅲ３
151	240	ⅢＣ２ｄ区Ⅰ層	深鉢	口	波状口縁頂部刺突　隆帯懸垂　すす	Ⅲ３
152	269	ⅢＣ４・５ｊ区粗堀	深鉢	口	弧状文　刺突	Ⅲ３
153	251	ⅢＣ３ｃ区検出	深鉢	口～胴	渦巻文　撚糸	Ⅲ３
154	252	ⅢＣ３ｃ区検出	深鉢	口～胴	頸部沈線　撚糸	Ⅲ３
155	281	ⅢＣ５ｊ区Ⅱ層	深鉢	口～胴	波状口縁　波頂部下部列点　弧状文　曲線文　撚糸	Ⅲ３
156	282	ⅢＣ５ｇ区粗堀	深鉢	口	波状口縁　波頂部刺突　曲線文　ＬＲＬ縦	Ⅲ３

No.	仮	出土地点	器種	部位	文様の特徴等	分類
157	285	ⅢＣ５ｊ区粗堀	深鉢	口	頸部沈線区画　弧状文　撚糸	Ⅲ３
158	287	ⅢＣ５ｊ区粗堀	深鉢	口	波状口縁　波頂部刺突　曲線文　撚糸	Ⅲ３
159	288	ⅢＣ５ｊ区粗堀	深鉢	口	波状口縁　頸部隆帯　曲線文　撚糸	Ⅲ３
160	291	ⅢＣ５ｇ区粗堀	深鉢	口～胴	波状口縁　波頂部渦巻文　楕円形文　ＬＲ横	Ⅲ３
161	293	ⅢＣ５ｅ区検出	深鉢	口～胴	頸部沈線区画　撚糸	Ⅲ３
162	294	ⅢＣ５ｄ区粗堀	深鉢	口	波状口縁　頸部隆帯　弧状文	Ⅲ３
163	296	ⅢＣ５ｉ区粗堀	深鉢	口	波状口縁　波頂部刺突　楕円形文	Ⅲ３
164	299	ⅢＣ５ｊ区粗堀	深鉢	口	波状口縁　頸部沈線　ＬＲ斜	Ⅲ３
165	300	ⅢＣ５ｊ区粗堀	深鉢	口	波状口縁　波頂部下部円形文　弧状文　ＬＲ縦	Ⅲ３
166	301	ⅢＣ５ｊ区粗堀	深鉢	口	波状口縁　波頂部下部円形文　弧状文　ＬＲ縦	Ⅲ３
167	302	ⅢＣ５ｊ区粗堀	深鉢	口	頸部沈線区画　弧状文　ＲＬＲ縦	Ⅲ３
168	304	ⅢＣ５ｊ区粗堀	深鉢	口～胴	頸部沈線区画　曲線文　ＲＬ斜	Ⅲ３
169	305	ⅢＣ６ｅ区風倒木	深鉢	口～胴	波状口縁頂部刺突　頸部沈線区画　弧状文　ＲＬ縦	Ⅲ３
170	308	ⅢＣ６ｈ区検出	深鉢	口	波状口縁　頸部隆帯　弧状文	Ⅲ３
171	311	ⅢＣ６ｅ杭周辺Ⅰ層	深鉢	口	頸部沈線区画　曲線文　ＬＲ縦　すす	Ⅲ３
172	316	ⅢＣ６ｊ区粗堀	深鉢	口	波状口縁　頸部隆帯　曲線文	Ⅲ３
173	318	ⅢＣ７ｈ区検出	深鉢	口～胴	波状口縁　沈線区画内曲線文　撚糸	Ⅲ３
174	322	ⅢＣ７ｆ杭周辺検出	深鉢	口	波状口縁　弧状文	Ⅲ３
175	329	ⅢＤ０ａ・ｂ区Ⅰ層	深鉢	口	平行沈線　曲線文　ＬＲ横	Ⅲ３
176	335	ⅢＤ０ａ・ｂ区Ⅰ層	深鉢	口	頸部隆帯　口唇から隆帯懸垂　弧状文	Ⅲ３
177	337	ⅢＤ０ａ・ｂ区Ⅰ層	深鉢	口	波状口縁　頸部隆帯　曲線文	Ⅲ３
178	350	ⅢＤ１ａ区Ⅰ層	深鉢	口	波状複合口縁　波頂部内外口唇刺突	Ⅲ３
179	351	ⅢＤ１ａ区Ⅰ層	深鉢	口	波状口縁突起　すす	Ⅲ３
180	352	ⅢＤ５ａ区検出	深鉢	口～胴	波状口縁　曲線文　弧状文　ＲＬ縦　すす	Ⅲ３
181	354	ⅢＤ１ａ区Ⅰ層	深鉢	口	波状口縁　頸部隆帯　弧状文	Ⅲ３
182	355	ⅢＤ１ｂ区Ⅰ層	深鉢	口	波状口縁頂部刻み　刺突　弧状文　ＲＬ縦　すす	Ⅲ３
183	97	ⅡＣ１ｅ区Ⅰ層	深鉢	胴	平行沈線弧状文　ＬＲ横　すす	Ⅲ３
184	101	ⅡＣ２ａ区試掘	深鉢	胴	頸部平行沈線区画　弧状文　撚糸　すす	Ⅲ３
185	104	ⅡＣ２ｆ区粗堀	深鉢	胴	縦平行沈線　ＬＲ横　輪積断面に刺突痕	Ⅲ３
186	107	ⅡＣ３ｄ区風倒木	深鉢	胴	波状口縁　波頂部下部渦巻文　弧状文　ＲＬ縦	Ⅲ３
187	108	ⅡＣ３ｄ区風倒木	深鉢	胴	渦巻文	Ⅲ３
188	210	ⅡＣ８ｃ区試掘	浅鉢	胴	平行沈線区画内刺突　撚糸	Ⅲ３
189	124	ⅡＣ４ｅ区風倒木	深鉢	胴	平行沈線弧状文渦巻文　ＲＬ縦	Ⅲ３
190	126	ⅡＣ４ｅ区風倒木	深鉢	胴	平行沈線区画内曲線文　すす	Ⅲ３
191	135	ⅡＣ４ｆ区風倒木	深鉢	胴	平行沈線弧状文渦巻文　ＬＲ縦	Ⅲ３
192	162	ⅡＣ５ｃ区粗堀	深鉢	頸～胴	平行沈線弧状文	Ⅲ３

No.	仮	出土地点	器種	部位	文様の特徴等	分類
193	163	ⅡＣ５ｈ・ｉ区粗堀	深鉢	胴	平行沈線弧状文　曲線文　撚糸	Ⅲ３
194	166	ⅡＣ５ｇ区粗堀	深鉢	胴	平行沈線弧状文　ＬＲ横　すす	Ⅲ３
195	178	ⅡＣ６ｄ・ｅ区粗堀	深鉢	胴	平行沈線　無節ｒ	Ⅲ３
196	180	ⅡＣ６ｇ杭周辺Ⅰ層	深鉢	胴	平行沈線曲線文　ＬＲ横	Ⅲ３
197	185	ⅡＣ６・７ｄ区Ⅰ層	深鉢	胴	弧状文　曲線文　ＬＲ横	Ⅲ３
198	188	ⅡＣ６ｄ・ｅ区粗堀	深鉢	胴	平行沈線弧状文　撚糸	Ⅲ３
199	190	ⅡＣ６ｆ区検出	深鉢	胴	平行沈線弧状文　撚糸	Ⅲ３
200	196	ⅡＣ７ｊ区試掘	深鉢	頸～胴	頸部沈線区画　楕円形文　撚糸	Ⅲ３
201	243	ⅢＣ２ｉ区粗堀	深鉢	胴	波状口縁内側円形文　頸部隆帯刺突　弧状文　撚糸	Ⅲ３
202	249	ⅢＣ３ｈ・ｉ区粗堀	深鉢	胴	曲線文　網目状撚糸	Ⅲ３
203	272	ⅢＣ５ｉ区粗堀	深鉢	胴	楕円形文　撚糸	Ⅲ３
204	273	ⅢＣ５ｉ区粗堀	深鉢	胴	弧状文　楕円形文　網目状撚糸	Ⅲ３
205	325	ⅢＣ区検出	深鉢	胴	弧状文　撚糸　すす	Ⅲ３
206	278	ⅢＣ５ｉ区粗堀	深鉢	胴	弧状文　撚糸	Ⅲ３
207	343	ⅢＤ６ｂ区検出	深鉢	胴	弧状文　曲線文　ＬＲ横　すす	Ⅲ３
208	280	ⅢＣ５ｆ区粗堀	深鉢	胴	弧状文　曲線文　ＬＲ横	Ⅲ３
209	279	ⅢＣ５ｆ区粗堀	深鉢	胴	楕円形文　ＲＬ縦	Ⅱ
210	298	ⅢＣ５ｉ区粗堀	深鉢	胴	弧状文　０段多条　すす付着	Ⅲ３
211	286	ⅢＣ５ｊ区粗堀	深鉢	頸	波状口縁突起欠損　頸部隆帯　弧状文　刺突　撚糸	Ⅲ３
212	320	ⅢＣ７ｆ杭周辺検出	深鉢	胴	弧状文　ＬＲ斜	Ⅲ３
213	332	ⅢＤ０ａ・ｂ区Ⅰ層	深鉢	胴	平行沈線弧状文　撚糸	Ⅲ３
214	330	ⅢＤ０ａ区検出	深鉢	頸	平行沈線弧状文　渦巻文　すす	Ⅲ３
215	69	ⅢＣ４ｄ区$_0$層	小型壺	口～胴	懸垂隆帯上下刺突　沈線曲線文	Ⅲ４
216	70	ⅢＣ４ｃ・ｄ区Ⅰ層	壺	口～底	頸部１対貫通孔　平行沈線曲線文	Ⅲ４
217	244	ⅢＣ３ｇ区粗堀	壺	頸	頸部隆帯　ＬＲ斜	Ⅲ４
218	266	ⅢＣ４ｇ・ｈ区粗堀	壺	頸	頸部２条隆帯	Ⅲ４
219	63	ⅡＣ４ｆ区$_0$層	深鉢	口～胴	波状口縁６単位　ＲＬ横縦　すす	Ⅲ５
220	314	ⅢＣ６ｇ区検出	深鉢	口	口縁沈線　すす	Ⅲ５
221	195	ⅡＣ６ｇ杭周辺Ⅰ層	深鉢	口	波状口縁　撚糸	Ⅲ５
222	80	ⅡＣ０ｇ区試掘	深鉢	口	波状口縁　無節Ｌ横　すす	Ⅲ５
223	65	ⅡＣ４ｅ区風倒木	深鉢	口～胴	波状口縁　ＲＬ横縦　すす	Ⅲ５
224	313	ⅢＣ６ｉ区粗堀	深鉢	口～胴	波状口縁　ＲＬ縦　すす	Ⅲ５
225	127	ⅡＣ４ｅ区風倒木	深鉢	口	波状口縁　ＬＲ横	Ⅲ５
226	274	ⅢＣ５ｉ区粗堀	深鉢	口～胴	網目状撚糸	Ⅳ
227	331	ⅢＤ０ａ・ｂ区検出	深鉢	口～胴	ＬＲ縦	Ⅳ
228	255	ⅢＣ４ｆ区Ⅰ層	深鉢	口～胴	網目状撚糸	Ⅳ

土器・土製品観察表

No.	仮	出土地点	器種	部位	文様の特徴等	分類
229	98	ⅡＣ１ｆ区粗堀	深鉢	胴	網目状撚糸	Ⅳ
230	110	ⅡＣ３ｊ区試掘	深鉢	胴	網目状撚糸	Ⅳ
231	284	ⅢＣ５ｊ区粗堀	深鉢	底	ミニチュア	Ⅳ
232	74	ⅢＤ０ｂ区風倒木	深鉢	底	小型　焼成	Ⅳ
233	138	Ⅱ４ｅ区風倒木	深鉢	底		Ⅳ
234	147	ⅡＢ３ｉ区Ⅰ層	深鉢	底		Ⅳ
235	117	ⅡＣ３ｄ区風倒木	深鉢	底		Ⅳ
236	218	ⅡＣ９ｆ・ｇ区粗堀	深鉢	底		Ⅳ
237	256	ⅢＣ４ｃ区Ⅰ層	深鉢	底		Ⅳ
238	223	ⅡＤ１ｄ区検出	深鉢	底		Ⅳ
239	141	ⅡＣ４ｅ区風倒木	深鉢	底	網代痕	Ⅳ
240	132	ⅡＣ４ａ区粗堀	深鉢	底	焼成	Ⅳ
241	209	ⅡＣ７ｂ杭周辺検出	深鉢	底		Ⅳ
242	118	ⅡＣ３ｃ区風倒木	深鉢	底		Ⅳ
243	119	ⅡＣ３ｄ区風倒木	深鉢	底		Ⅳ
244	140	ⅡＣ４ｆ区風倒木	深鉢	底		Ⅳ
245	248	ⅢＣ３ｄ杭周辺検出	深鉢	底	網代痕	Ⅳ
246	93	ⅡＧ１ｆ区Ⅱ層	深鉢	底	木葉痕	Ⅳ
247	78	ⅡＣ０ｆ区粗堀	深鉢	底	木葉痕	Ⅳ
248	277	ⅢＣ５ｉ区粗堀	深鉢	底	網代痕	Ⅳ
249	219	ⅡＣ９ｉ・ｊ区粗堀	深鉢	底		Ⅳ
250	189	ⅡＣ６ｆ区検出	深鉢	底		Ⅳ
251	342	ⅢＤ区粗堀	深鉢	底	木葉痕	Ⅳ
252	234	ⅢＣ１ｅ・ｆ区粗堀	深鉢	底	木葉痕（笹）	Ⅳ
253	130	ⅡＣ４ｅ区風倒木	深鉢	底	網代痕	Ⅳ
254	312	ⅢＣ６ｈ区風倒木	深鉢	底	木葉痕　すす	Ⅳ
255	326	ⅢＣ区検出	深鉢	底	木葉痕　すす	Ⅳ
256	191	ⅡＣ６ｈ・ｉ区粗堀	深鉢	底	木葉痕（笹）	Ⅳ
257	73	ⅢＤ８ｆ区Ⅰ層	深鉢	胴	無節Ｌ斜　すす	Ⅴ
258	250	ⅢＣ３ｆ区風倒木	浅鉢	口～胴	口唇沈線　変形工字文	Ⅴ
259	261	ⅢＣ４ｆ区検出	浅鉢	底	ＬＲ横	Ⅴ
260	362	ⅢＣ５ｉ区検出	円盤状		径３．６×３．３mm　厚さ７mm　重量１１．０ｇ	
261	363	ⅢＣ６ｉ区検出	円盤状		径４．３×４．２mm　厚さ８mm　重量１６．０ｇ	
262	361	ⅡＣ４ｆ区風倒木	円盤状		径４．８×４．４mm　厚さ８mm　重量２２．４ｇ	
263	360	ⅡＣ４ｅ・ｆ区風倒木	円盤状		径５．３×５．２mm　厚さ８mm　重量２７．７ｇ	
264	359	ⅡＣ４ｅ区風倒木	円盤状		破損　径５．６cm　厚さ８mm　重量１９．４ｇ	

No.	仮	出土地点	器種	分類	長さ	幅	厚さ	重量	備考	石　質	産　地
19	105	ⅡＣ９ｊ住埋土	不定形	Ｅ３	6.2	4.1	1.7	24.7	付着物	頁岩	奥羽山脈
23	77	ⅢＣ０ｅ住埋土	磨石類	Ｇ１	11.8	7.1	3	295	破損	安山岩	奥羽山脈
45	100	ⅢＣ３ｇ住Ｐ７	篦状石器	Ｄ２	8.1	5.4	2.6	92.2		赤色頁岩	奥羽山脈
46	104	ⅢＣ３ｇ住埋土	不定形	Ｅ２	2.8	1.7	0.7	2.5		頁岩	奥羽山脈
47	15	ⅢＣ３ｇ住埋土	磨製石斧	Ｆ	6.8	4.6	1.6	63.5	破損	泥岩	奥羽山脈
48	85	ⅢＣ３ｇ住埋土	磨石類	Ｇ２	10.5	7.7	4.7	540		安山岩	奥羽山脈
49	73	ⅢＣ３ｇ住Ｐ１１	磨石類	Ｇ１	9.5	6.6	4.4	380		安山岩	奥羽山脈
50	80	ⅢＣ３ｇ住床面	磨石類	Ｇ１	8.5	8.6	5.9	565	破損	花崗岩	奥羽山脈
51	101	ⅢＣ３ｇ住床面	磨石類	Ｇ２	4.3	5	3.6	49.1		玄武岩質溶岩	奥羽山脈
52	29	ⅢＣ３ｇ住Ｐ１２	石製円盤	Ｈ２	4.3	4.7	1.2	33.1		泥岩	奥羽山脈
66	88	ⅡＣ４ｆ土坑埋土	磨石類	Ｇ２	9.9	9.7	5.6	650		安山岩質溶岩	奥羽山脈
67	90	ⅡＣ４ｆ土坑埋土	磨石類	Ｇ１	18.6	8	4.7	1020		安山岩	奥羽山脈
68	63	ⅡＣ４ｆ土坑埋土	剝片	Ｉ	1.2	2.1	0.4	0.69		黒曜石	花泉
71	1	ⅢＣ０ｊ土坑埋土	不定形	Ｅ１	3	2	0.9	3.1	破損	珪質頁岩	奥羽山脈
265	53	ⅡＣ６ｆ区	石鏃	Ａ１	2.4	1.9	0.8	2.8		瑪瑙	奥羽山脈
266	54	ⅡＣ５ｄ杭周辺	石鏃	Ａ１	2.8	1.5	0.4	1.5		頁岩	奥羽山脈
267	55	ⅡＣ５ｈ杭周辺	石鏃	Ａ１	1.7	1.7	0.35	0.63		赤色頁岩	奥羽山脈
268	56	ⅡＣ６ｂ区	石鏃	Ａ２	2.4	1.3	0.4	0.76	破損	珪質頁岩	奥羽山脈
269	49	ⅡＢ２ｉ～３ｉ区	石匙	Ｂ１	7.3	2.1	1.2	16.1	破損？	頁岩	奥羽山脈
270	36	ⅡＣ７ｂ杭周辺	石匙	Ｂ１	7.7	3.5	1.5	30		頁岩	奥羽山脈
271	59	ⅢＣ１ｊ区	石匙	Ｂ１	4.65	2.8	1.65	7.3		頁岩	奥羽山脈
272	57	ⅡＣ６ｆ区	石匙	Ｂ１	5.6	3.45	0.6	10.4		頁岩	奥羽山脈
273	58	ⅡＢ５ｊ杭周辺	石匙	Ｂ１	5.7	3.1	0.7	11.4	破損	頁岩	奥羽山脈
274	50	ⅡＣ８ｂ杭周辺	石匙	Ｂ２	3.6	5	1.1	13.4		頁岩	奥羽山脈
275	5	ⅢＣ５ｈ区	石錐	Ｃ	3.5	2.35	0.8	6.3		頁岩	奥羽山脈
276	34	ⅢＣ２ｆ区	篦状石器	Ｄ１	8.9	3.8	1.9	72.8		頁岩	奥羽山脈
277	9	ⅡＣ５ｃ区	篦状石器	Ｄ２	11.7	4.1	1.8	93.5		頁岩	奥羽山脈
278	20	ⅡＣ５ｂ区	篦状石器	Ｄ２	8.4	4	1.6	59.5		頁岩	奥羽山脈
279	2	ⅡＢ０ｊ区	篦状石器	Ｄ２	10.6	3.8	1.6	65.1		頁岩	奥羽山脈
280	13	ⅣＤ５ｂ区	篦状石器	Ｄ２	11.1	4.9	2.9	142		ホルンフェルス	北上山地
281	7	ⅡＣ７ｅ区	篦状石器	Ｄ２	10.4	4.3	1.7	96.4	摩滅	ホルンフェルス	北上山地
282	32	ⅢＣ３ｂ区	篦状石器	Ｄ２	6.8	3.7	1.7	40.3		頁岩	奥羽山脈
283	33	ⅡＣ９ｄ区	篦状石器	Ｄ２	7	4.4	1.2	44.7		頁岩	奥羽山脈
284	38	ⅡＣ２ａ区	篦状石器	Ｄ２	5.8	3.4	1.3	25.7		頁岩	奥羽山脈

長さ・幅・厚さの単位はmm、重量の単位はg

石器観察表

No.	仮	出土地点	器種	分類	長さ	幅	厚さ	重量	備考	石　質	産　地
285	42	ⅡＣ５ｂ杭周辺	篦状石器	Ｄ２	5.2	3.6	1.1	22.4		頁岩	奥羽山脈
286	37	ⅢＣ３ｅ区	篦状石器	Ｄ２	7.8	4.3	2.3	79.9		ホルンフェルス	北上山地
287	93	ⅢＣ１ｃ区	篦状石器	Ｄ２	7	4.4	1.6	41	破損	頁岩	奥羽山脈
288	39	ⅡＣ２ａ区	篦状石器	Ｄ２	8.4	4.6	2.5	86.1		頁岩	奥羽山脈
289	45	ⅢＣ５ｇ区	篦状石器	Ｄ２	5.8	4.2	1	31.9		珪質頁岩	奥羽山脈
290	23	ⅢＣ９ｊ区	不定形	Ｅ１	2.6	1.7	0.6	2.1	破損	頁岩	奥羽山脈
291	27	ⅡＢ２ｉ～３ｉ区	不定形	Ｅ１	2.4	1.9	0.5	1.5	破損	頁岩	奥羽山脈
292	96	ⅢＣ５ｉ区	不定形	Ｅ１	2.3	1.7	0.6	2.13		黒曜石	花泉
293	35	ⅡＣ４ｅ区	不定形	Ｅ１	3.5	3.1	1	8.5		頁岩	奥羽山脈
294	46	ⅢＣ３ｆ区	不定形	Ｅ１	2.5	3.3	0.7	9.1	破損	頁岩	奥羽山脈
295	51	ⅡＣ９ｅ区	不定形	Ｅ１	3.2	4.4	1.15	10.9		頁岩	奥羽山脈
296	25	ⅢＣ７ｇ区	不定形	Ｅ１	5.4	2.9	0.7	11.8		頁岩	奥羽山脈
297	19	ⅡＣ７ｄ区	不定形	Ｅ１	7.2	2.6	1.1	24.4		頁岩	奥羽山脈
298	97	ⅢＣ４ｃ区	不定形	Ｅ１	5.3	3.9	1.5	25.7		頁岩	奥羽山脈
299	48	ⅢＤ１ａ区	不定形	Ｅ２	2.3	2	0.5	1.5		頁岩	奥羽山脈
300	61	ⅢＤ１ａ区	不定形	Ｅ２	2.4	1.7	3	2.1		頁岩	奥羽山脈
301	11	ⅢＣ５ｉ区	不定形	Ｅ２	3	3	1.1	12.2	破損	頁岩	奥羽山脈
302	52	ⅢＤ５ａ区	不定形	Ｅ２	5.2	2.7	0.4	6		頁岩	奥羽山脈
303	62	ⅡＤ９ｅ区	不定形	Ｅ２	2.7	4.6	1.1	15.6		珪質頁岩	奥羽山脈
304	47	ⅢＣ４ｆ区	不定形	Ｅ２	4.8	2.7	0.8	10.4		頁岩	奥羽山脈
305	4	ⅢＣ４ｆ区	不定形	Ｅ２	4.7	4.2	1.65	16		頁岩	奥羽山脈
306	24	ⅡＣ１ｄ区	不定形	Ｅ２	6.3	4.1	1	18.4		頁岩	奥羽山脈
307	94	ⅢＣ１ｅ・ｆ区	不定形	Ｅ２	5.6	4.4	1.9	44.9		頁岩	奥羽山脈
308	92	ⅡＣ５ｈ・Ｉ区	不定形	Ｅ２	5.9	4.6	0.8	15.5		頁岩	奥羽山脈
309	102	ⅡＣ６ｆ杭周辺	不定形	Ｅ２	6	4.3	1.1	31.8		頁岩	奥羽山脈
310	22	ⅡＣ６ｂ区	不定形	Ｅ２	5.1	6.1	1.1	23.2		頁岩	奥羽山脈
311	14	ⅡＣｆ０区	不定形	Ｅ２	9.8	5.1	1.1	48.7		頁岩	奥羽山脈
312	8	ＩＣ９ｆ区	不定形	Ｅ２	12.1	5.5	1.6	81.7		頁岩	奥羽山脈
313	10	Ｄ４区	不定形	Ｅ２	7.1	6.8	1.9	76.8		頁岩	奥羽山脈
314	21	ⅢＣ３ｇ区	不定形	Ｅ３	3.1	2.7	0.8	5.3		頁岩	奥羽山脈
315	41	ⅢＣ３ｈ区	不定形	Ｅ３	7.3	3.9	1.1	25.3		頁岩	奥羽山脈
316	18	ⅡＣ８ｆ区	不定形	Ｅ３	8.3	4.4	1	38.7		頁岩	奥羽山脈
317	95	ⅡＤ６ｃ区	不定形	Ｅ３	6.7	6.6	1.5	75.9		頁岩	奥羽山脈
318	16	ⅢＤ区	磨製石斧	Ｆ	7.9	4	2.7	135		花崗閃緑岩	奥羽山脈
319	30	ⅡＣ９ｊ杭周辺	磨製石斧	Ｆ	6.7	3.9	2.2	97.3	破損	閃緑岩	奥羽山脈
320	40	ⅢＣ５ｉ区	磨石類	Ｇ１	4.3	2.6	1.4	21.6		泥岩	奥羽山脈

石器観察表

No.	仮	出土地点	器種	分類	長さ	幅	厚さ	重量	備考	石　質	産　地
321	17	ⅡＣ９ｆ区	磨石類	Ｇ１	3.6	3.4	2.4	26		凝灰岩	奥羽山脈
322	12	ⅡＣ４ｄ区	磨石類	Ｇ１	4.1	3.9	1.5	30.9		凝灰岩	奥羽山脈
323	81	ⅢＣ５ｄ区	磨石類	Ｇ１	4	4.1	3.7	60		凝灰岩	奥羽山脈
324	79	ⅡＣ５ｇ区	磨石類	Ｇ１	5.4	4.1	3.7	105		安山岩	奥羽山脈
325	74	ⅢＣ５ｊ区	磨石類	Ｇ１	7.8	6.6	6.3	490		安山岩	奥羽山脈
326	68	ⅢＣ６ｃ区	磨石類	Ｇ１	11.9	7.3	5.5	690		安山岩	奥羽山脈
327	6	ⅡＣ４ｈ区	磨石類	Ｇ２	5.1	3.8	2.4	42.4	破損	凝灰岩	奥羽山脈
328	91	ⅡＣ７ｆ・ｇ区	磨石類	Ｇ１	4.7	4.3	4.3	57		凝灰岩	奥羽山脈
329	67	ⅢＣ５ｊ区	磨石類	Ｇ２	12.9	7.6	3.6	270	破損？	凝灰岩	奥羽山脈
330	83	ⅡＣ７ｈ杭周辺	磨石類	Ｇ２	9	7.7	4.4	425		安山岩	奥羽山脈
331	87	ⅢＣ４ｆ区	磨石類	Ｇ２	11.6	7.6	4.1	555		安山岩	奥羽山脈
332	65	ⅢＣ６ｈ区	磨石類	Ｇ４	12.6	7.5	5.4	640	磨･敲	石英安山岩	奥羽山脈
333	66	ⅡＣ８ｉ区	磨石類	Ｇ４	9.9	7.5	4.8	480	磨･凹	安山岩	奥羽山脈
334	70	ⅢＣ６ｅ杭周辺	磨石類	Ｇ４	7.6	6.8	5	260	有溝砥石	凝灰岩	奥羽山脈
335	69	ⅡＣ９ｅ区	磨石類	Ｇ４	15.8	5.3	3	290	凹･敲	泥岩	奥羽山脈
336	75	ⅢＣ２ａ区	磨石類	Ｇ４	9.5	7.8	4.1	430	磨･凹･敲	安山岩	奥羽山脈
337	72	ⅠＢ１ｆ区	磨石類	Ｇ４	10.1	7.9	4.4	435	磨･凹	安山岩	奥羽山脈
338	82	ⅢＣ４ｄ区	磨石類	Ｇ４	4.7	5.3	4.6	155	磨･敲	石英安山岩	奥羽山脈
339	71	ⅢＣ３ｇ区	磨石類	Ｇ４	12.1	6.5	4.7	465	磨･敲	安山岩	奥羽山脈
340	76	ⅡＣ６ｆ杭周辺	磨石類	Ｇ４	11.8	9.7	5.5	1000	磨･凹	安山岩	奥羽山脈
341	78	ⅡＣ４ｅ区	磨石類	Ｇ４	11.3	7.4	4.3	78	磨･敲	安山岩	奥羽山脈
342	84	ⅡＣ７ｈ杭周辺	磨石類	Ｇ４	10.8	7.7	4.5	510	磨･敲	安山岩	奥羽山脈
343	89	ⅢＣ４ｉ区	磨石類	Ｇ４	11.2	8	4.6	530	磨･敲	安山岩	奥羽山脈
344	86	ⅡＣ７ｊ杭周辺	磨石類	Ｇ４	19.4	11.2	4.9	1110	磨･凹	砂岩	奥羽山脈
345	31	ⅡＣ０ｄ区	磨石類	Ｇ５	3.4	4	1.9	29.5		泥岩	奥羽山脈
346	64	ⅢＣ３ｆ区	石製品	Ｈ１	2.4	1.5	0.8	2.9	破損？	凝灰岩	奥羽山脈
347	44	ⅡＣ７ｈ杭周辺	石製円盤	Ｈ２	2.7	4.8	1	16.2	破損	泥岩	奥羽山脈
348	60	ⅢＣ６ｅ区	石製円盤	Ｈ２	3.9	4.3	0.9	16.9		泥岩	奥羽山脈
349	28	ⅡＣ６ｇ杭周辺	石製円盤	Ｈ２	4.6	4.7	1.1	24.5	両面磨り	凝灰岩	奥羽山脈
350	98	ⅡＣ６ｂ区	石製円盤	Ｈ２	4.9	4.9	1.3	37		泥岩	奥羽山脈
351	43	ⅡＣ７ｈ杭周辺	石製円盤	Ｈ２	5.2	5.6	1.2	43.7		泥岩	奥羽山脈
352	3	ⅡＣ６ｇ杭周辺	石製円盤	Ｈ２	4.8	5.2	1.4	41.6		泥岩	奥羽山脈
353	26	ⅠＤ９ｂ区	剝片	Ⅰ	2.3	1.9	1	2.9		黒曜石	置戸
354	103	ⅢＣ５ｆ杭周辺	剝片	Ⅰ	2.2	1.7	0.4	1		黒曜石	花泉
355	99	ⅡＣ９ｅ区	剝片	Ⅰ	1.9	3.3	0.5	3.31		黒曜石	男鹿

石器観察表

番号	仮番	出土地点	材質	特　　徴	径(mm)	重量(g)
356	365	ⅡＣ６ｅ区粗堀	銅	永楽通宝（鋳銭1408年）	24.5	3.1
357	364	ⅢＤ８ｂ区粗堀	銅	古寛永（鋳銭1633～1659年）	23.5	3.0
358	366	ⅢＤ９ａ区試掘	銅	新寛永（鋳銭1697～1747年、1767～1781年）	23.5	2.2
359	367	ⅢＤ９ａ区試掘	銅	新寛永（鋳銭1697～1747年、1767～1781年）	23.5	2.5
360	368	ⅢＤ９ｂ区試掘	銅	新寛永（鋳銭1697～1747年、1767～1781年）	24.5	1.9

古銭一覧表

V. まとめ

今回の発掘調査で検出された遺構と遺物について簡単に整理し、遺跡についてのまとめとしたい。

1．遺構

(1)　住居跡・土器埋設遺構・焼土

竪穴住居跡は８棟検出された。そのほかに焼土や焼土を伴う土器埋設遺構も住居跡の炉の可能性がある。住居と確認された８棟は、その規模から大きめの住居跡（長径3.7～5.3m）と小さめの住居跡（2.2～３m）の大小２通りに分けられる。遺構配置図を見ると大小の住居は近接して立地しているように見える。最も近いのはⅡＣ８ｊ住居とⅡＣ９ｊ住居で1.4m、一番離れているⅢＣ３ｇ住居とⅢＣ３ｄ住居は約８mである。また、大きめの住居は柱穴が検出されているが、小さめの住居には検出されず、炉が検出されないものもある。その床面には立石が構築されていた。小さめの住居からの遺物が少ないため、大きめの住居と同時期のものかはっきりしないが、周辺から出土する遺物はほとんど時期差がないので、同時期のものと考えるのが妥当である。ということは、本遺跡の集落は、大小２棟の組み合わせによる数単位から構成されていたと考えられるが、大小の住居の持つ意味の違いや集落の構造を考えるには、他の遺跡の同様な類例を参考にしなければならないであろう。出土遺物を見ると、この集落は縄文時代後期前葉という限られた時期、そして焼土の焼成があまり良くないことから、生活が営まれた期間は短期間だったようである。

土器埋設遺構としたものは、ⅢＣ３ｇ住居跡の西側４mに構築されている。柱穴検出のために、土器の周辺を掘り下げてみたが検出されなかった。前述の小さめの住居跡に柱穴が検出できなかった例もあるので、住居跡の可能性が高い。

焼土遺構も２基検出されているが、焼成は２基とも良くない。土器埋設遺構と同様に住居跡の可能性もある。

(2)　土坑

検出された土坑は23基で、その内縄文時代の遺構と見られるのは21基である。遺構内からの遺物の出土があるのはⅡＣ３ｅ、ⅡＣ４ｆ、ⅢＣ４ｆの各土坑で、これらは出土遺物からいずれも縄文時代後期前葉の遺構と見られる。その他の土坑については埋土や検出面から縄文時代と判断した。検出された土坑は、断面形、平面形の特徴から３つに分類した。平面形が円形あるいは円形に近い楕円形で断面形がフラスコ形のもので、遺物を伴う３つの土坑はこのタイプである。次は、平面形は長楕円形で断面形が浅皿状のものと、平面形が楕円形や不整の楕円形で断面形が筒形、バケツ形のものである。いずれも遺物を伴わないが、前者は他の遺跡の調査例からは墓壙の可能性があり、後者は一部柱痕の見られるものもあるので、掘立柱建物跡の可能性も考えられるが整然と並ぶものはない。後期の土器が発見されている下尿前Ⅱ遺跡でも墓壙と見られる土坑が多数検出されている。その土坑は住居域とは離れた地区に立地しているが、本調査区では、特に分かれていない。土坑の底付近で底部が欠損した横位の土器が出土しているⅡＣ３ｅ土坑も墓壙の可能性がある。そのほかに時期不明で近世以降の遺構とした２基の土坑は、底面が固結していることから柱痕と考えている。

(3)　溝跡・段状遺構

溝跡は調査区中央を横切るⅡＢ６ｉ溝跡と調査区南側を横切る、ⅣＣ３ｇ溝跡がある。２条とも遺跡の西側の沢の方から遺跡の下方に延びるようである。後者の溝は幅も深さも20cm程度であるが、前者の溝は幅最大140cm、深さ150cmもある。底には水が流れた痕跡があり、長い間使用されていたようである。遺跡下方の集落に水を引く施設であったようだが何時頃使用されていたのか確認はできなかった。下方に集落が形成され

た時期は近世以降ということなのでその時期のものである可能性がある。

段状遺構としたものについては、道路跡あるいは畑跡等考えられるが決め手がない。埋土の状況から近世以降の遺構と見られる。

2．遺物

（1）土器・土製品

縄文時代早期～前期・中期末葉～後期初頭・後期前葉・晩期にわたる土器が出土している。早・前期および晩期の土器については全て遺構外からの出土で、その量も少ない。

早期末～前期の土器は、調査区全体から出土しているが、西側の沢に近い地点からの出土が多く、特に斜面上方での出土が多い。最も古いと見られる繊維を含む土器は調査区西側および南端での出土量が多い。B地区からは同時期の遺構は検出されなかったが、沢をはさんで西側に位置するA地区で、早期末～前期の時期の住居が検出されているので、その住居の時代に伴うものであろう。前期後半の特徴を持つ土器は調査区全体から出土している。１点のみの出土だが４単位の波状口縁で波頂部が台状突起になり、鋸歯状の装飾体になるものである。大木５式期の特徴を持つ土器である。もう一つは口縁部文様帯や胴部に半裁竹管による平行沈線文や刺突文をもつもので、大木６式期と見られる土器である。

中期末葉～後期初頭とした土器は、Ｊ字状のモチーフをもつものや貼り付けた隆帯の断面が三角形を呈するもので、大木10式期の特徴をもつ土器である。ⅢＣ３ｇ住居跡の埋土下部からの出土であるが、胴部の一部のみなので詳細は不明である。

本遺跡で最も出土しているのが、後期前葉の土器である。調査区全体から出土している。その特徴は、連鎖状隆帯をもつもの（Ⅲ群１類）、あるいは沈線により弧状文・曲線文を描き、その間に磨消縄文をしているものである（Ⅲ群２・３類）。連鎖状隆帯は中期末から現れる特徴で、波状口縁の波頂部から懸垂するものや頸部をめぐるものがある。連結点にはボタン状の装飾をするものもある。胴部まで延びるものもあるが数は少ない。多いのは前述のボタン状貼付の下部から平行沈線で曲線文、弧状文を描くものと沈線のみで曲線文、弧状文を描くものである。これらは、貝鳥貝塚のⅡ群１・２類、八天遺跡の第Ⅲ群１・２・３類と４類の一部、立石遺跡（大迫町）の第Ⅲ群第２・３・４類、観音堂遺跡の第Ⅵ群１・２・３類にその類例が求められる。後藤（1974）の宮戸Ｉｂ式ａ群としたものに含まれる土器である。しかし、県内のこの時期の遺跡は少なく、出土しても限られた時期に限定され、中期末～前期前葉に継続して発掘されることが少なかったため、土器の編年も確立されていなかった。当センター発掘遺跡（報告書未刊）の清水遺跡（一関市）では同時期の包含層を発掘しており、この時期の編年に大きな資料を提供してくれると思われる。

晩期の土器はほんの僅かな出土で、変形工字文が施文されている晩期末葉の時期の浅鉢と地紋のみの土器である。A地区の土坑や遺構外からも同時期の土器が出土している。

なお１点の破片だけだが、胴部の断面に幅２mm、深さ２～３mmの刺突（刻み）が10～17mmの感覚で並んでいるのが観察された。前述の清水遺跡でも同様な例が見られ、土器製作中に輪積粘土が接着しやすいように付けられたものと考えられる。

土製品は、土器片を利用した無孔の円盤状土製品で、長径は3.6～5.6cm、厚さ７～８mm、重量が11～27.7ｇである。遺構外からの出土した５点の内３点はⅡＣ４ｆ住居跡周辺からである。製品の特徴や出土状況からは用途について言及することは困難であるが、土器片を利用した円盤状土製品については、佐々木(1988)、松下(1989)の論功がある。

		B		C										D									
		i	j	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j
I	8																						
	9				40				5		30			60		30							
II	0			60		235	20	150	110	1190	265	15		90	20								
	1			15	60		660	680	390	640	200	20	50	40		80	30						
	2	180		50	10	35	450	260	120	160	10												
	3	35	20		5	1680	4140	300	285	480	30	95	25				5						
	4	50		410	175	240	190	4770	735	1430	590	25			30								
	5	565	920	55	150	190	200		1225	1620	2010	200	35		50								
	6			10	925	265	21	30	1500	4880	150	155	1680		25	40							
	7			225	410	230	290	5	1645	155	535	140	235	100	115			10					
	8		25		320	175	90	605	590	80	90	235	205	610	60								
	9	40		55			845	900	535	30		260	805	470	295	15	5						
III	0					50	150		700	25	205	705	440	660	190	180	10						
	1					85	40	820	125			295	700	2285	805								
	2					300	375	230	410	440	80	1620	205	660	110				80	40			
	3				20	900	690	290	680	2700	665	50	160	30					10				
	4					390	260	830	1770	860	50		1500	70	30	70	30	50		35	40		
	5						770	130	1430	2220	1810	6030	5675	75	5	20	40						
	6							1130	80	1160	2240	850	330	150	290	80	150		40				
	7							100	370	340	780	110	180	80	15	25		10					
	8							410	110		30	85	90					30	130			50	
	9								90	90	70		60					50	60				
IV	0								90			50		50									
	1								80		780			10		50					10		
	2							260										40		5			
	3																						
	4																20						
	5														60								
	6														5	10							
	7																						

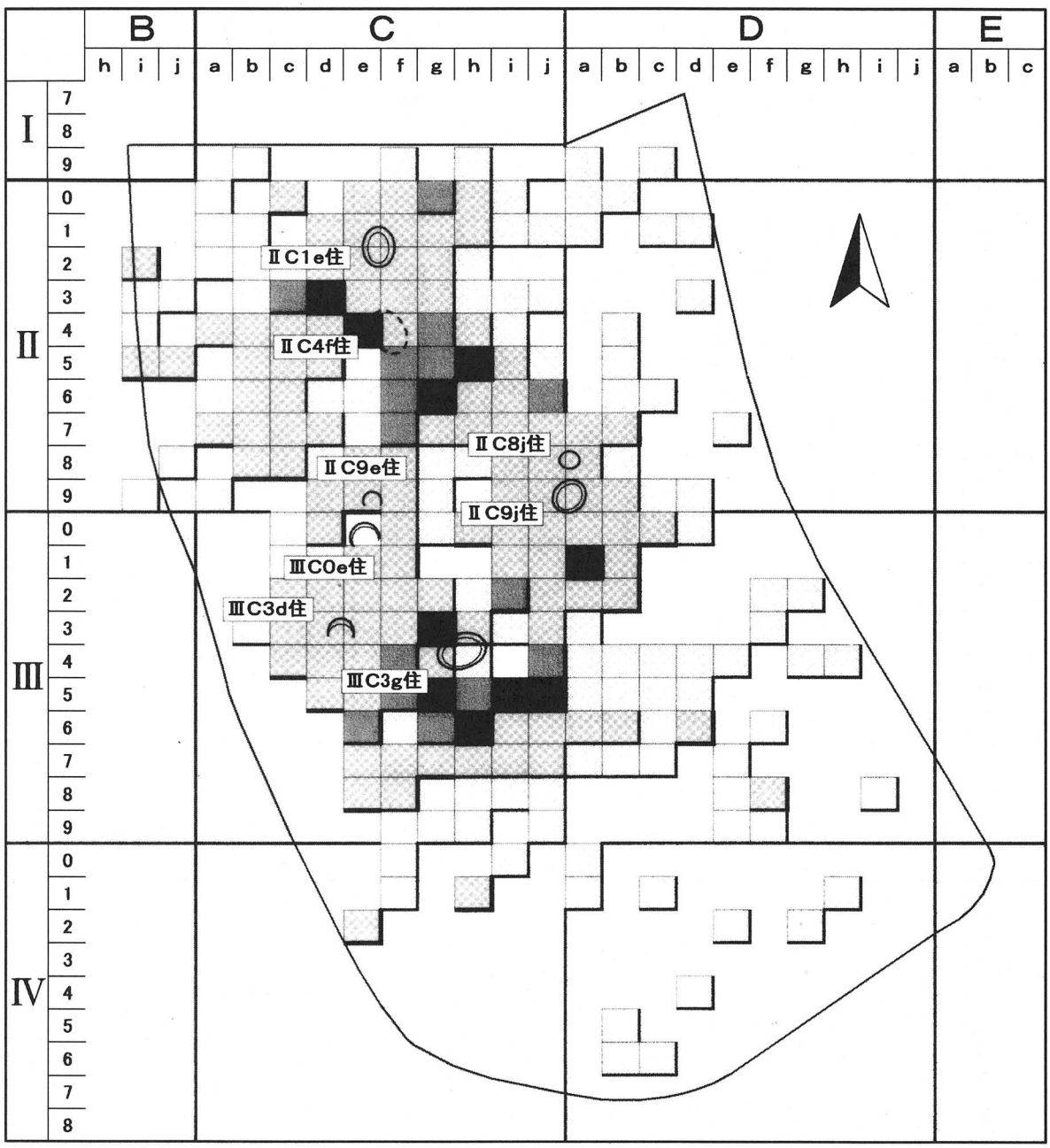
[g]

表5　土器（重量別）分布表

		B		C										D									
		i	j	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j
I	8																						
	9																						
II	0								1		2												
	1						11	2			2	2		1									
	2	1	8				1	1	2			1											
	3	3	2	3		2	2	2	2	4	2												
	4			3		2	1	10	1	4	1												
	5	1	3	1	2		1		5	7	6	1	1		1		1						
	6			1	2	2			8	12	1		1										
	7			1	2	1	2		1		1		1		1								
	8		1		3	2	1	2		1													
	9						2	3	1	1		3		2									
III	0								1	1	3	1	2	8	2								
	1							2				1		24	4								
	2						2	1	5		2	3		1	2								
	3						3	3	30		1			1									
	4					2	2	2	4	1			1		1					1			
	5						3		9	1	3	7	6		1					1			
	6							1		2	5			1									
	7						3		4	1	2	1	2										
	8							1	1		7	1											
	9								1		4		2										
IV	0													1									
	1								1		3												
	2							2															
	3																						
	4														4								
	5																						
	6																						
	7																						

[点]

表6　剥片分布表



第45図　土器(重量別)分布図

凡例

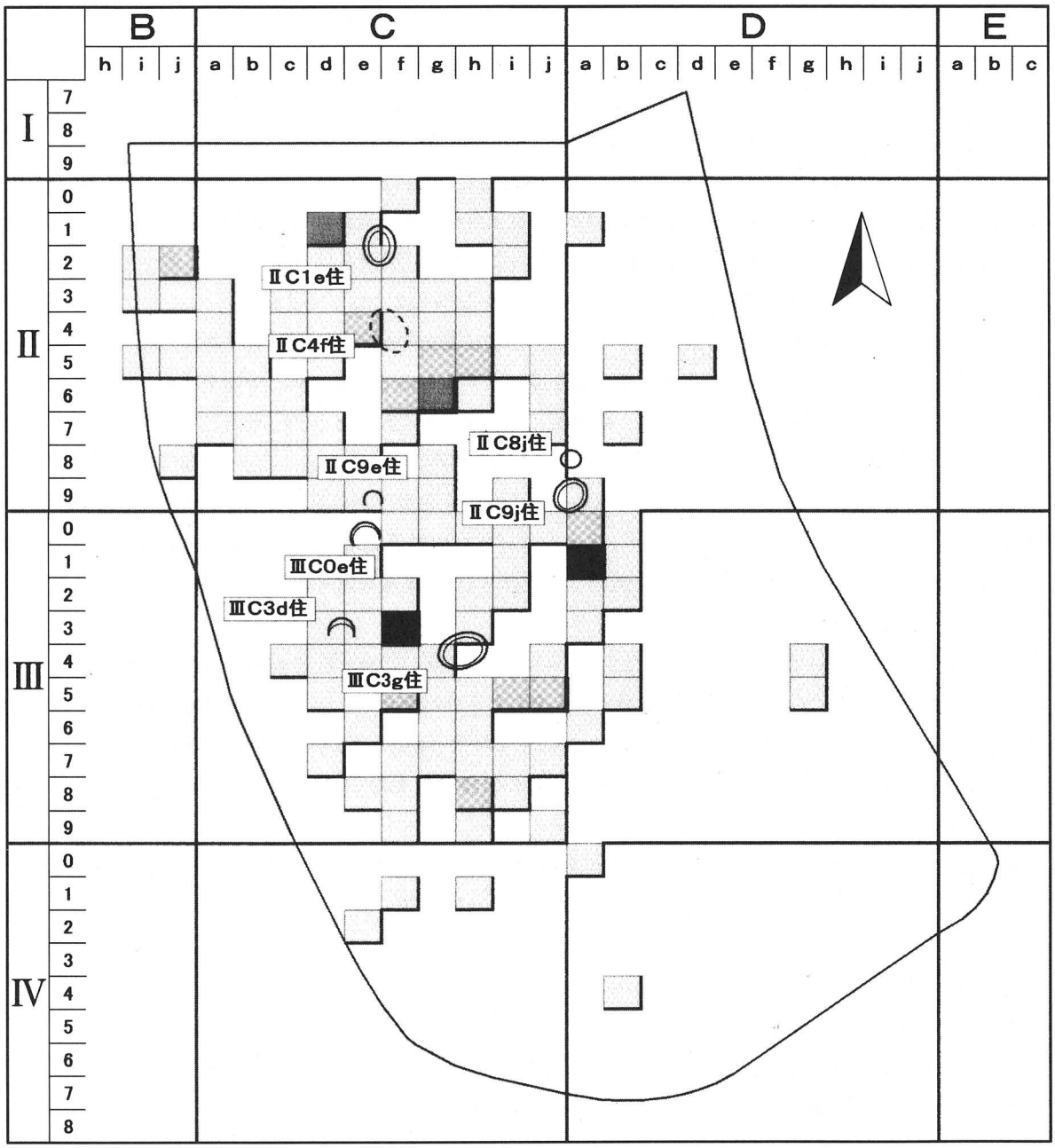
……100 g 未満

……100 g ～1kg未満

……1kg～2kg未満

……2kg～3kg未満

……3kg以上



●第46図　剥片分布図

凡例

……1 ～ 5点

……6 ～10点

……11～15点

……16点以上

（2）石器・石製品

特に目に付くのは、篦状石器である。剝片石器53点中14点と剝片石器の中では26.4％を占める。断面形が三角形を呈し身部が厚いものやホルンフェルスで製作されたものがある。また、縦型石匙の中に１点のみの出土だが横断面形が算盤玉状で身の厚いものがある。先端部が欠損しているが、スクレイパーとしての用途より尖頭器と同様な用途が考えられる形状をしている石器である。遠野市の新田Ⅱ遺跡、釜石市の沢田２遺跡、湯田町清水ケ野遺跡、千厩町清田台遺跡といった縄文時代前期の遺跡でも同様な石匙が出土している。

石製品は、径2.7～5.6cm、厚さ0.9～1.4cm、重量16.9～43.7ｇで、周囲を打ち掻いたり、磨って円形に加工しているものがある。調査区中央の住居に囲まれた地区から多く出土している。

石質を見ると、剝片石器は頁岩が多く、礫石器は安山岩や凝灰岩が多い。基盤岩である石英安山岩も利用されている。これらは、遺跡が立地する奥羽山脈を産地とするものである。北上山地を産地とするホルンフェルスは、篦状石器にのみ利用されている。黒曜石は、遺構内出土および不定形石器としたものも含めて５点出土している。その産地は、佐々木繁喜氏（宮城県立若柳高校）によれば、花泉産３点、男鹿産？１点、北海道置戸産？１点となっている。在地産のものもあるが遠く北海道から運ばれてきた可能性もある。周辺の遺跡の例も参考にしなければならないが、当センター発掘の周辺遺跡（下尿前Ⅱ・Ⅳ遺跡、尿前Ⅱ遺跡Ａ地区）では、黒曜石の出土が少なく（３遺跡で掲載は５点）、産地同定も行っていないので、今後調査される遺跡の出土に期待したい。

そのほかに調査区全体で461点の剝片が出土している。使用痕の認められるものも数点含むが、その分布はⅡＣ４ｆ住居付近、ⅢＣ４ｆ土器埋設遺構周辺、ⅡＣ９ｊ住居跡周辺に多く、調査区北西端のⅡＢ区にも出土が多い。ⅡＢ区、ⅡＣ区の調査区西寄りからは縄文時代早期末～前期の土器が比較的多く出土しているので、同地区で出土した剝片石器には早期末～前期の石器も含まれていると思われる。

（3） 古銭

寛永通宝３枚と永楽通宝は、調査区中央やや南寄りから出土している。出土地点から北西数ｍの地点に「山神社（移転済み）」（胆沢町史Ⅲ）があったようなので、関連があるかもしれない。

参　考　文　献

草間俊一ほか（1971）；『貝鳥貝塚』．花泉町教育委員会．

本堂寿一ほか（1978）；『八天遺跡』．図版編　北上市文化財調査報告第24集．

〃　（1979）；『八天遺跡』．本文編　北上市文化財調査報告第25集．

中村良幸（1979）；『立石遺跡』．大迫町埋蔵文化財報告第３集．

〃　（1986）；『観音堂遺跡』．大迫町埋蔵文化財報告第11集．

岩手県埋蔵文化財センター（1996）；『鳩岡崎上の台遺跡発掘調査報告書』：岩文振埋文報第240集．

〃　（1997）；『下尿前Ⅱ遺跡発掘調査報告書』．岩文振埋文報第252集．

〃　（1998）；『下尿前Ⅳ遺跡発掘調査報告書』．岩文振埋文報第269集．

〃　（1999）；『尿前Ⅱ遺跡Ａ地区発掘調査報告書』．岩文振埋文報第288集．

後藤勝彦（1974）；「縄文後期宮戸Ｉｂ式周辺の吟味」．『東北の考古・歴史論集』．

胆沢町（1982）；「古代中世編」．『胆沢町史Ⅲ』．

佐々木嘉直(1988)；「岩手県内出土の石製円盤・土製円盤」.岩文振埋文センター紀要Ⅷ

松下亘(1989)；「北海道の再生土製円盤」.北海道考古学第25号.

写 真 図 版

遺跡遠景（東から）

遺跡遠景（南から）

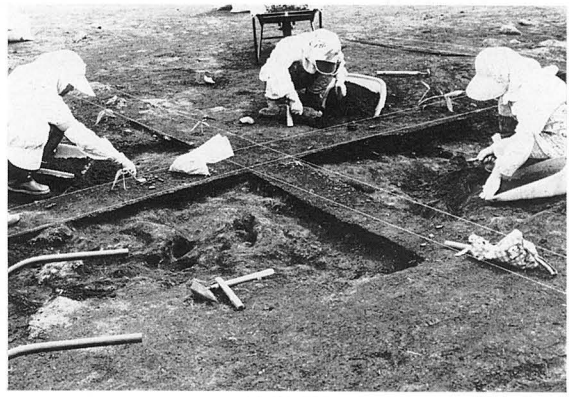
写真図版１　空中写真１

調査区全景（南から）

IIC区基本土層断面

調査開始

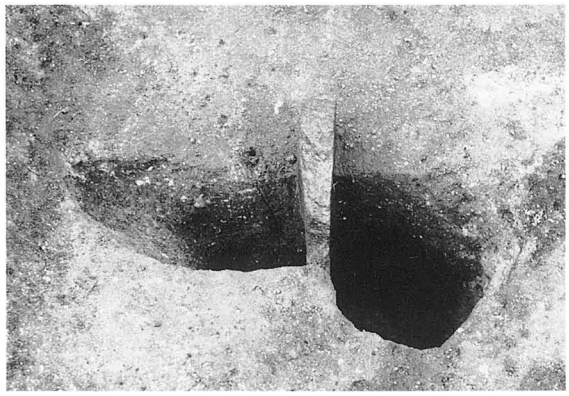
検出風景



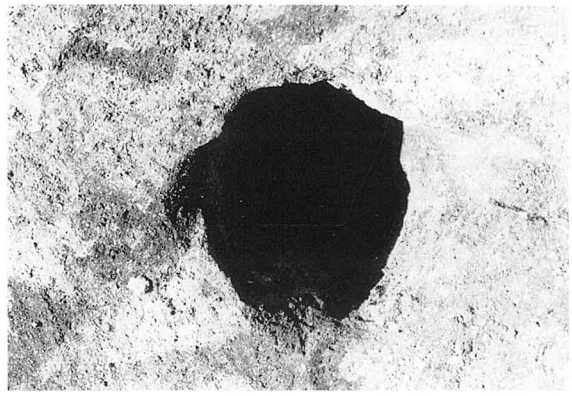
精査風景

写真図版２　空中写真２・基本土層・作業風景

IIC1e住居跡　平面



床面立石　断面



立石下土坑　平面

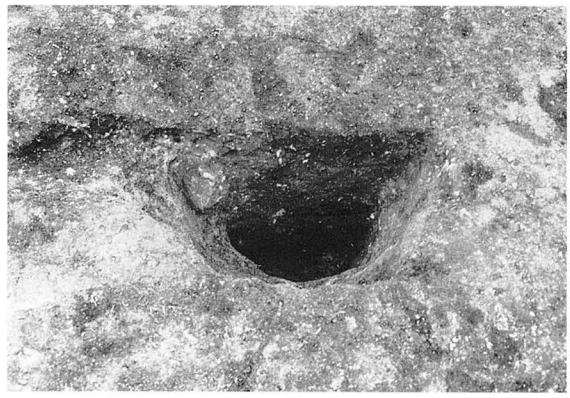
写真図版３　IIC1e住居跡

IIC4f住居跡　平面

炉　断面

柱穴P1　断面

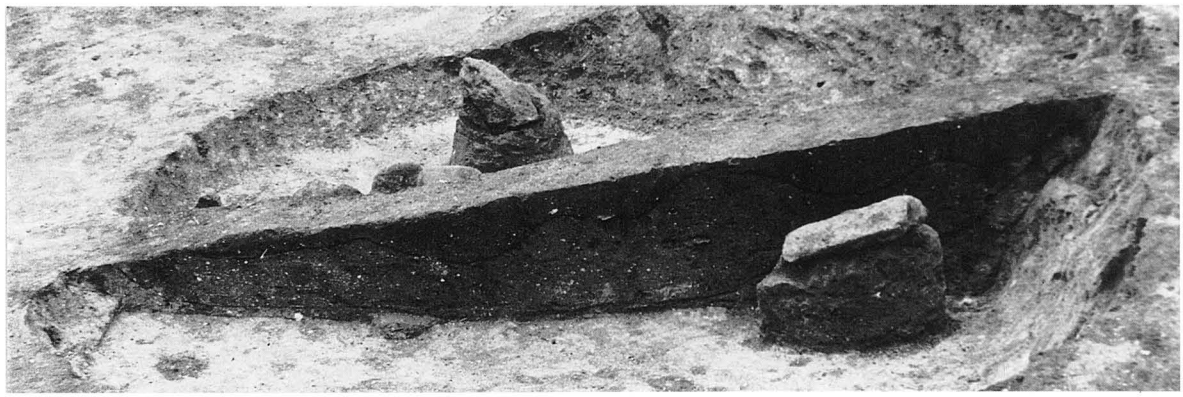
柱穴P2　断面



柱穴P3　断面

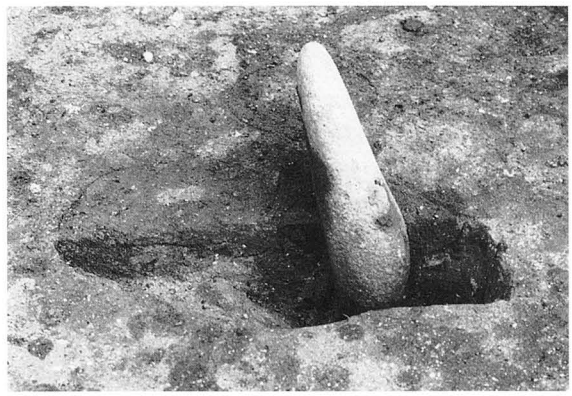
写真図版４　IIC4f住居跡

IIC8j住居跡　平面



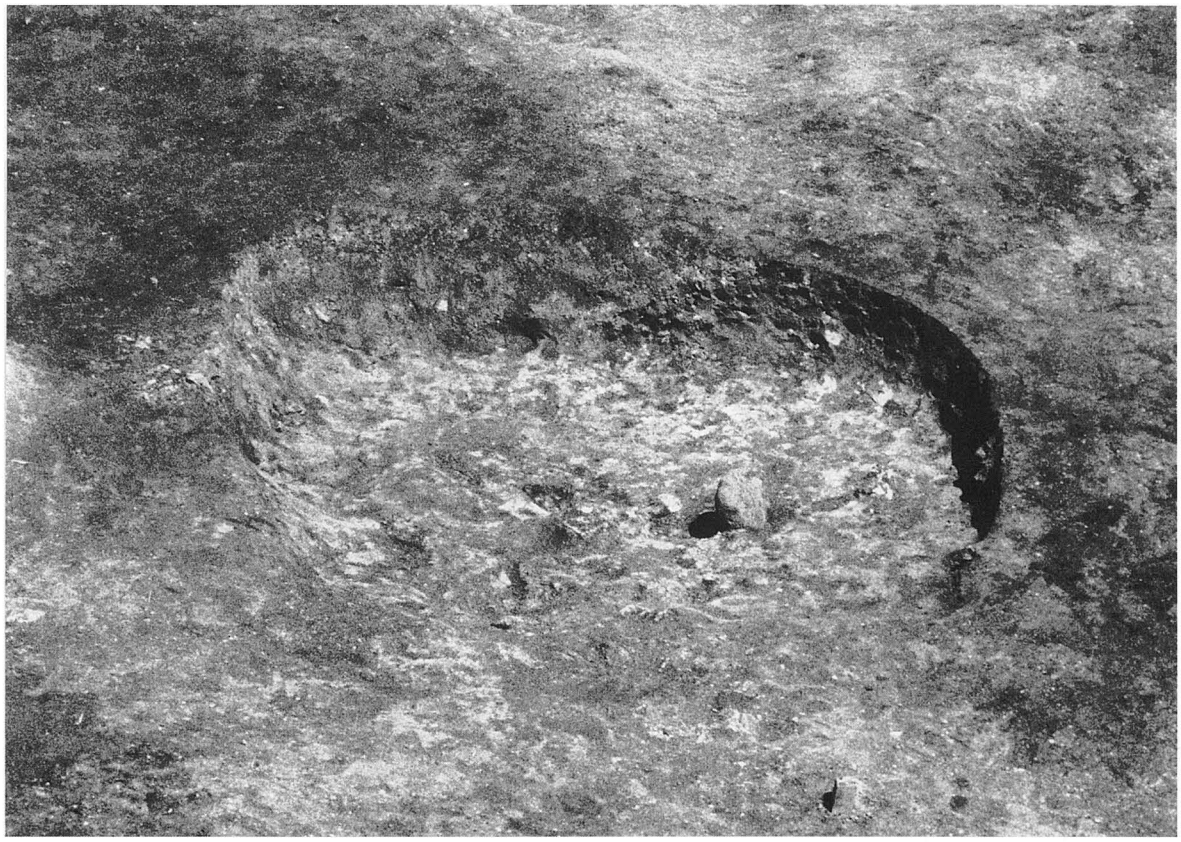
断面

炉　平面

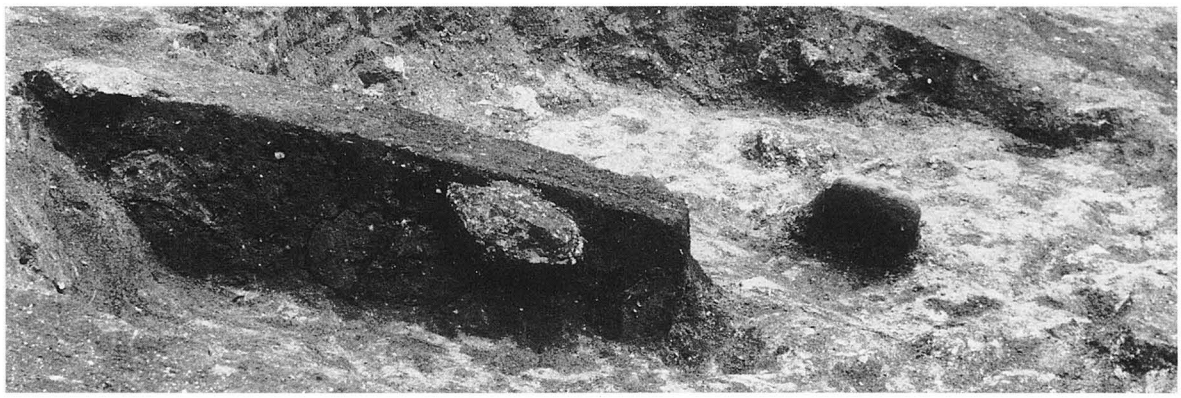


炉　断面

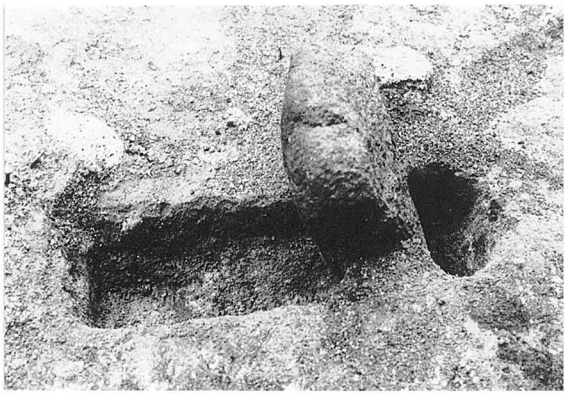
写真図版５　IIC8j住居跡



IIC8j住居跡　平面



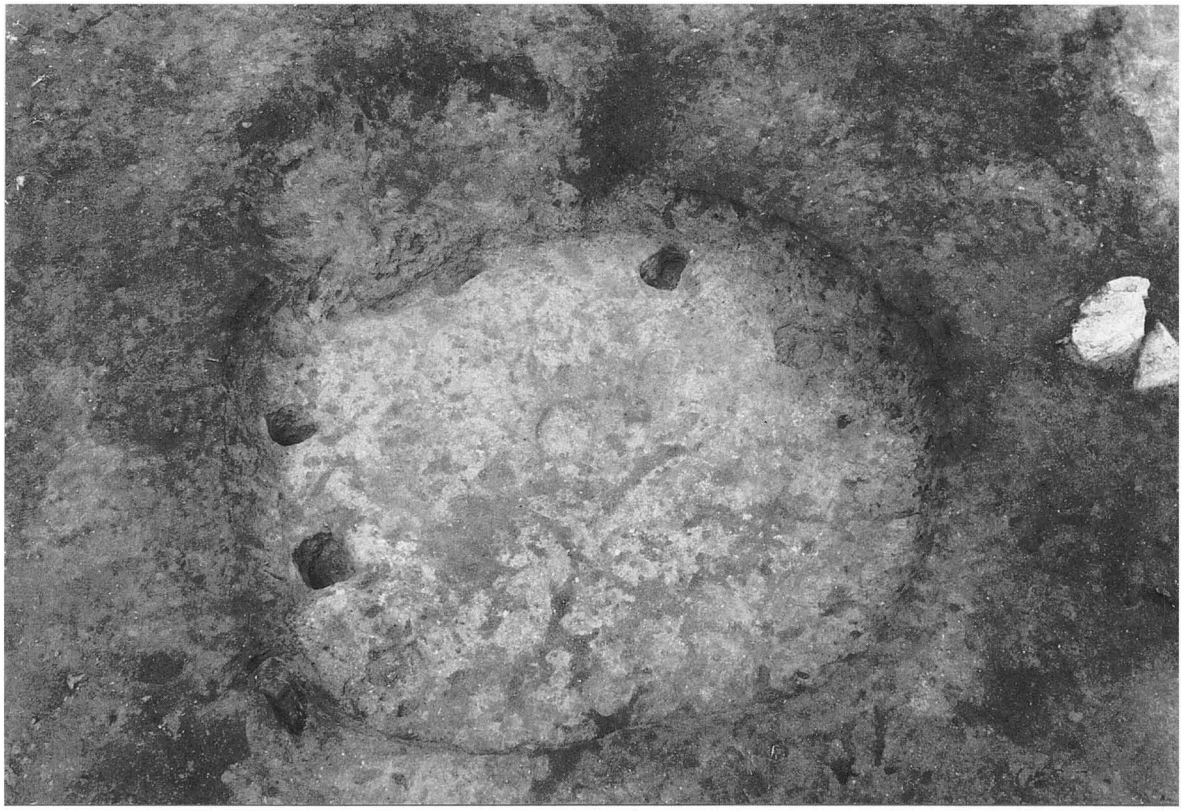
断面



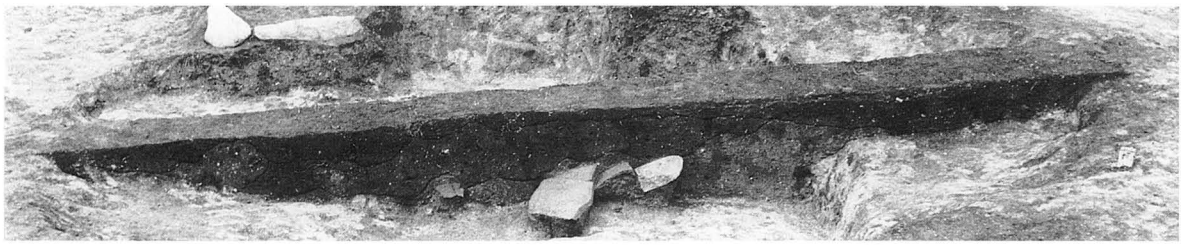
炉　断面

精査風景

写真図版６　IIC9e住居跡

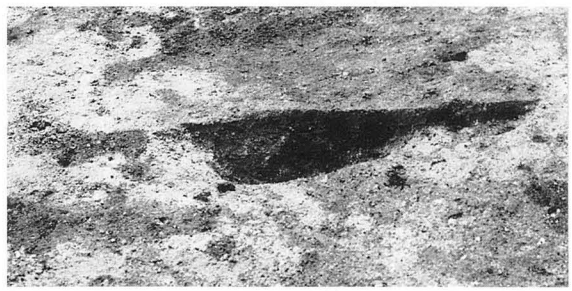


IIC9j住居跡・土坑　平面

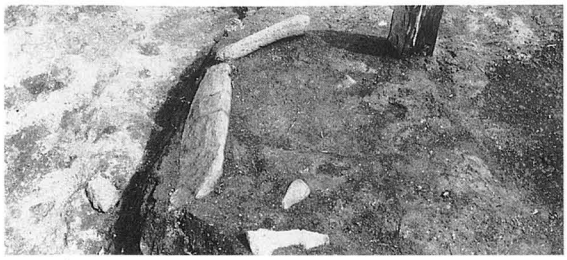


断面

炉　平面



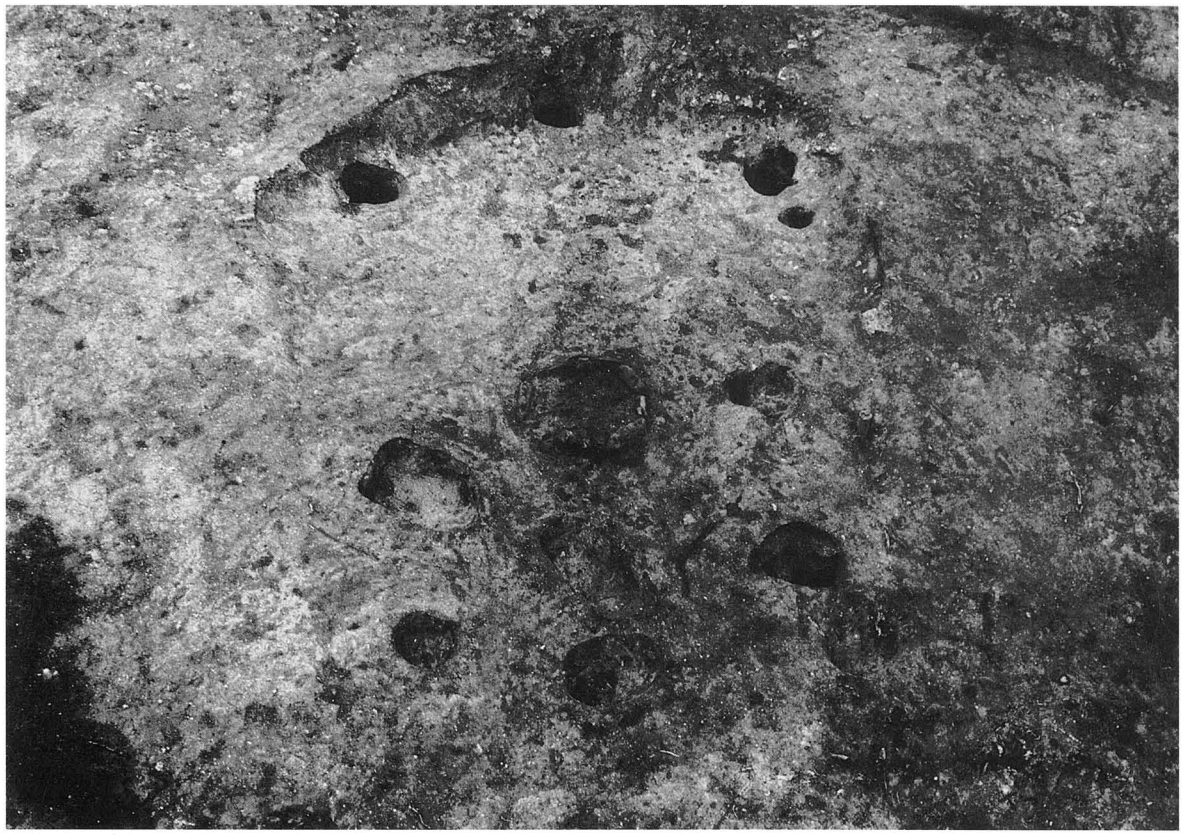
炉　断面



配石　平面

配石　断面

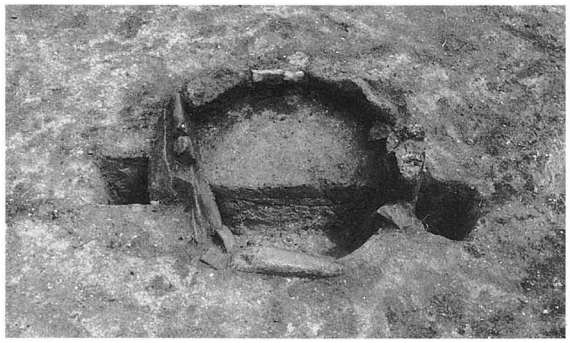
写真図版７　IIC9j住居跡・土坑



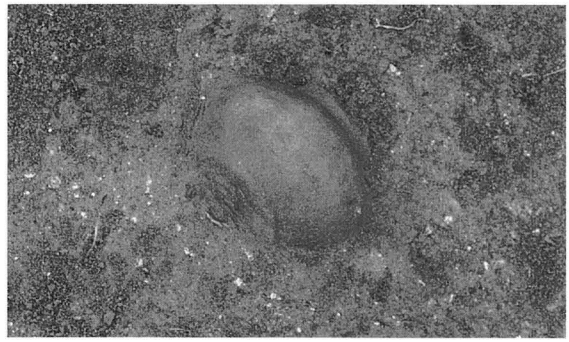
ⅢC0e住居跡　平面

断面（西から）

断面（南から）

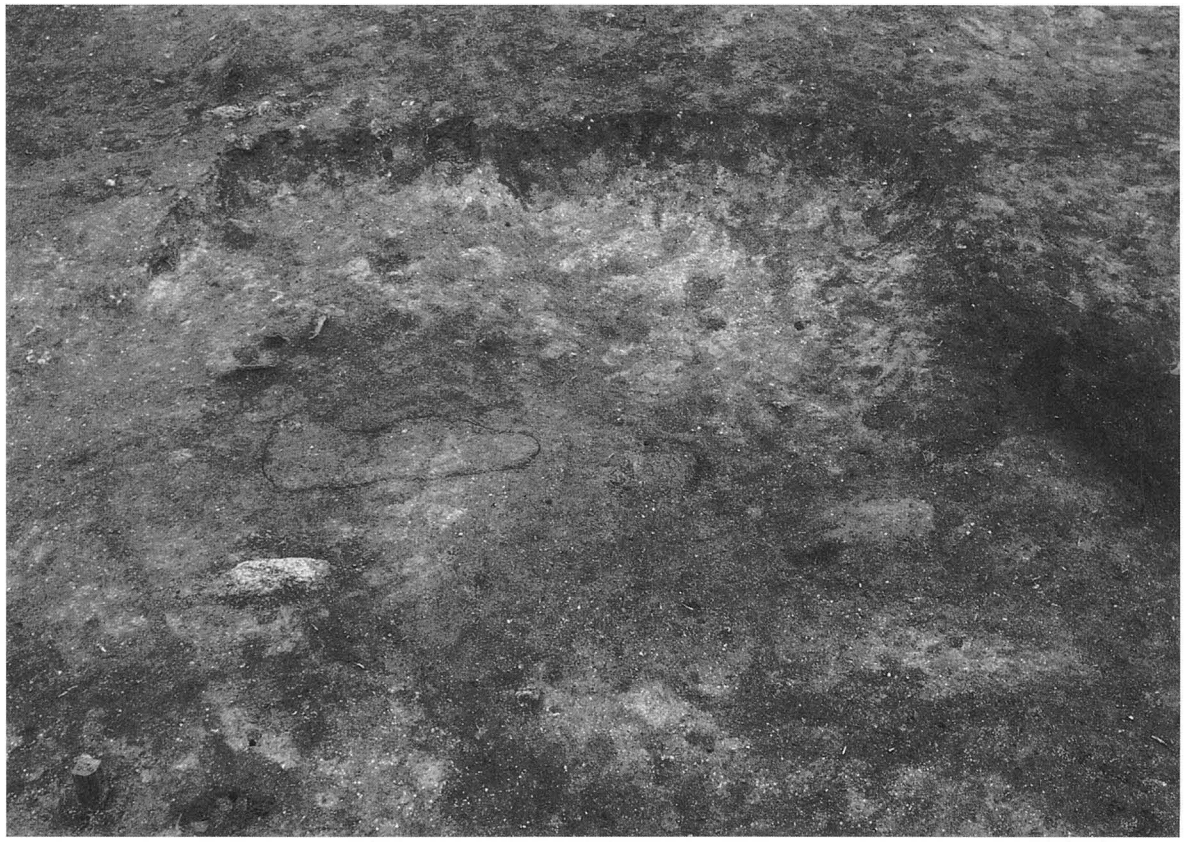


炉　断面

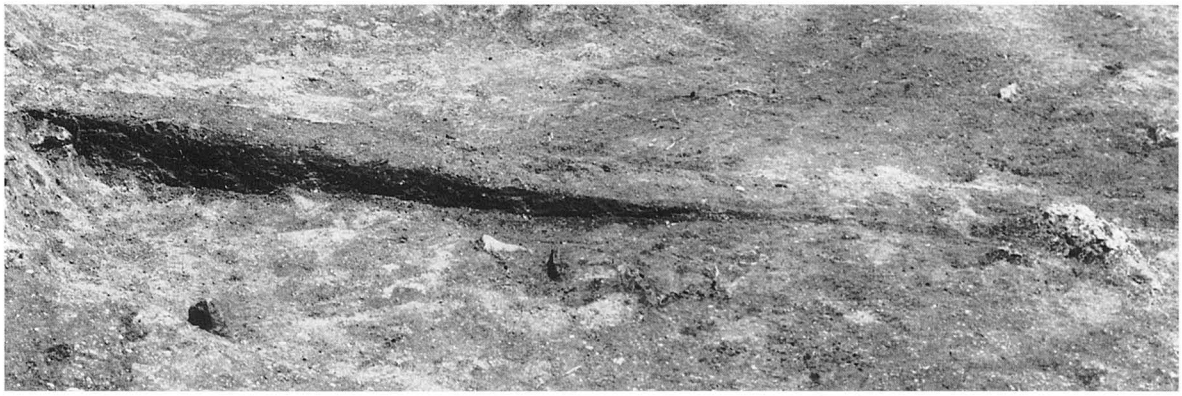


遺物出土状況

写真図版８　ⅢC0e住居跡



ⅢC3d住居跡　平面

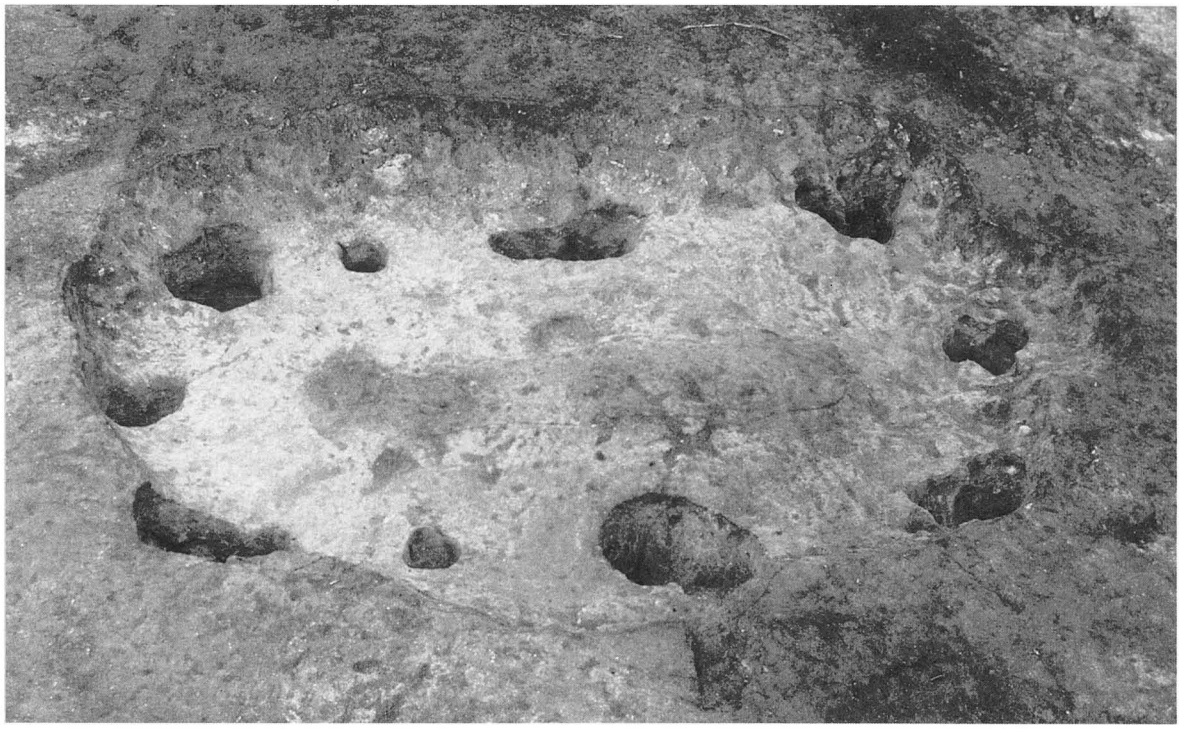


断面

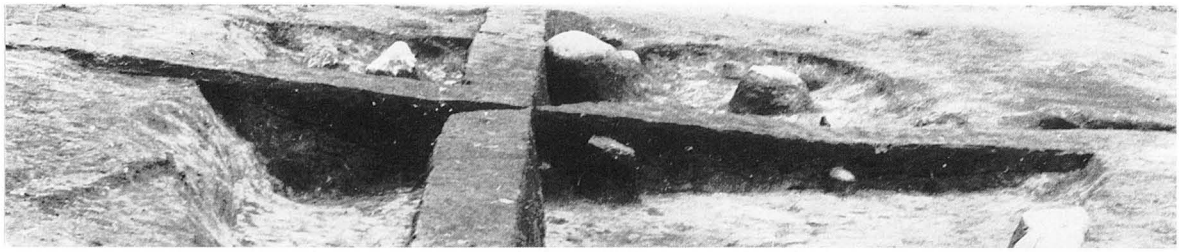
炉　断面

立石断面

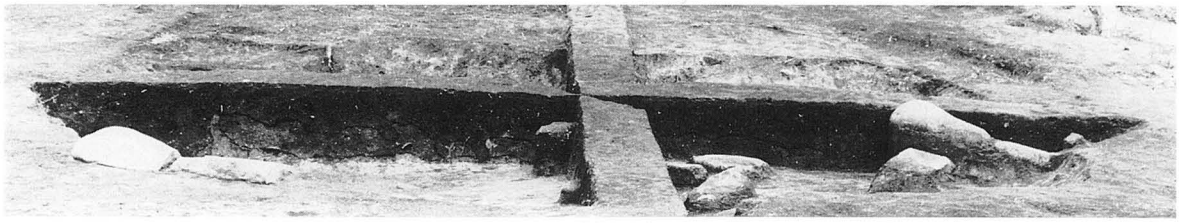
写真図版９　ⅢC3d住居跡



ⅢC3g住居跡　平面

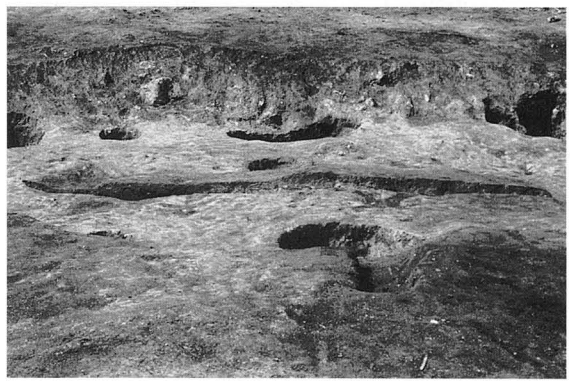


断面（西から）



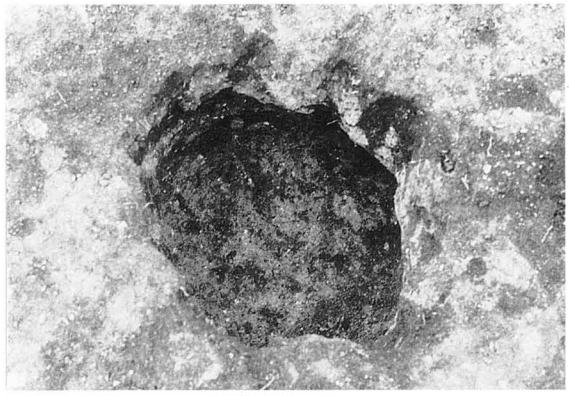
断面（南から）

炉　平面

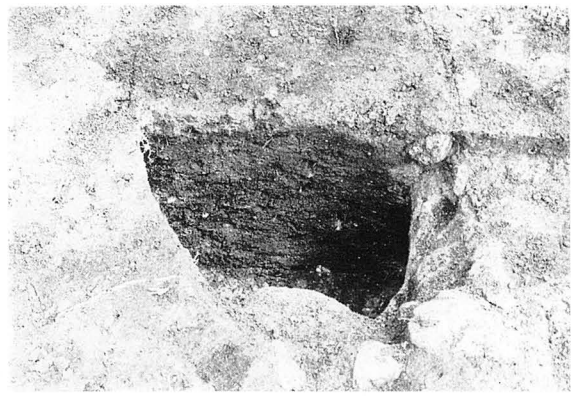


炉　断面

写真図版10　ⅢC3g住居跡

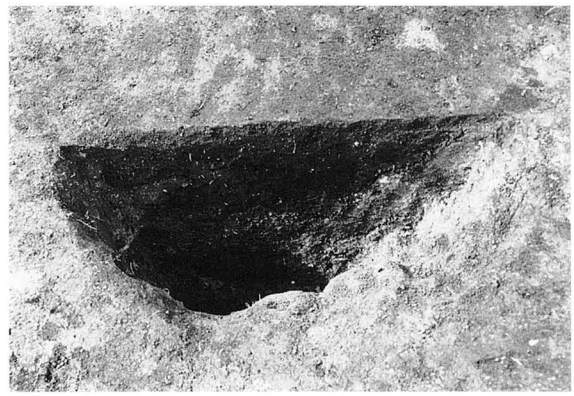


IIC9a土坑　平面



断面

IIC0e土坑　平面

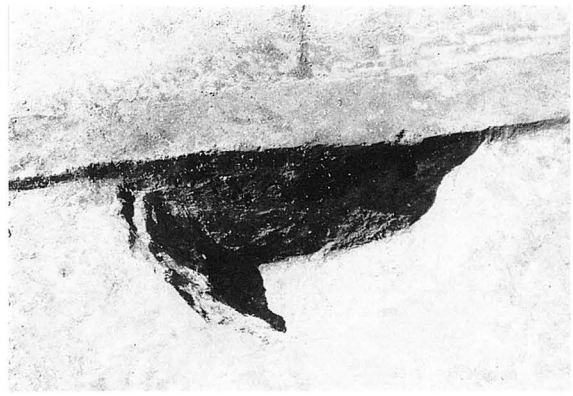


断面

IIC0h土坑　平面

断面

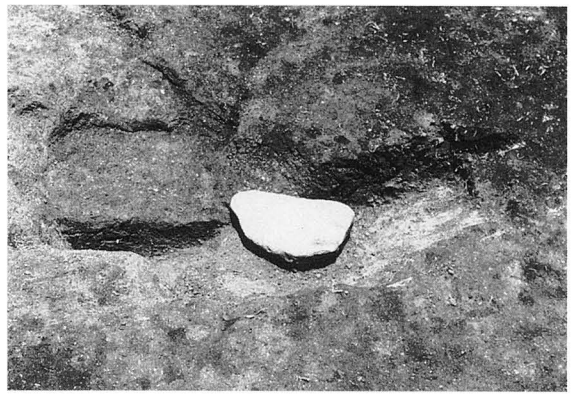
IIC0j土坑　平面



断面

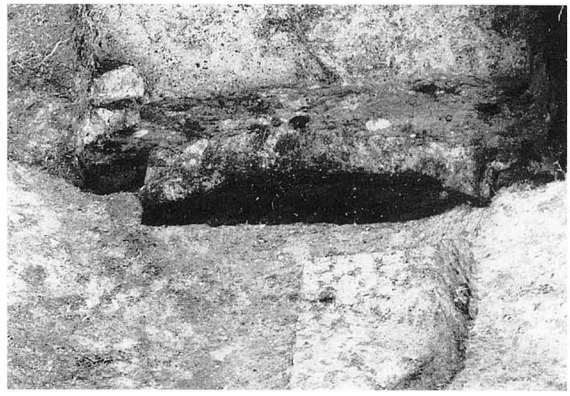
写真図版11　土坑1

IIC2e①・②土坑　平面

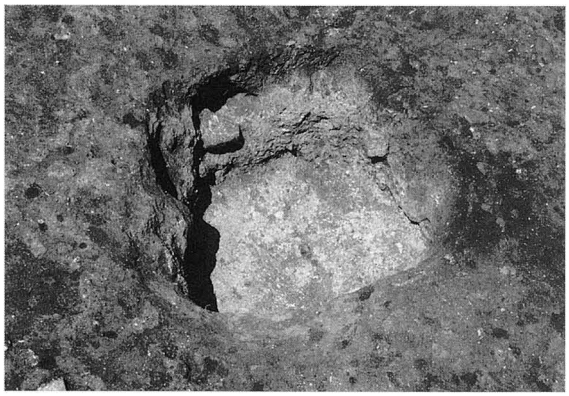


断面

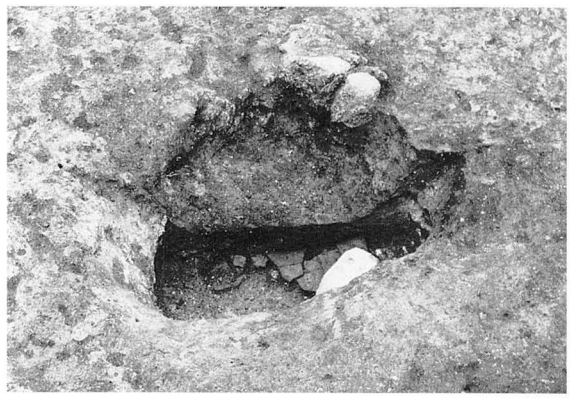
IIC2j土坑　平面



断面



IIC3e土坑　平面



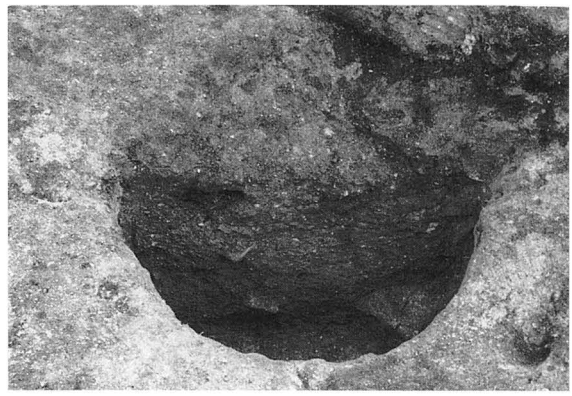
断面

IIC3e土坑　遺物出土状況 1

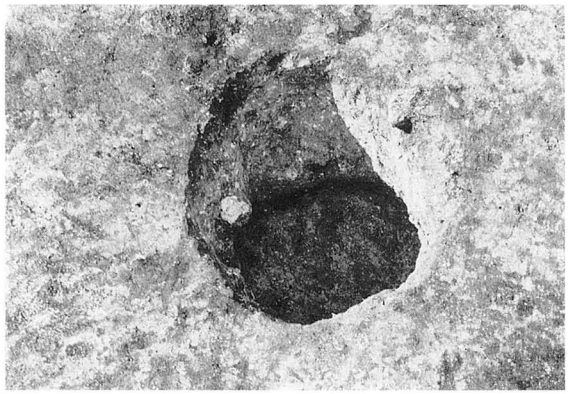
遺物出土状況 2

写真図版12　土坑 2

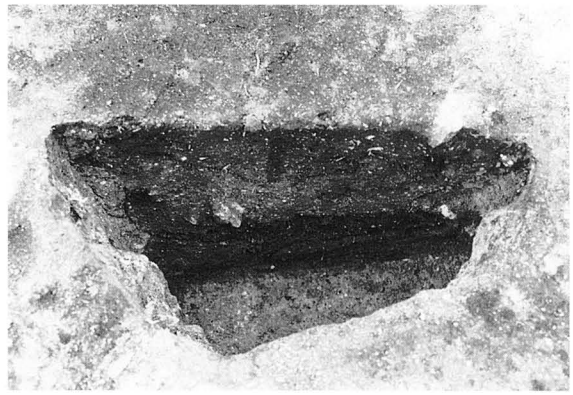
IIC4f土坑　平面



断面

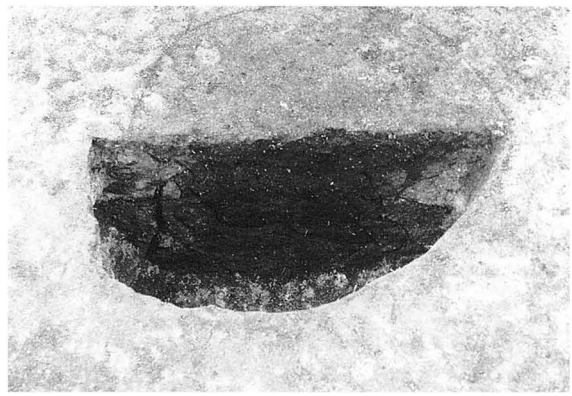


IIC5e土坑　平面

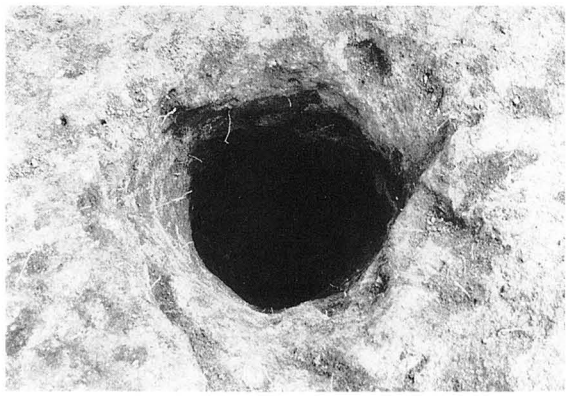


断面

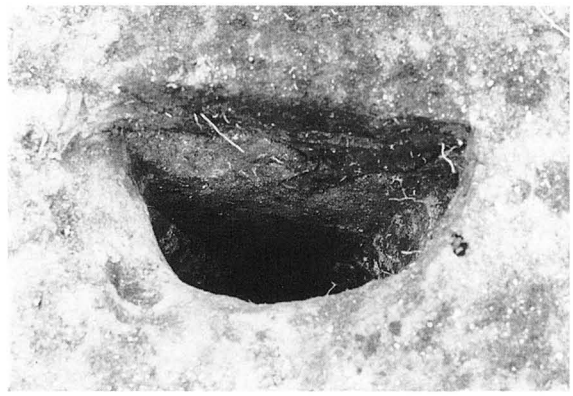
IIC7e土坑　平面



断面

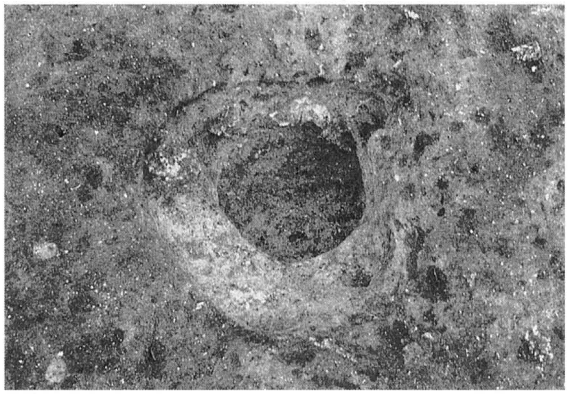


IIC7g土坑　平面

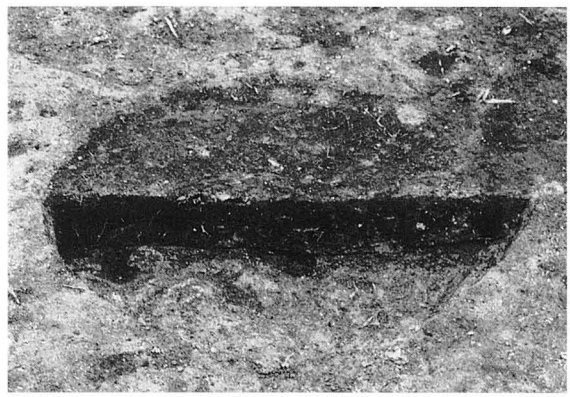


断面

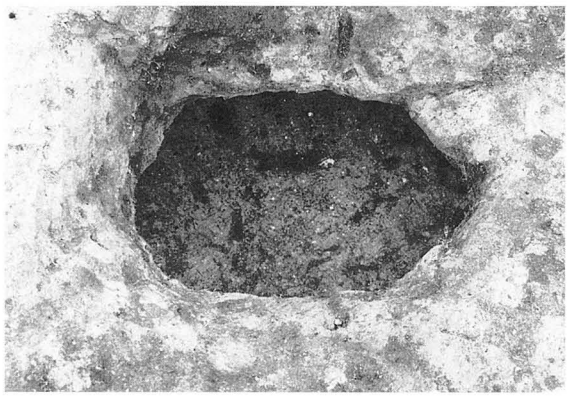
写真図版13　土坑３

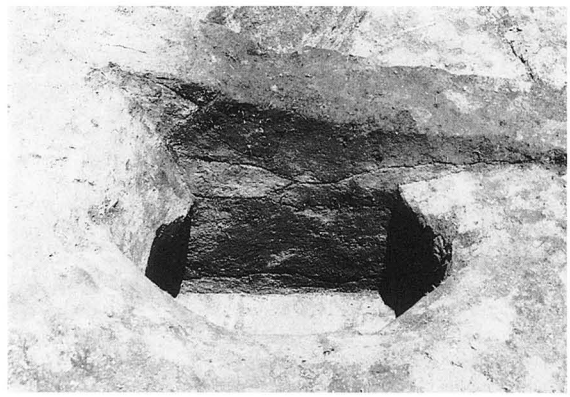


IIC8e土坑　平面　　断面

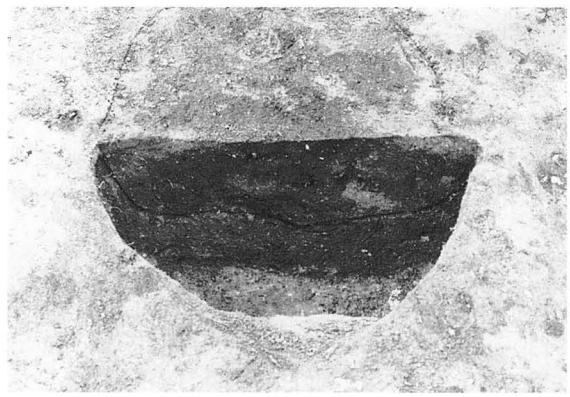


IID2a土坑　平面　　断面





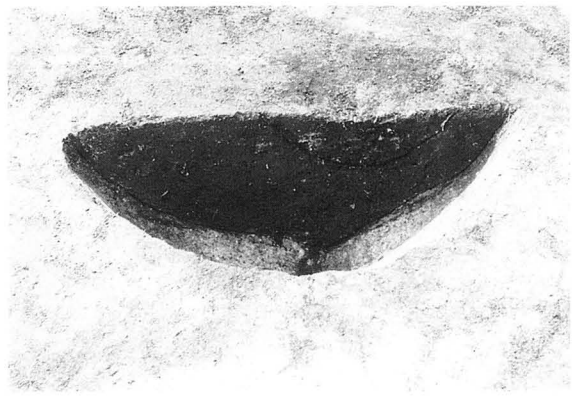
IID3d土坑　平面　　断面



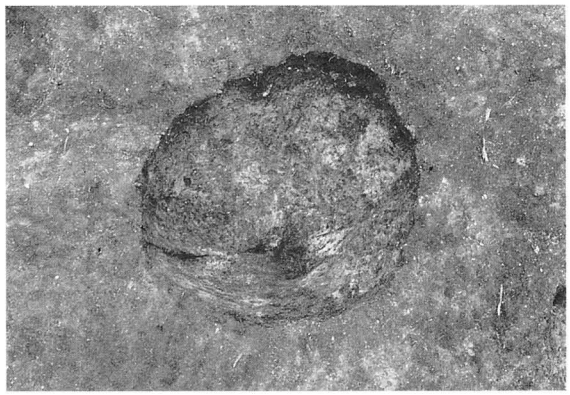
IID4c土坑　平面　　断面

写真図版14　土坑4

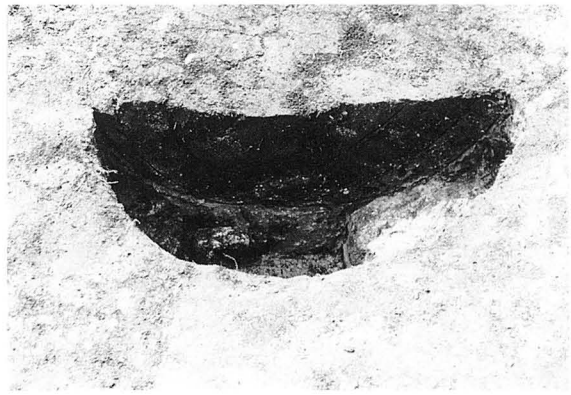
IVD1b①土坑　平面



断面



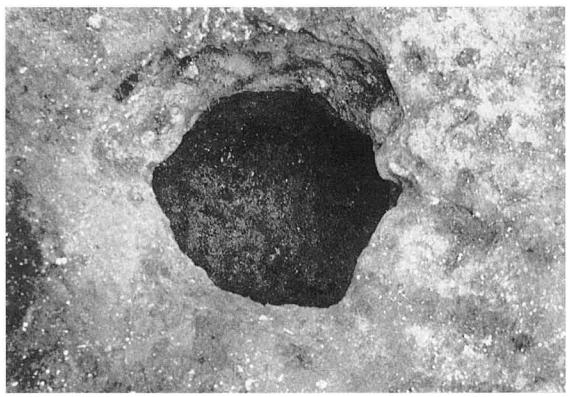
IVD1b②土坑　平面



断面

IIC8d土坑　平面

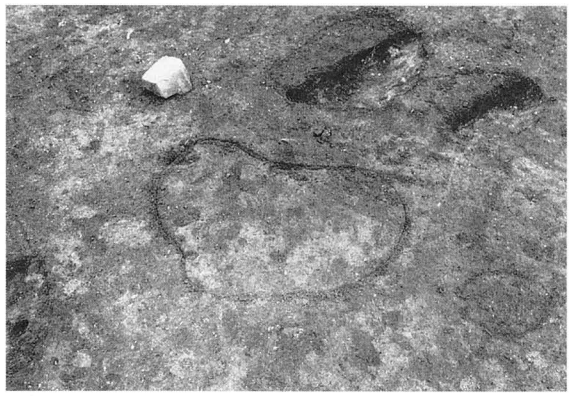
IIIC0j土坑　平面



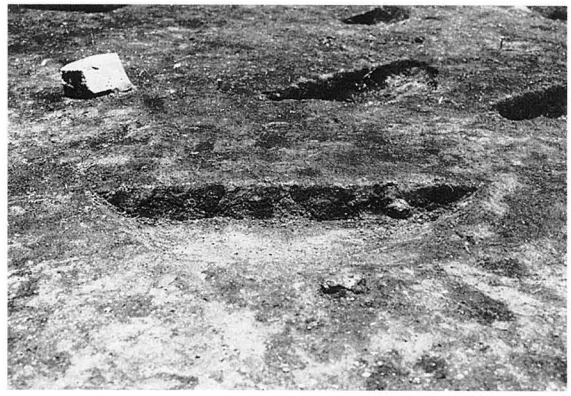
IIIC4f土坑　平面

作業風景

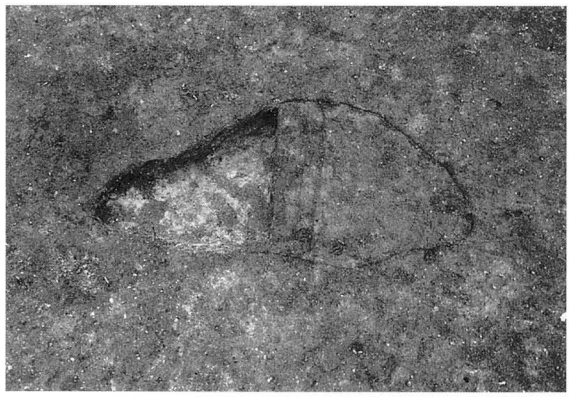
写真図版15　土坑5



IIC4a焼土　平面



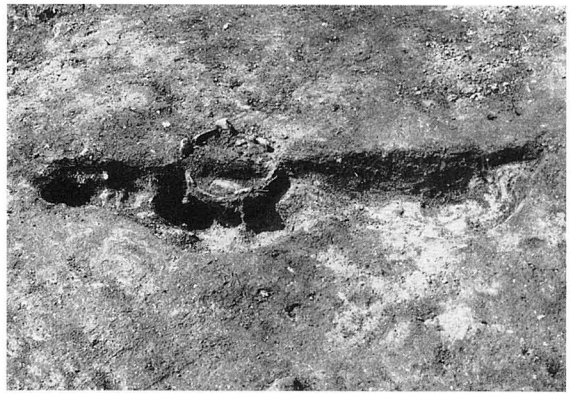
断面



IIC7e焼土　平面

断面

IIIC4f埋設土器　平面



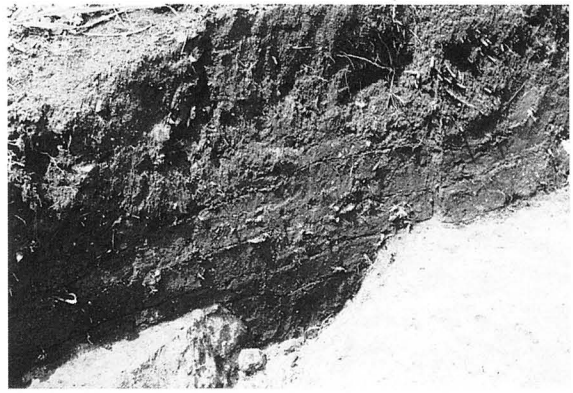
断面

IIID0e段状遺構　平面

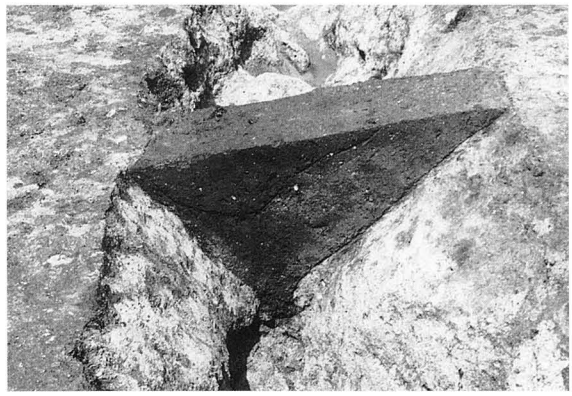
断面

写真図版16　焼土遺構・土器埋設遺構・段状遺構

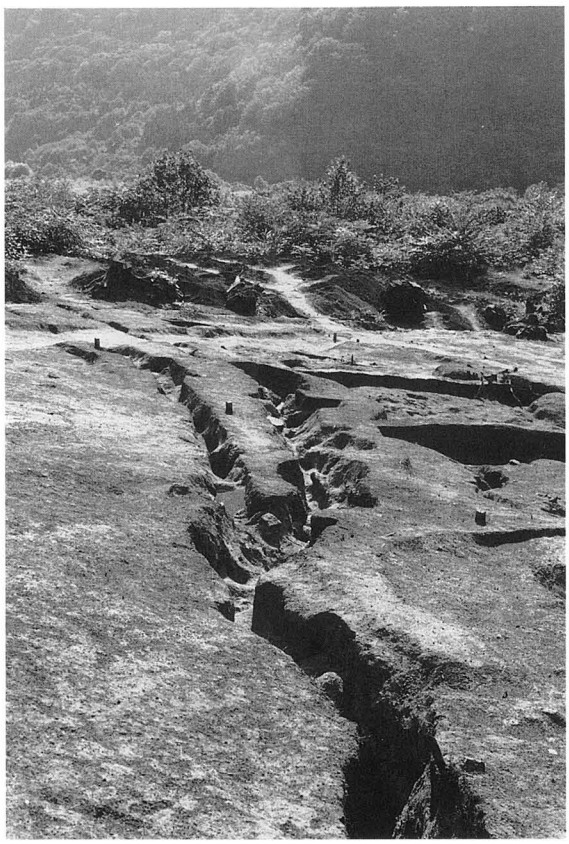
IIB6i溝　平面（南から）



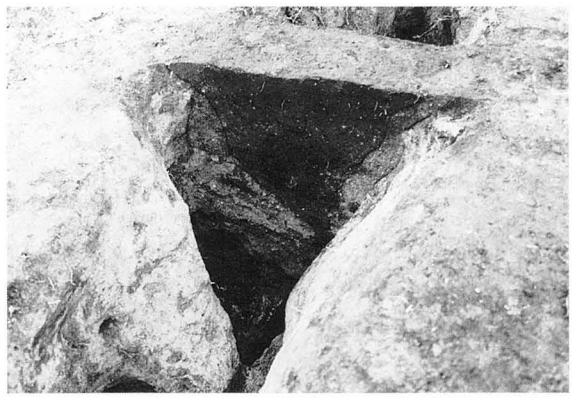
断面 1



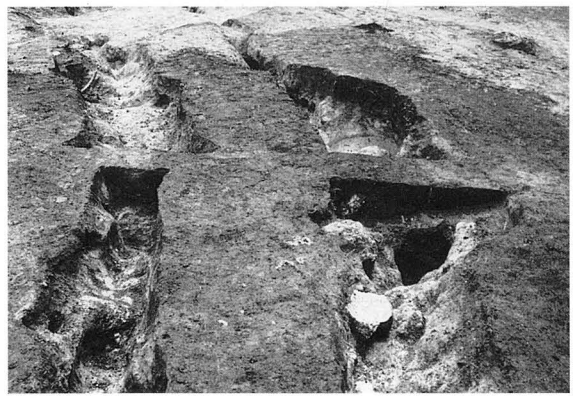
断面 2



IIB6i溝　平面（北西から）

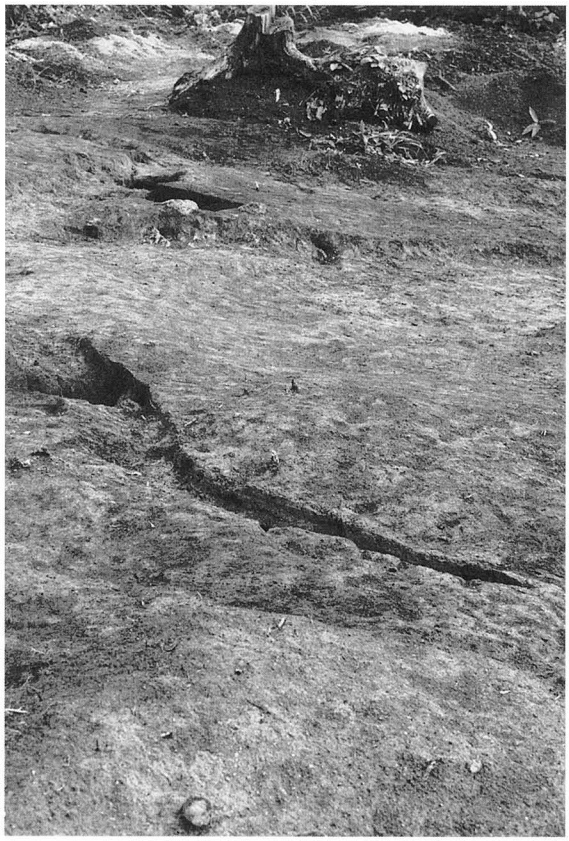


断面 3

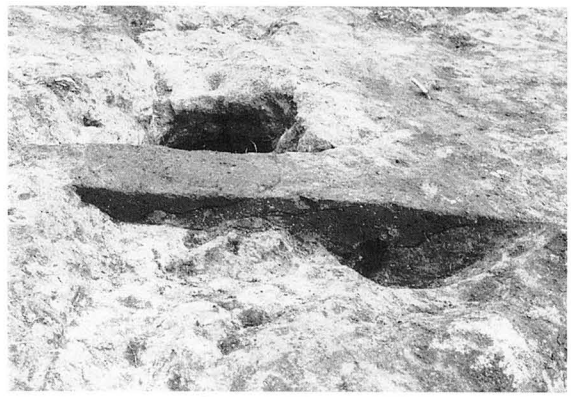


断面 4

写真図版17　溝跡 1

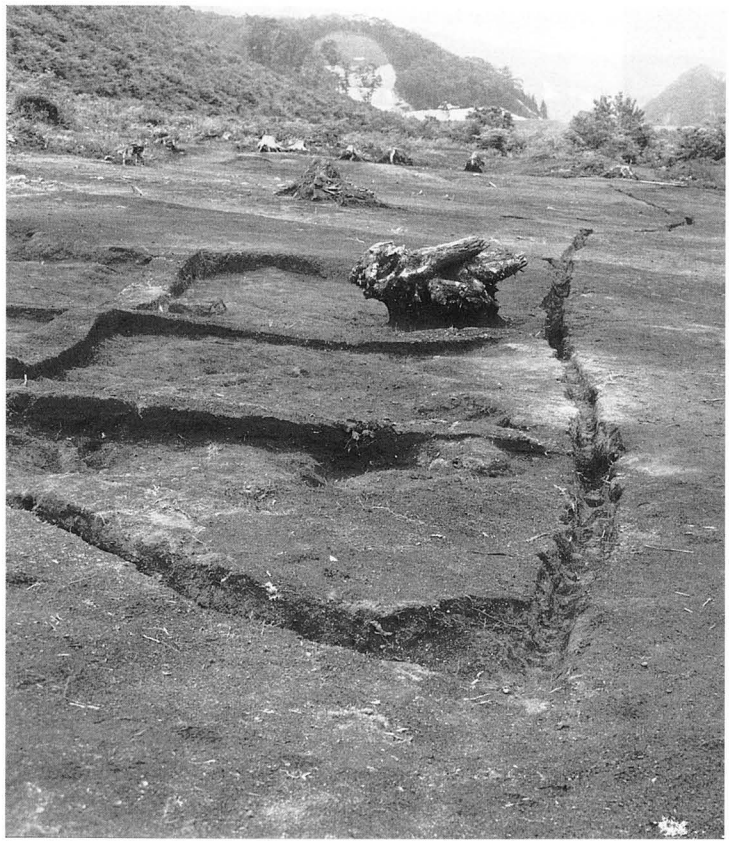


ⅢD5g溝　平面



断面 1

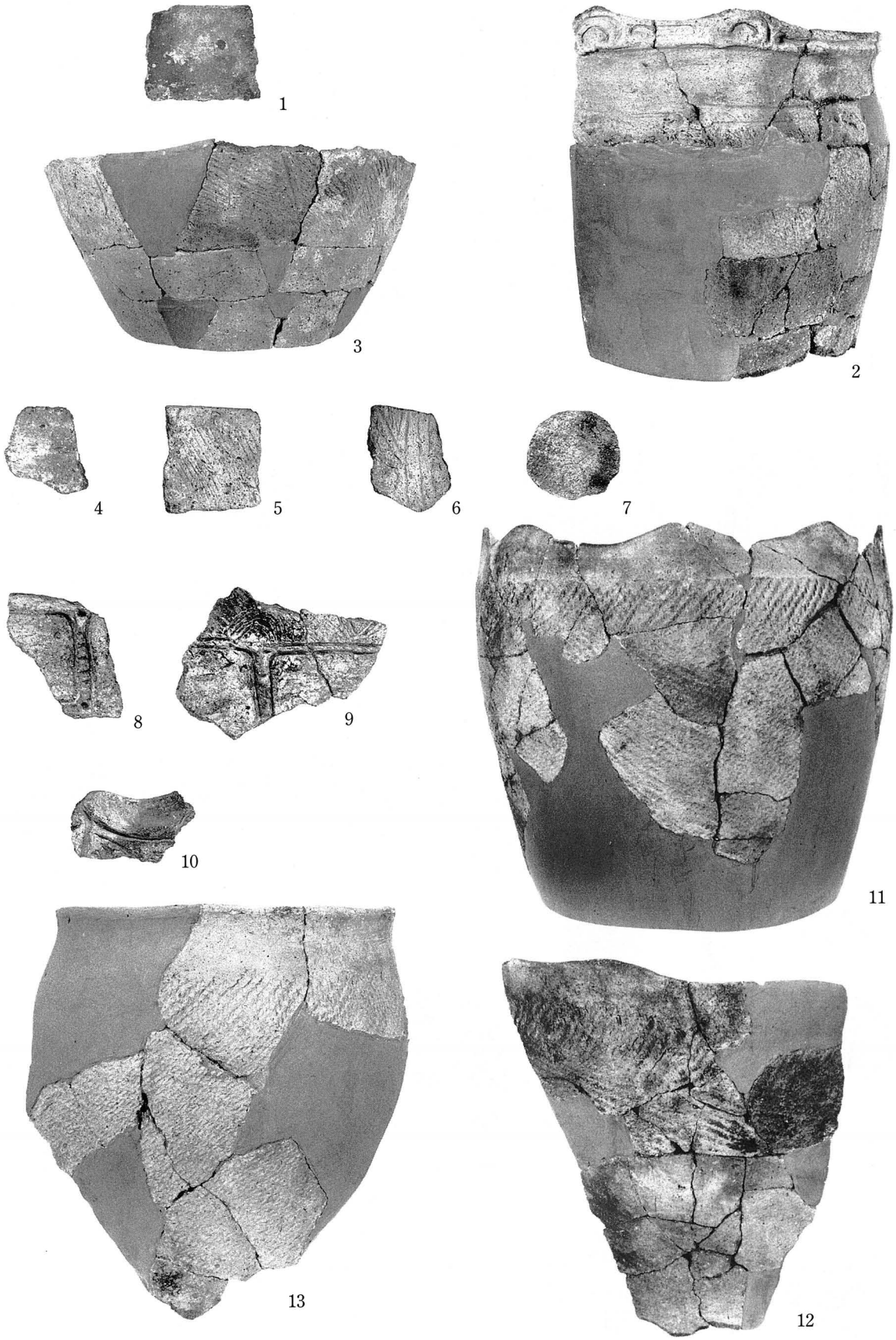
断面 2



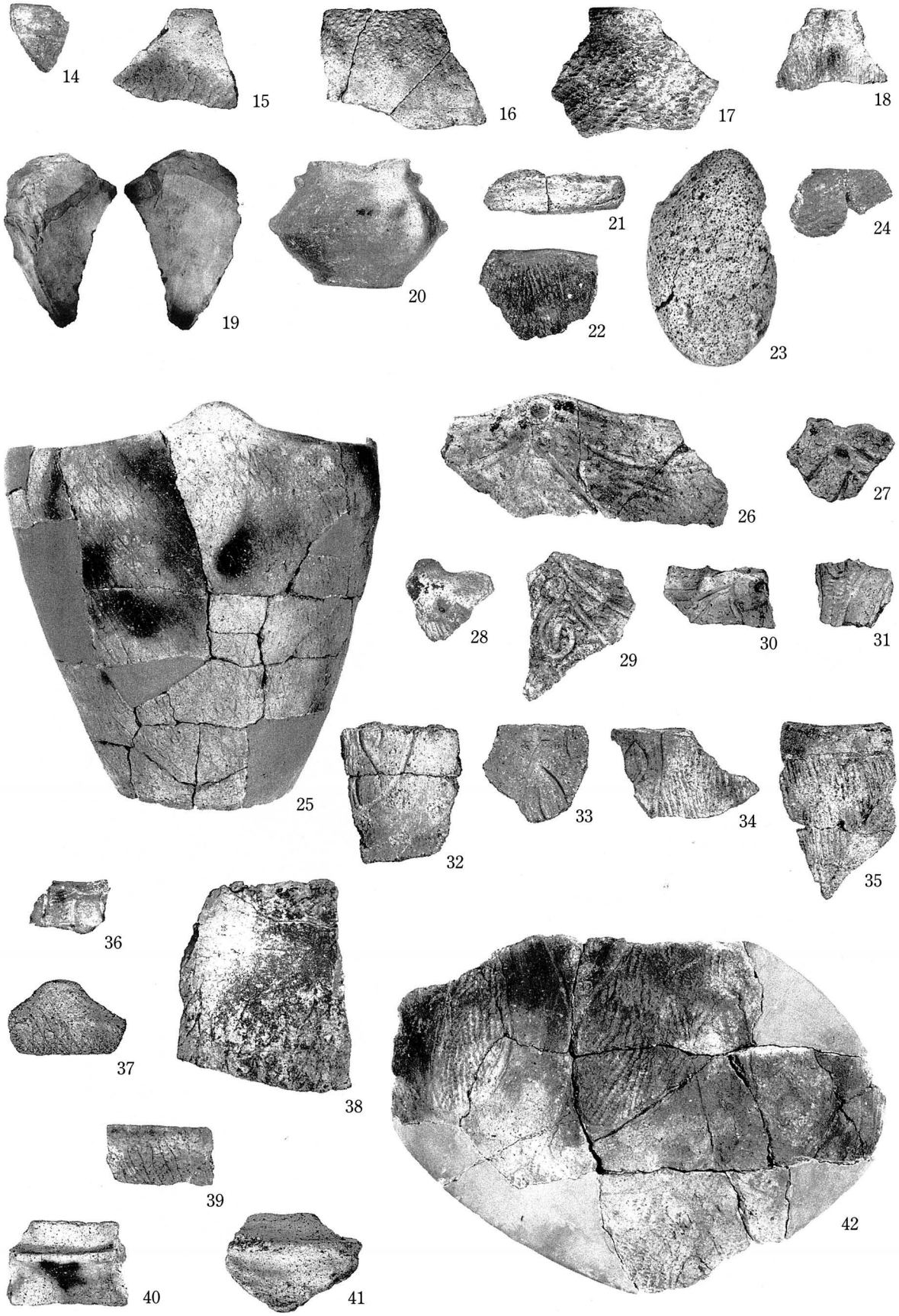
ⅣC3g溝　平面

断面

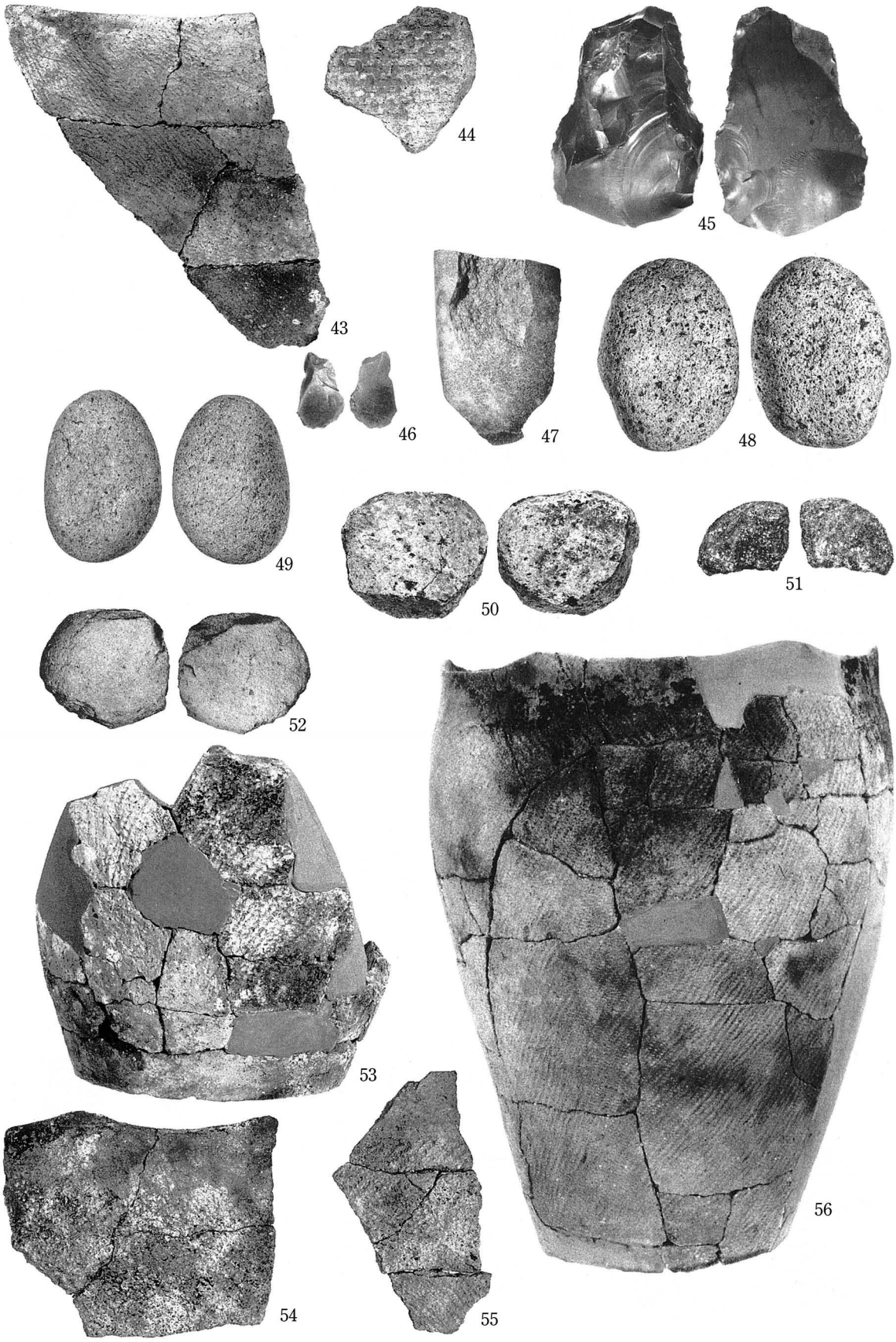
写真図版18　溝跡 2



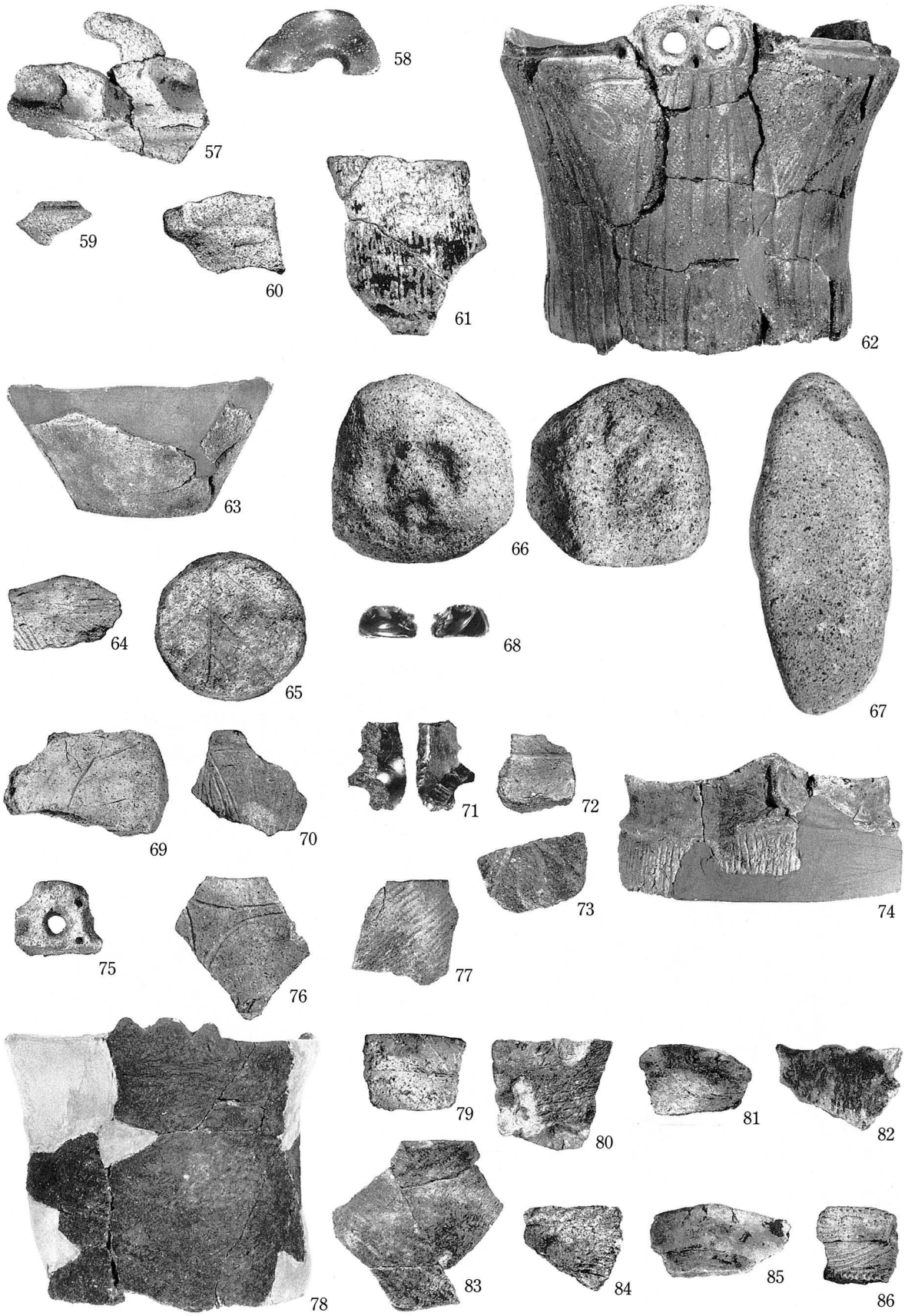
写真図版19　住居内出土遺物１



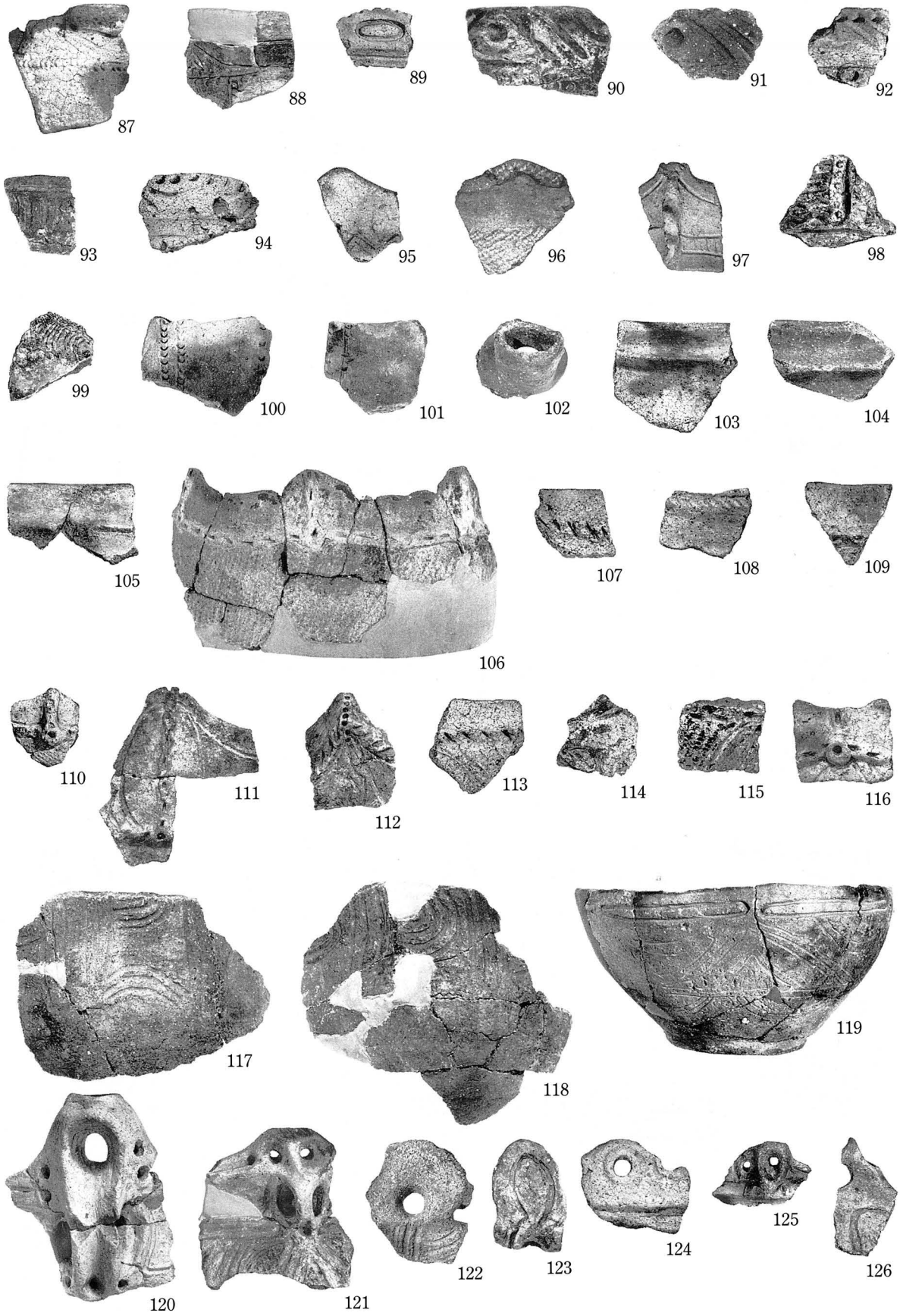
写真図版20　住居内出土遺物 2



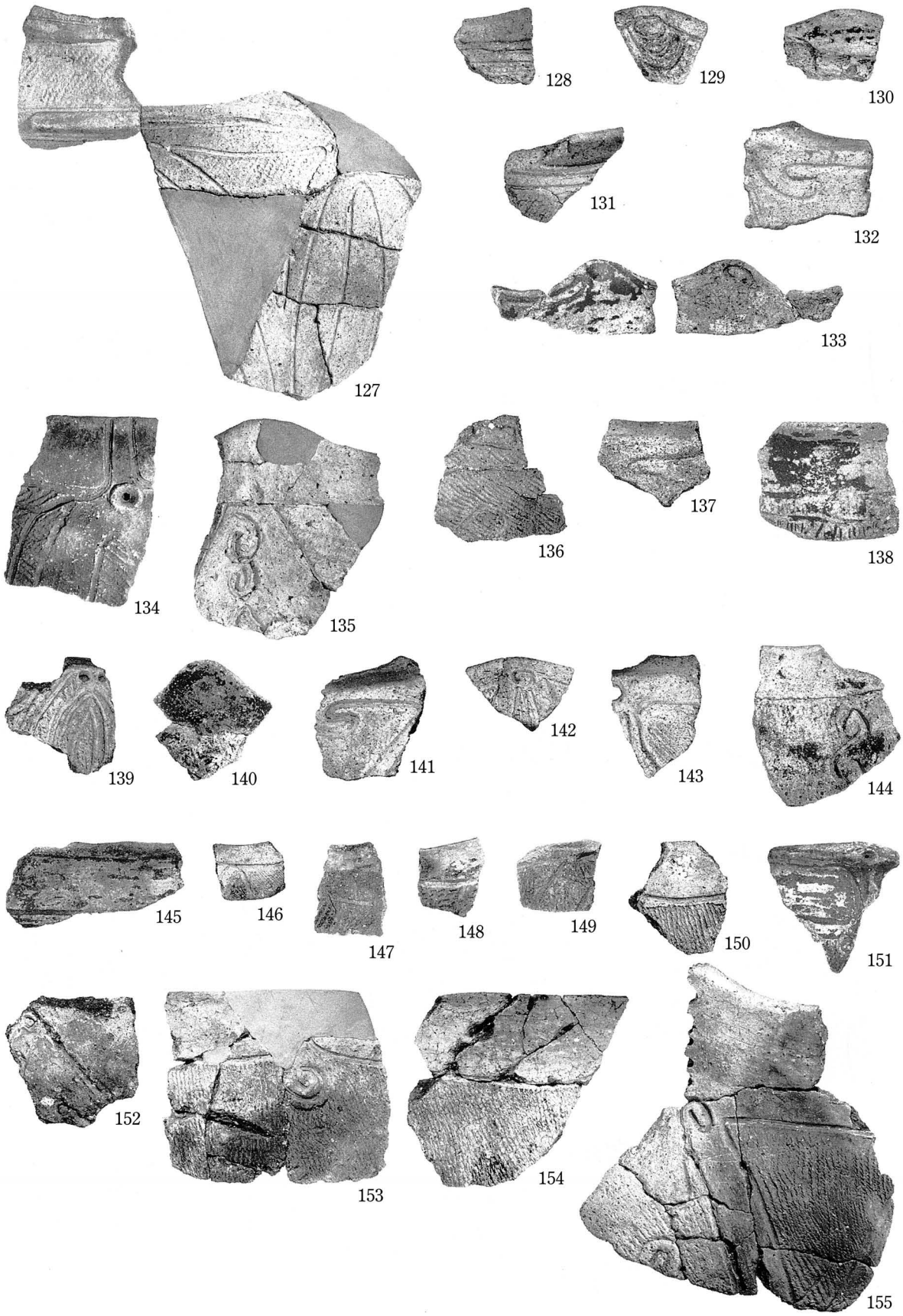
写真図版21　住居内出土遺物３・埋設土器・土坑内出土遺物１



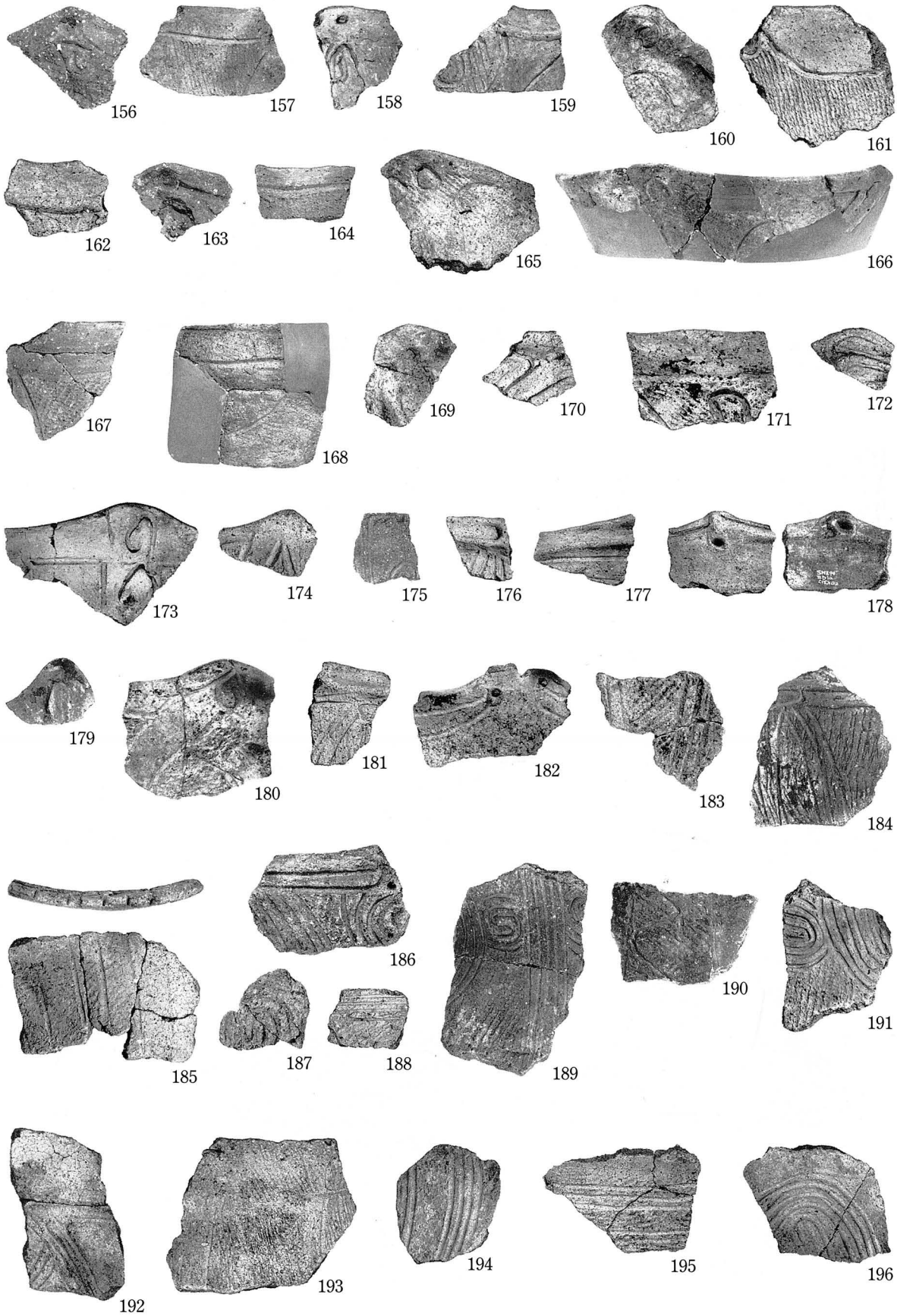
写真図版22　土坑内出土遺物２・溝跡出土遺物・遺構外出土石器１



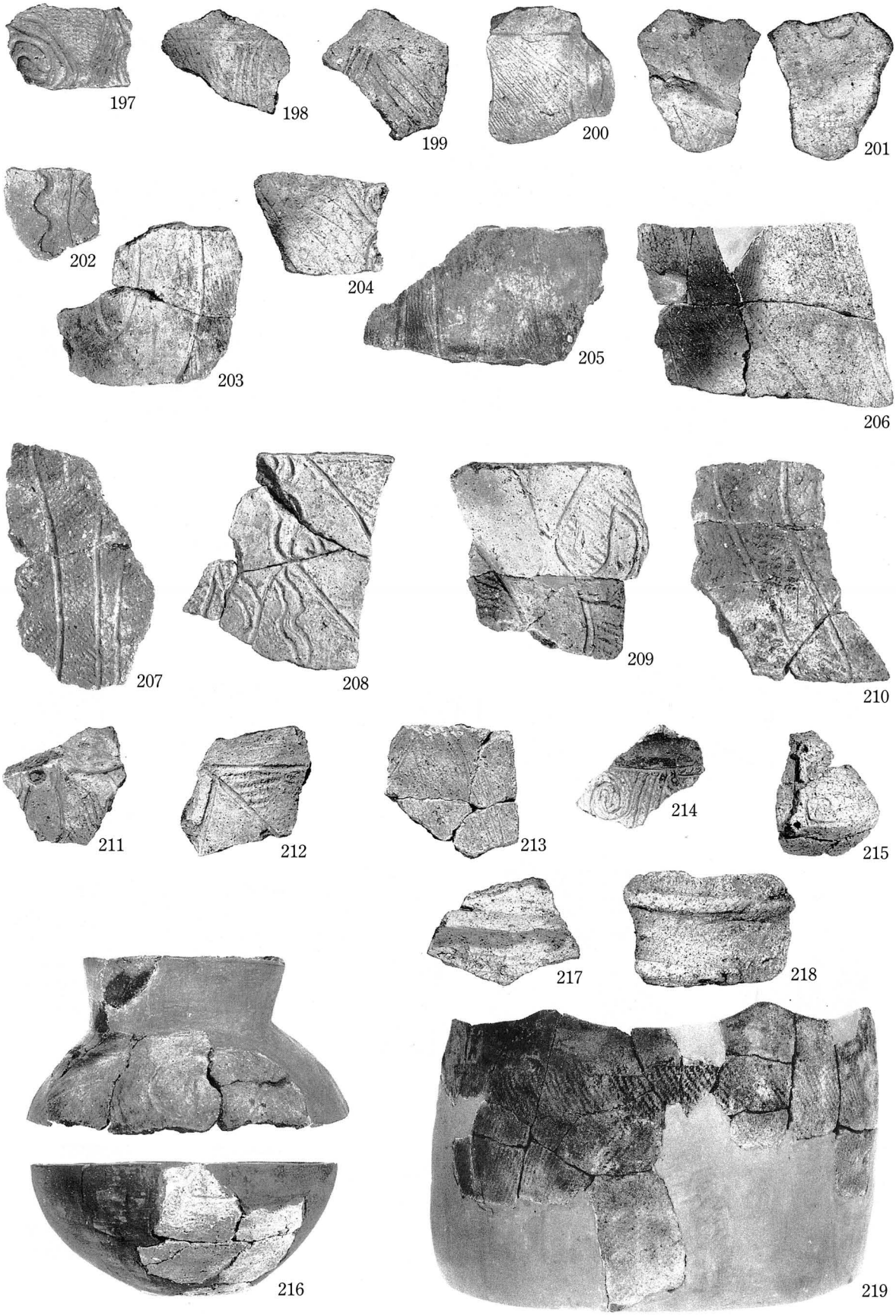
写真図版23　遺構外出土石器 2



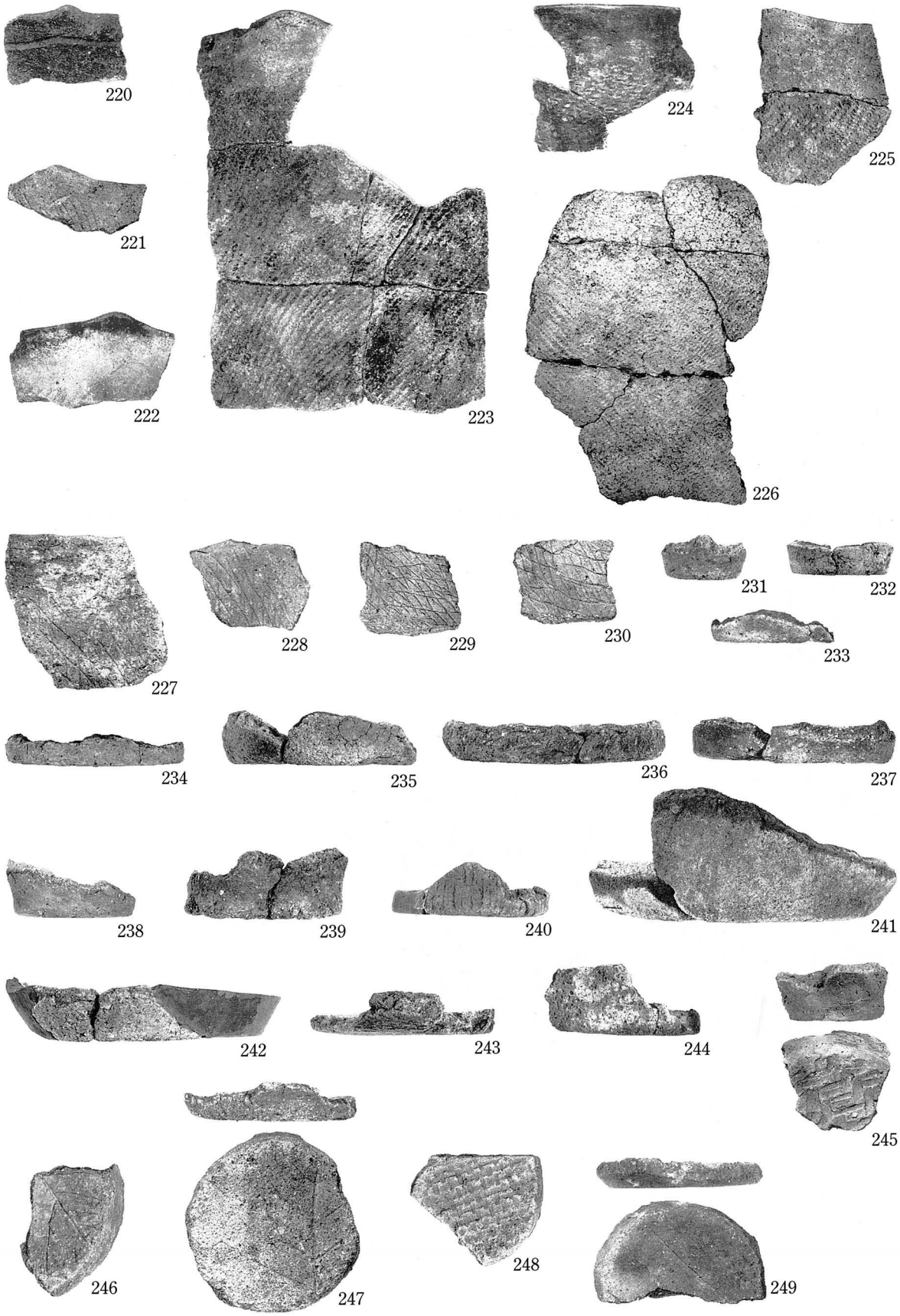
写真図版24　遺構外出土石器３



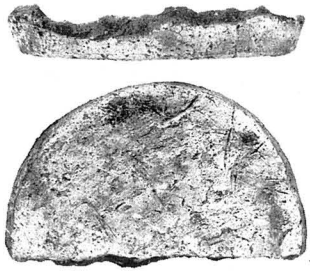
写真図版25　遺構外出土石器４

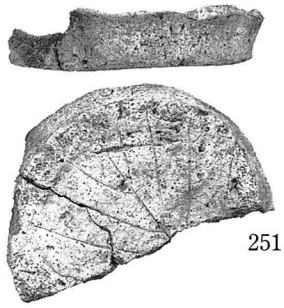


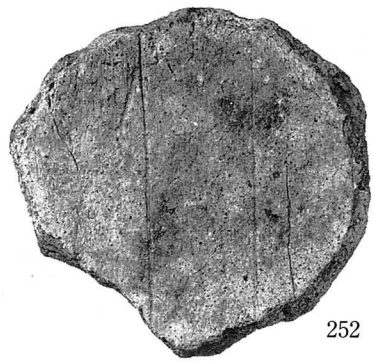
写真図版26　遺構外出土石器５



写真図版27　遺構外出土石器６

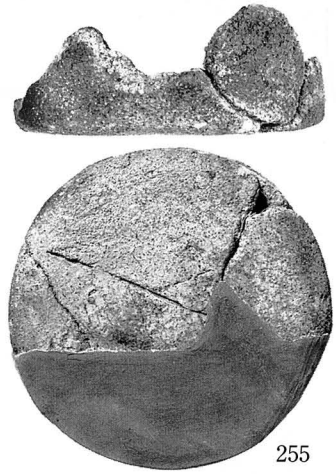

250

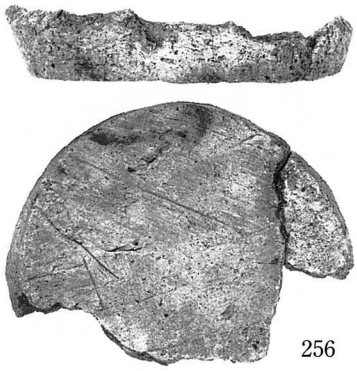

251


252

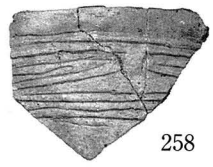
253

254


255


256

257

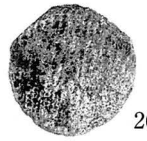

258

259

260

261

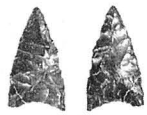
262


263

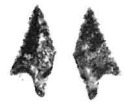
264

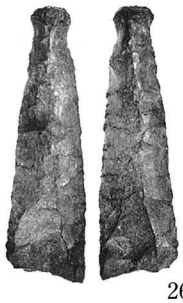
写真図版28　遺構外出土石器７・土製品

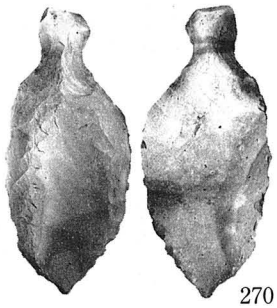
265

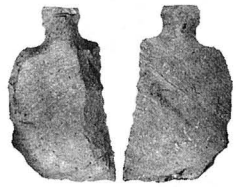

266

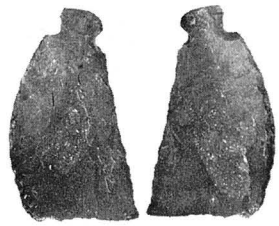
267

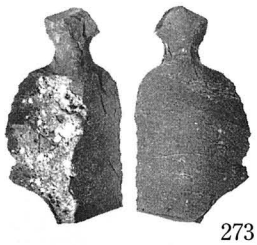

268

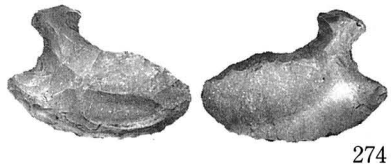

269

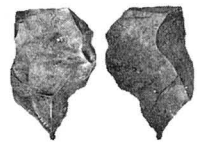

270

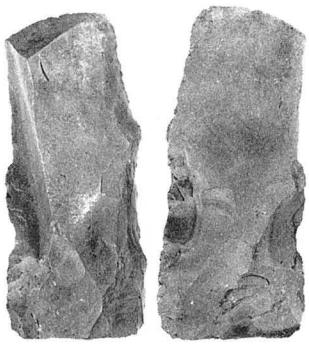

271

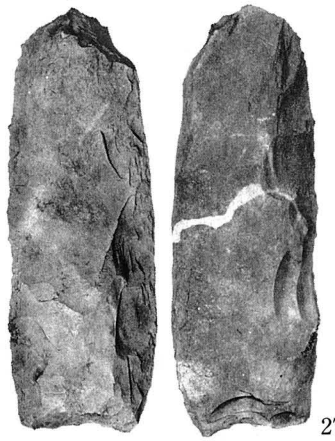

272

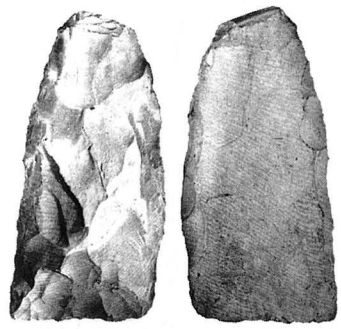

273


274

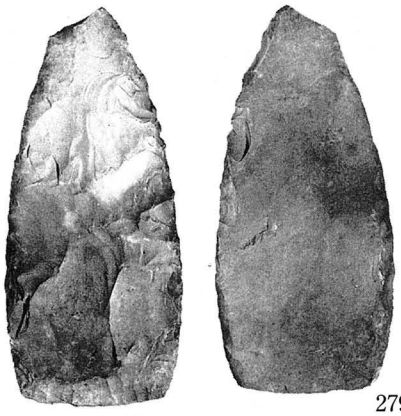

275

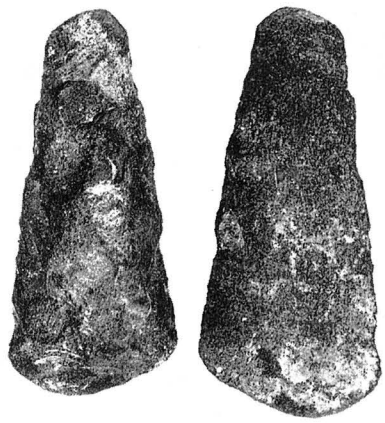

276

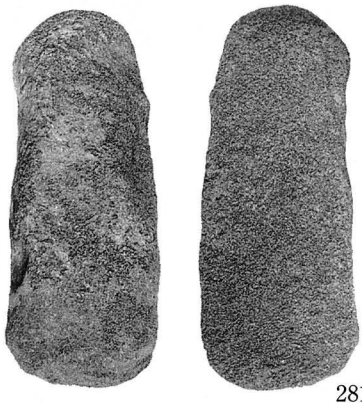

277

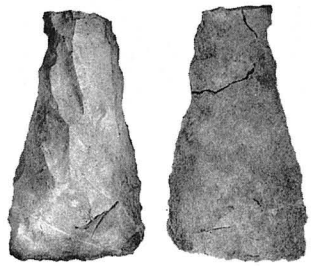

278

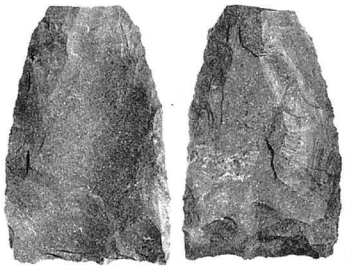
写真図版29　遺構外出土石器 1

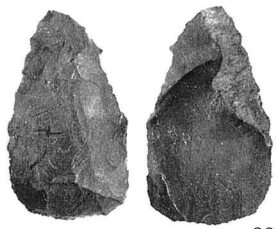

279

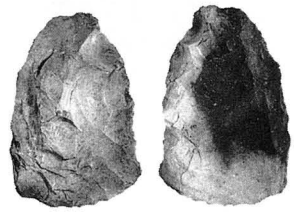

280

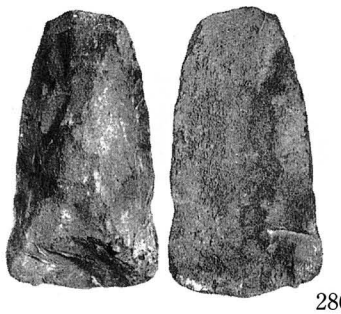

281

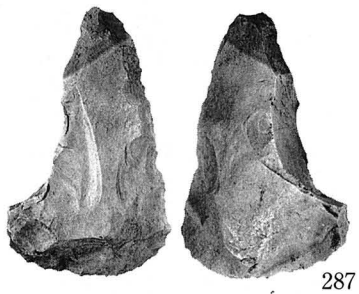

282

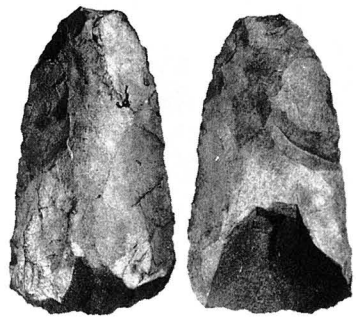

283


284


285

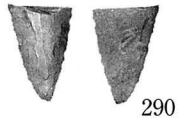

286


287

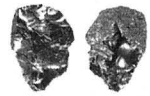

288

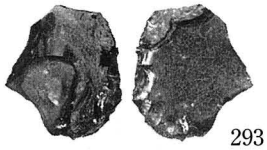
写真図版30　遺構外出土石器 2

289


290

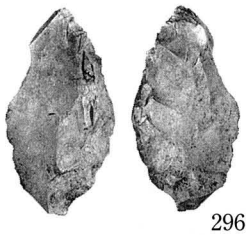
291

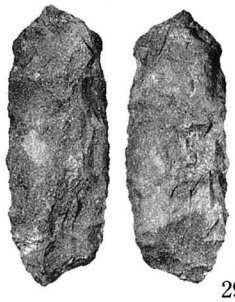

292

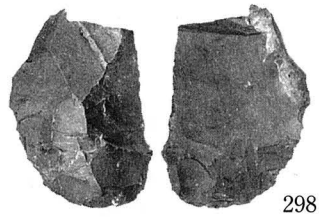

293

294

295


296

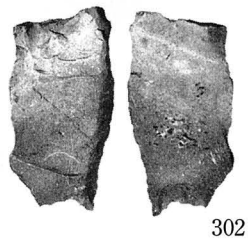

297


298

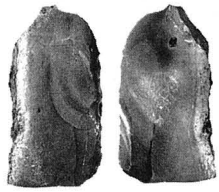
299

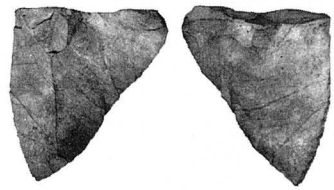
300

301

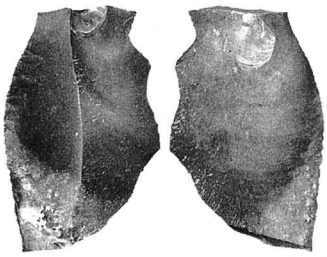

302

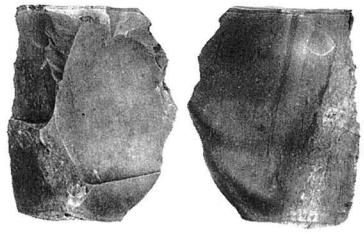
303

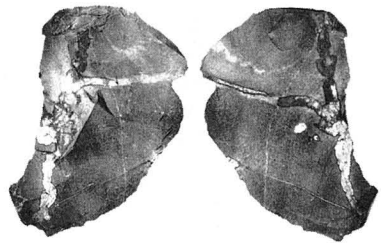

304

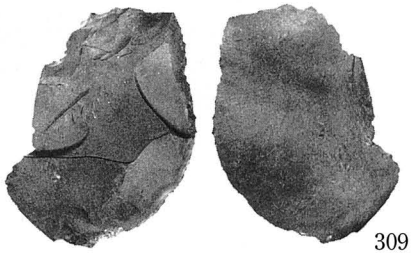

305

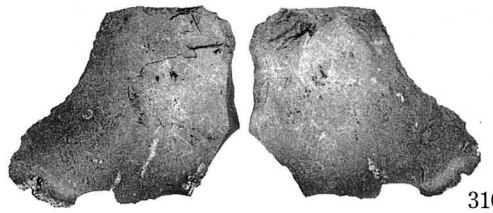
写真図版31　遺構外出土石器 3

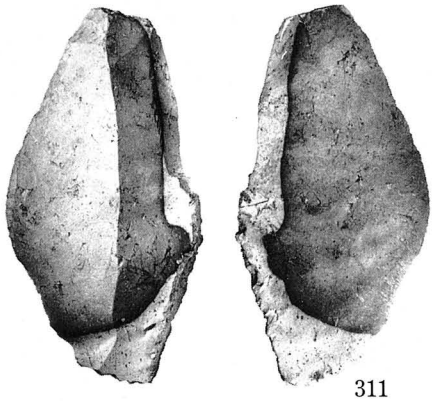

306

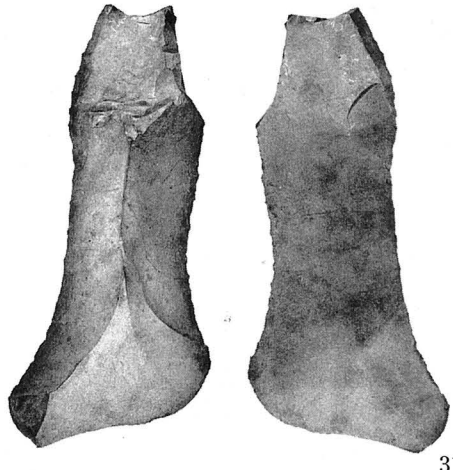

307

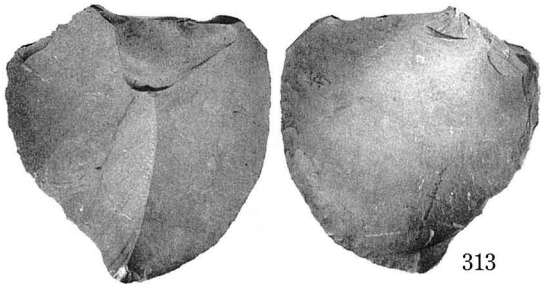

308

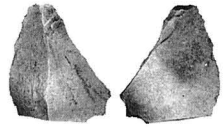

309

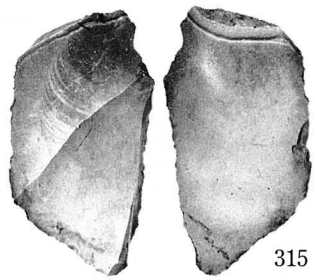

310


311


312

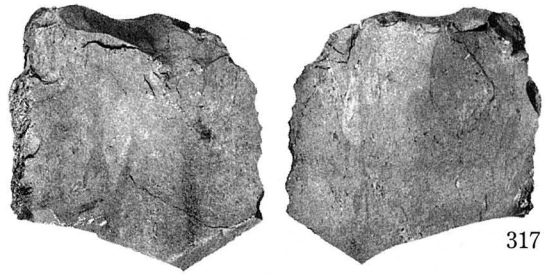

313

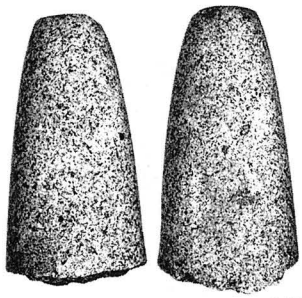

314

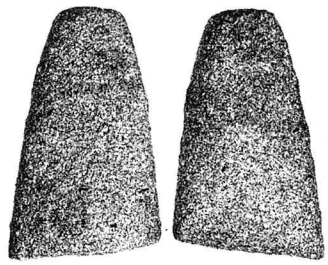

315

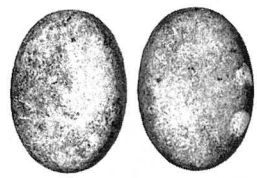
写真図版32　遺構外出土石器４

316


317

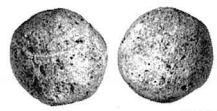

318


319


320

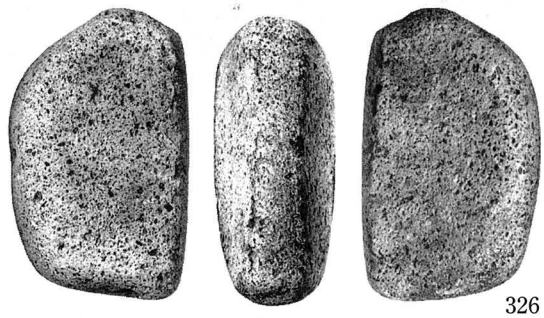
321

322


323

324

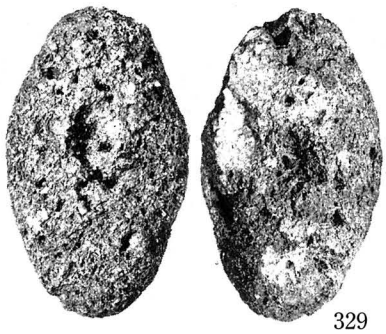
325

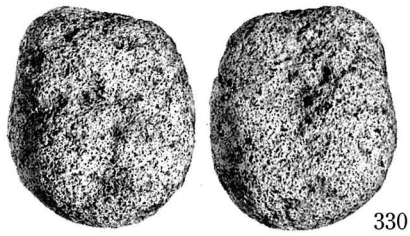

326

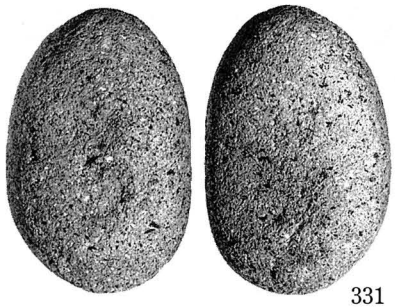
327

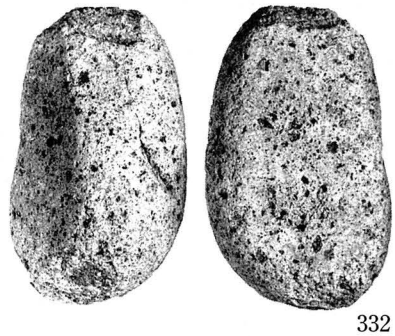
328

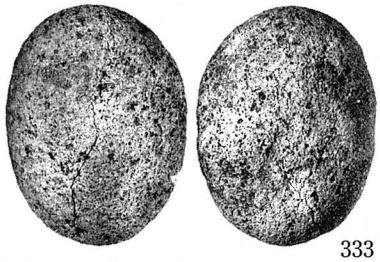
写真図版33　遺構外出土石器５

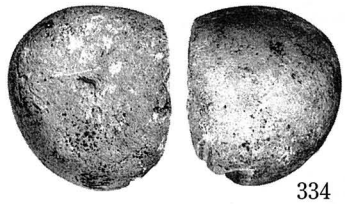

329

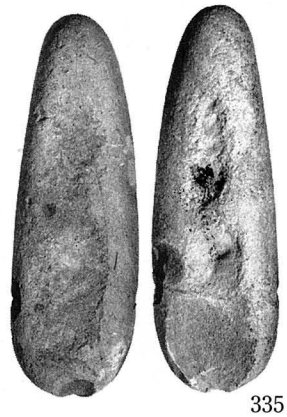

330

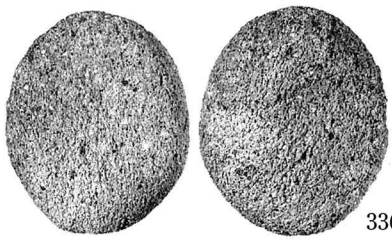

331

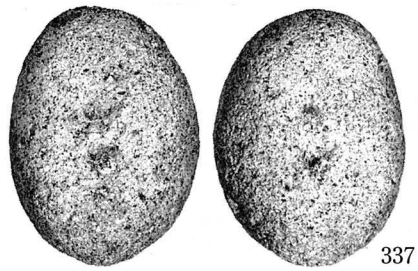

332


333

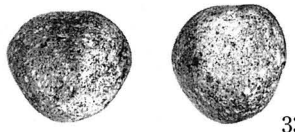

334


335

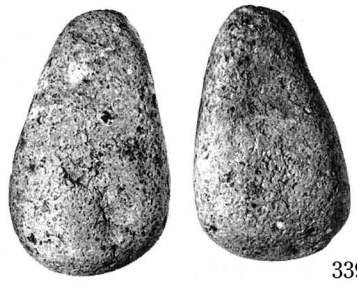

336


337

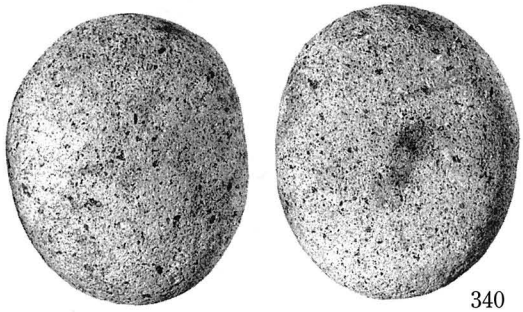
写真図版34　遺構外出土石器 6



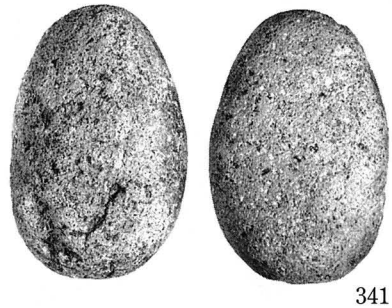
338



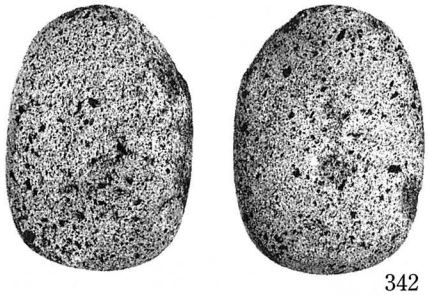
339



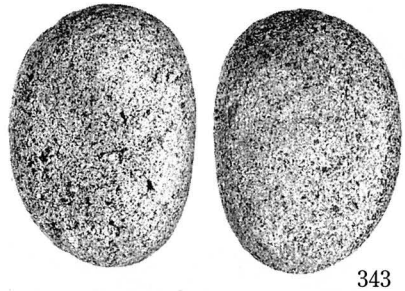
340



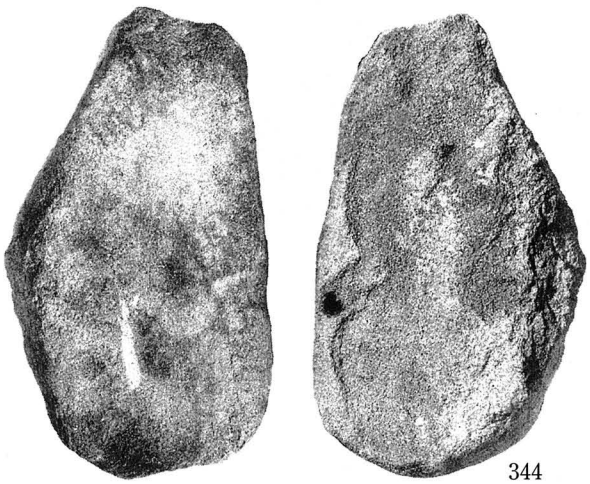
341



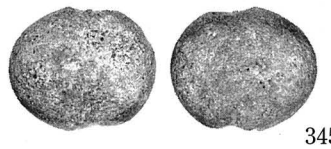
342



343



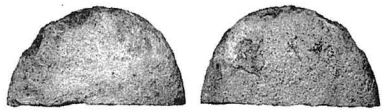
344

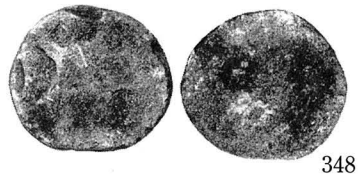


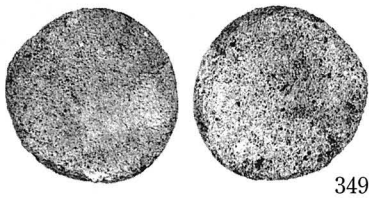
345

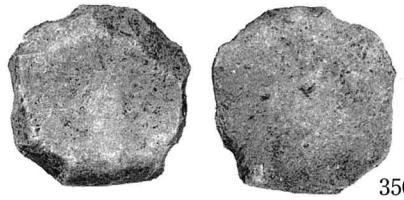
写真図版35　遺構外出土石器７

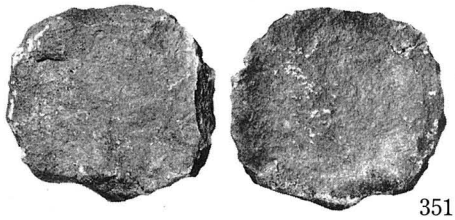
346

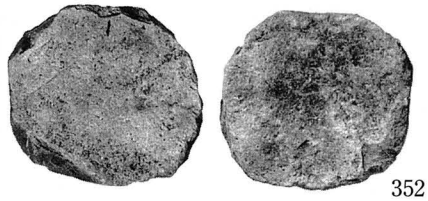

347


348

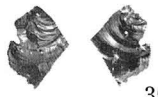

349


350

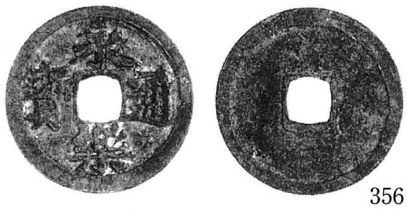

351

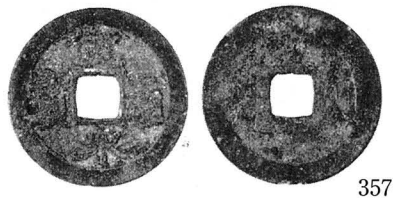

352

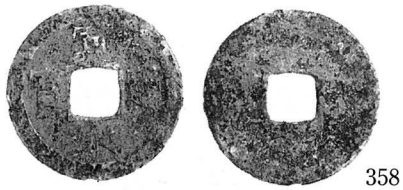
353

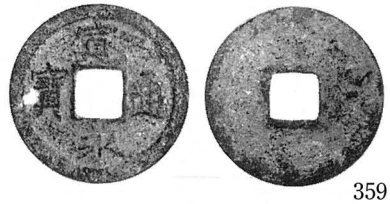

354

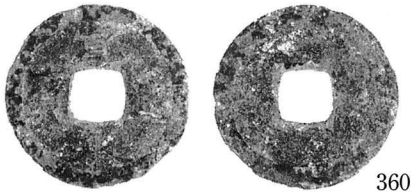
355


356


357


358


359


360

写真図版36　遺構外出土石器８・石製品・古銭

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化センター職員

【職　員】

所　長	伊藤民也	副所長	櫻田次男

［管理課］

管理課長	川浪清徳	嘱　託	千葉芳夫
管理課長補佐	山崎善光	〃	藤島恵子
主　査	立花多加志	〃	新田トヨ
主　事	日影睦夫	〃	佐々木光重

［調査第一課］

調査第一課長	佐々木勝
調査第一課長補佐	佐々木清文
主任文化財専門調査員	小山内透
文化財専門調査員	赤石登
〃	吉田充
〃	小原眞一
〃	小笠原健一郎
〃	金野進
〃	鳥居達人
〃	金子昭彦
〃	東海林淳美
〃	阿部勝則
〃	羽柴直人
〃	小野寺正之
〃	菅原靖男
〃	長村克稔
〃	溜浩二郎
〃	菊池貴広
〃	村上拓
〃	本多準一郎
〃	北村忠昭
〃	丸山浩治
〃	村木敬
期限付専門職員	小林弘卓
〃	江藤淳
〃	藤原賢徳
〃	菊池賢
〃	井上信介
〃	川又晋
〃	吉田真由美

［調査第二課］

調査第二課長	高橋與右衛門
調査第二課長補佐	中川重紀
主任文化財専門調査員	高橋義介
〃	金子佐知子
文化財専門調査員	中田迪
〃	工藤道孝
〃	古舘貞身
〃	阿部真澄
〃	松尾芳幸
〃	工藤徹
〃	前田稔
〃	岩渕計
〃	早坂悟
〃	濱田宏
〃	安藤由紀夫
〃	高木晃
〃	千葉正彦
〃	佐藤淳一
〃	半澤武彦
〃	杉沢昭太郎
〃	中村直美
〃	(星　雅之)
期限付専門職員	鈴木聡
〃	吉川徹
〃	北田勲
〃	吉田里和
〃	原美津子
〃	齋藤麻紀子
〃	島原弘征

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第343集

尿前Ⅱ遺跡B地区発掘調査報告書

胆沢ダム建設事業関連遺跡発掘調査

印刷　平成12年9月23日
発行　平成12年9月30日

発行　㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853　盛岡市下飯岡11地割185番地
TEL(019)638-9001
印刷　有限会社光文社印刷
〒020-0107　盛岡市松園3-12-1
TEL(019)661-3441

©岩手県文化振興事業団埋蔵文化センター 2000